

# 大畠南古墳群発掘調査報告

1993年

石川県立埋蔵文化財センター



# 大畠南古墳群発掘調査報告

石川県立埋蔵文化財センター



## 例 言

- 1 本書は、<sup>すずしかすがのねぼたけ</sup>珠洲市春日野大島に所在する<sup>ねぼたけのみ</sup>大島 南古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、県土幹線軸道路整備事業に係る事前調査で、県農林水産部耕地建設課の依頼を受けて、石川県立埋蔵文化財センターが調査を実施した。現地調査は、同調査第一課主事伊藤雅文を担当として、平成2年5月16日～同年8月6日までおこなった。
- 3 現地調査に際し、田畑弘・真智富子氏の補助を得た。
- 4 現地調査および資料整理から報告書作成に至るまで、石川県珠洲土地改良事務所・珠洲市教育委員会には全面的な御協力を頂いた。また、現地調査に際し、森浩一先生・和嶋俊二先生にご指導を賜ったほか、鳥毛正明・竹内虎吉の諸氏には多くのご教示を得ました。感謝いたします。
- 5 資料整理には、田畑弘、小松隆史、海野美香子、浅野豊子諸氏の補助を得た。また、石器の観察や石質および実測に際し、同僚の本田秀生氏にご教示を頂いた。感謝いたします。
- 6 本書の執筆は、伊藤雅文と小松隆史がおこなった。小松は第1章を、伊藤がその他を執筆した。編集は伊藤がおこなった。
- 7 本文中で使用する石室の左右の区別は、奥壁から石室開口部を見た場合である。また、特に記さない限り「北」は真北で表示している。



Fig 1 見附島をバックにした調査参加者

# 目 次

第1章 位置と環境	
第1節 位置と地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査の経緯と経過	7
第2節 調査日誌	11
第3章 1号墳の調査	
第1節 墳 丘	14
第2節 石 室	17
第3節 遺物出土状況	24
第4節 出土遺物	28
第4章 2号墳の調査	
第1節 墳 丘	35
第2節 石 室	41
第3節 遺物出土状況	44
第4節 出土遺物	47
第5章 その他の遺構等	53
第6章 総 括	
第1節 土器の年代的位置づけ	55
第2節 石室構造と使用尺度	57
第3節 珠洲の古墳・横穴墓、そして畿内政権	61

## 挿図目次

Fig. 1	見附島をバックにして	Fig. 29	1号墳出土土器(4)	34
Fig. 2	大島南古墳群の位置	Fig. 30	2号墳墳丘図	35
Fig. 3	周辺遺跡分布図	Fig. 31	2号墳墳丘土層図	37・38
Fig. 4	表土除去風景	Fig. 32	2号墳石室展開図	39・40
Fig. 5	2号墳調査風景	Fig. 33	2号墳石室土層断面図	41
Fig. 6	大島南古墳群調査前測量図	Fig. 34	2号墳側壁詳細図	42
Fig. 7	大島南古墳群調査後測量図	Fig. 35	2号墳棺推定部と土器配置概念図	43
Fig. 8	大島南古墳群周辺の古墳	Fig. 36	2号墳遺物出土状況	45
Fig. 9	石材解体移動風景	Fig. 37	2号墳遺物出土関係図	46
Fig. 10	遺物整理風景	Fig. 38	2号墳出土耳飾	47
Fig. 11	現地説明会風景	Fig. 39	2号墳出土鉄鏃	47
Fig. 12	1号墳墳丘図	Fig. 40	2号墳出土杯法量図	48
Fig. 13	1号墳墳丘土層図	Fig. 41	2号墳出土土器(1)	49
Fig. 14	1号墳石室土層断面図	Fig. 42	2号墳出土土器(2)	50
Fig. 15	1号墳石室展開図	Fig. 43	2号墳出土土器(3)	51
Fig. 16	1号墳側壁詳細図	Fig. 44	2号墳出土土器(4)	52
Fig. 17	1号墳第二段石材設置状況	Fig. 45	S K 01実測図	53
Fig. 18	1号墳玄門部の袖構造	Fig. 46	出土石器	54
Fig. 19	1号墳玄門構造	Fig. 47	航空写真	54
Fig. 20	1号墳石室内遺物出土状況	Fig. 48	1号墳出土須恵器杯・蓋のセット関係	55
Fig. 21	1号墳土器群出土状況	Fig. 49	能登7世紀の古墳出土杯G	56
Fig. 22	1号墳棺推定部と土器配置	Fig. 50	稲舟窯出土須恵器	56
Fig. 23	1号墳出土管玉・刀子	Fig. 51	1号墳唐尺方眼網	58
Fig. 24	1号墳出土土器(1)	Fig. 52	2号墳唐尺方眼網	60
Fig. 25	1号墳出土土器(2)	Fig. 53	胡籙と双竜文環頭	62
Fig. 26	1号墳杯法量図	Fig. 54	二ノ谷横穴墓群出土土器	63
Fig. 27	1号墳出土土器(3)	Fig. 55	古墳時代後期横穴墓群の分布と水系	65
Fig. 28	1号墳調査風景			

## 図版目次

- |        |                        |        |                      |
|--------|------------------------|--------|----------------------|
| P L 1  | 航空写真（北より／南より）          | P L 18 | 1号墳（出土遺物 3）          |
| P L 2  | 航空写真（真上より）             | P L 19 | 1号墳（出土遺物 4）          |
| P L 3  | 1号墳（調査前全景／盗掘坑の状況）      | P L 20 | 2号墳（調査前全景）           |
| P L 4  | 1号墳（全景）                | P L 21 | 2号墳（全景）              |
| P L 5  | 1号墳（墳丘全景 開口部より／奥壁より）   | P L 22 | 2号墳（墳丘全景）            |
| P L 6  | 1号墳（墳丘全景／石室全景 開口部より）   | P L 23 | 2号墳（墳丘全景／石室全景 開口部より） |
| P L 7  | 1号墳（石室全景／奥壁）           | P L 24 | 2号墳（奥壁／奥壁隅右／奥壁隅左）    |
| P L 8  | 1号墳（左側壁 奥より／開口部より）     | P L 25 | 2号墳（右側壁 奥より／開口部より）   |
| P L 9  | 1号墳（玄門部／右側壁 玄門）        | P L 26 | 2号墳（左側壁）             |
| P L 10 | 1号墳（玄門部たち割り／奥壁たち割り）    | P L 27 | 2号墳（遺物出土状況）          |
| P L 11 | 1号墳（左側壁たち割り／右側壁たち割り）   | P L 28 | 2号墳（遺物出土状況／周溝遺物出土状況） |
| P L 12 | 1号墳（遺物出土状況 開口部から／奥壁から） | P L 29 | 2号墳（石室内埋土状況／前庭部土層）   |
| P L 13 | 1号墳（遺物出土状況 土器群上）       | P L 30 | 2号墳（墳丘土層状況）          |
| P L 14 | 1号墳（遺物出土状況 土器群下）       | P L 31 | 2号墳（盛土除去）            |
| P L 15 | 1号墳（周溝堆積状況／石室内埋土状況）    | P L 32 | 2号墳（出土遺物 1）          |
| P L 16 | 1号墳（出土遺物 1）            | P L 33 | 2号墳（出土遺物 2）          |
| P L 17 | 1号墳（出土遺物 2）            | P L 34 | 2号墳（出土遺物 3）          |



# 第1章 大島南古墳群の位置と環境

## 第1節 位置と地理的環境

珠洲市は能登半島の北東先端部に位置し、三方を海に囲まれている。その海岸線も北側は奥能登特有ともいえる荒々しい岩石海岸であるが、市域東南側では比較的なだらかな様相を見せている。珠洲市を地形的に概観すると北西部の宝立山地、その東南側をとりまく丘陵地、海成段丘群、沖積低地に大別できる。とりわけ平床台地に代表される市域東部の海成段丘は、沖積面を含め最低5段の明瞭な平坦面を形成し、日本海側でも有数なものである。市域東南側では、飯田湾に注ぐ何本かの河川が、小規模ながら沖積低地を形づくっている<sup>(1)</sup>。

ここで報告する大島南古墳群は、盤若川・鶴飼川と竹中川によって形成された沖積地に挟まれ、半島状に現汀線近くまで伸びている丘陵南斜面に大島古墳群と隣接した形で位置し、東南方向に鶴飼の市街、見附島を望む。付近は農免道路開設のため大きくその様相を変えており、交通状況が良くなった反面、周辺的环境保護が今後の問題となろう。

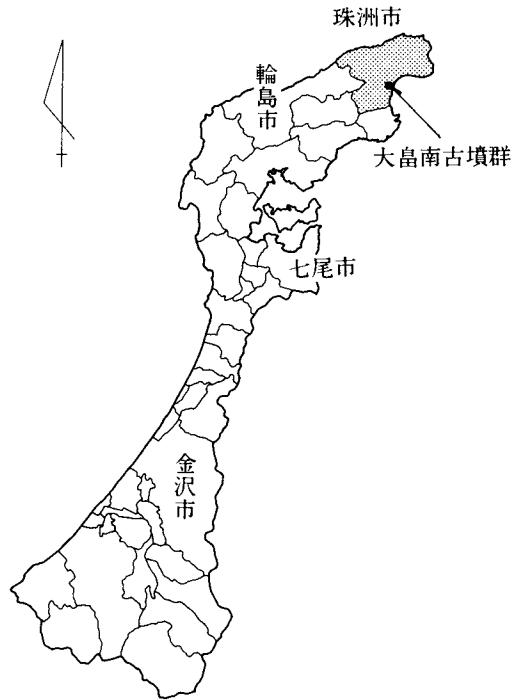


Fig 2 大島南古墳群の位置

## 第2節 歴史的環境

**旧石器時代** 珠洲市では、縄文時代草創期の所産と考えられる尖頭器が2点、それぞれ単独で出土している。三崎町雲津、若山町井林で偶然発見されたものである<sup>(2)</sup>。

**縄文時代** 珠洲市域の縄文時代の遺跡は、40を超える数が確認されている。その大半は、丘陵上、もしくは沖積低地に近い斜面に分布するが、飯田町以南ではいくつか沖積低地にも存在する。しかし若山町、野々江町、正院町など市東南地域の沖積低地では確認されておらず、沖積層の堆積状況などを含め、今後研究される余地があろう。三崎町高波の伏見川河口近くの左岸に、珠洲市の代表的遺跡の一つである高波ふるや遺跡がある。縄文前期末葉朝日下層式から後期前葉気屋式の土器に加え、弥生中期から古墳前期、さらに中世の遺物出土する長期にわたる遺跡であり、小規模ながら奥能登唯一の縄文中期後葉の貝塚が発見された<sup>(3)</sup>。他に中期末から後期初頭の加護天池遺跡、後期前葉から晩期前半の北方山岸遺跡などが知られている<sup>(4)</sup>。

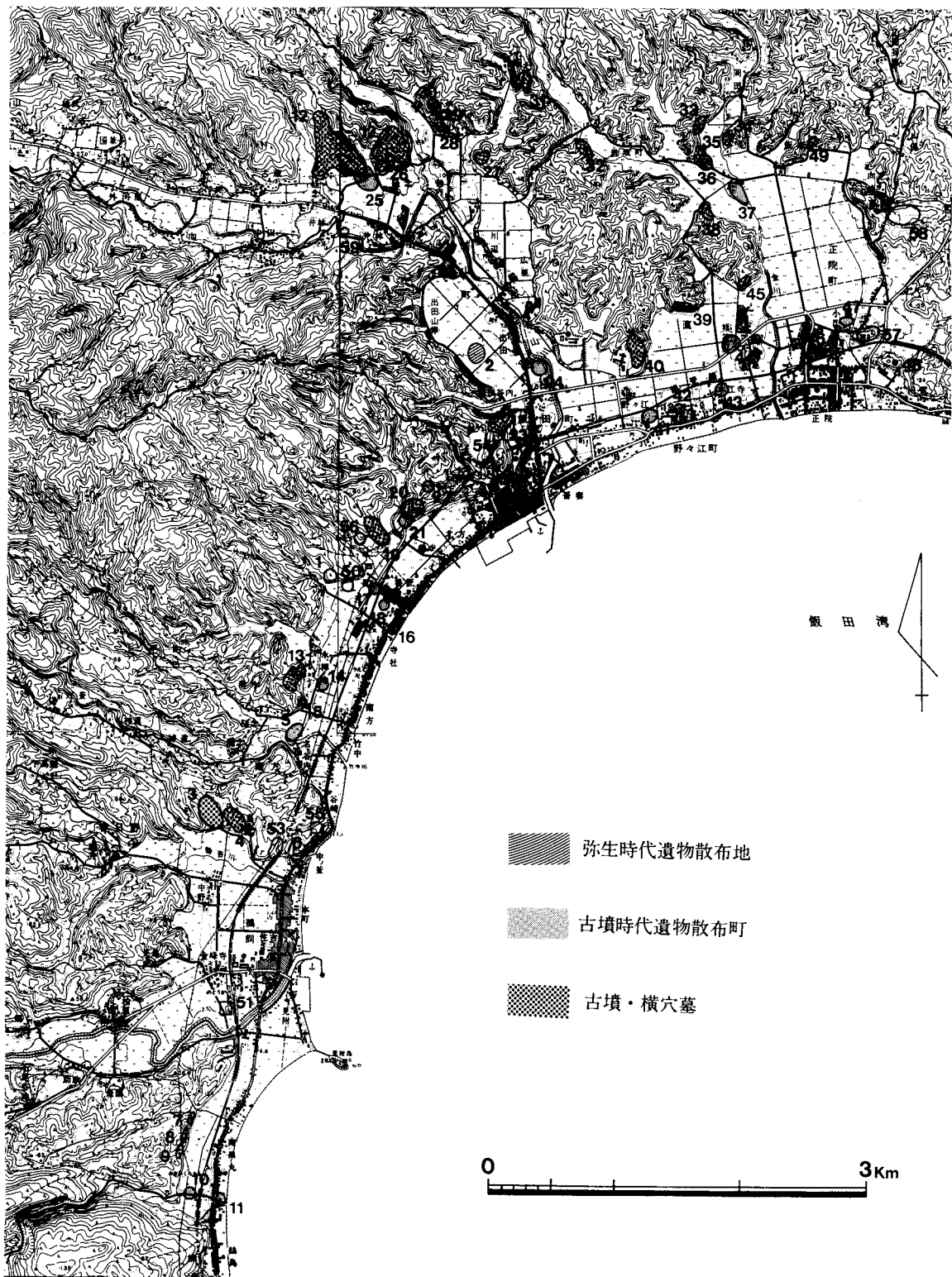


Fig 3 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	現況	時代	遺跡番号	備考
1	北方山岸遺跡	珠洲市上戸町北方	平地・田	縄文	05078	
2	出田遺跡	若山町出田	平地・田	弥生	05105	
3	大島南古墳群	宝立町春日野	丘陵・道路・山林	古墳	05018	2基以上
4	大島古墳群	宝立町春日野	丘陵斜面・果樹園・荒地		05019	1～4号墳
5	南方安栗藪B遺跡	宝立町春日野	平地・畑		05021	
6	谷崎横穴群	宝立町春日野	丘陵斜面・山林・崖		05024	11基以上
7	南黒丸八幡B横穴群	宝立町南黒丸	丘陵斜面・山林		05033	
8	南黒丸八幡A横穴群	宝立町南黒丸	丘陵斜面・山林		05034	
9	鶴島横穴群	宝立町南黒丸	丘陵斜面・山林		05035	
10	鶴島舟橋のうて遺跡	宝立町鶴島	平地・田		05041	
11	舟橋海岸遺跡	宝立町鶴島	平地・海岸		05043	
12	経念古墳群	若山町経念	丘陵・山林		05066	円墳10基以上
13	永禪寺古墳群	上戸町寺社	丘陵・屋根・山林		05083	1～6号墳
14	寺社一本杉遺跡	上戸町寺社	平地・田		05081	
15	永禪寺横穴群	上戸町寺社	丘陵斜面・山林		05079	3基確認
16	寺社鳥居浜B遺跡	上戸町寺社	平地・畑		05087	
17	永福寺遺跡	上戸町北方	丘陵斜面・山林		05088	
18	北方光貞B遺跡	上戸町北方	平地・畑		05092	
19	上戸大池古墳群	上戸町	丘陵・山林		05095	
20	上戸陣ヶ平古墳群	上戸町	丘陵・山林		05097	円墳5基
21	北方池の下B遺跡	上戸町北方	台地・田・畑		05098	
22	日光社遺跡	上戸町北方	平地・畑		05099	
23	飯田横穴群	若山町出田	丘陵斜面・山林		05104	2基
24	出田有政遺跡	若山町出田	平地・田		05106	
25	経念遺跡	若山町経念	丘陵・田		05113	
26	経念横穴群	若山町経念	丘陵斜面・山林		05115	2基以上
27	鈴内山岸古墳群	若山町鈴内	丘陵・山林		05116	
28	鈴内山岸則友横穴群	若山町鈴内	丘陵斜面・山林		05117	5基以上
29	鈴内山岸宮の高横穴群	若山町鈴内	丘陵斜面・山林		05118	12基以上
30	鈴内山岸為重横穴群	若山町鈴内	丘陵斜面・山林		05119	44基以上
31	鈴内山岸二ノ谷横穴群	若山町鈴内	丘陵斜面・山林		05120	34基以上
32	岩坂瀬山横穴群	岩坂町	丘陵斜面・山林		05121	2基以上
33	岡田横穴群	正院町岡田	丘陵斜面・山林		05123	8基確認
34	岩坂古墳群	岩坂	丘陵・山林		05124	
35	岩坂塚亀古墳群	岩坂	丘陵・山林		05125	
36	岩坂塚亀横穴群	岩坂町塚亀	丘陵斜面・山林・墓地		05126	10基以上
37	岩坂三百刈遺跡	岩坂町	平地・宅地		05127	
38	岩坂向林横穴群	岩坂町向林	丘陵斜面・山林		05128	7基以上
39	野々江ハゲノマエ横穴群	野々江町杉の木	丘陵斜面・山林		05129	25基以上
40	野々江ミョウケン山古墳群	野々江町	丘陵・山林		05130	円墳5基以上
41	野々江島田遺跡	野々江町	平地・畑		05131	
42	野々江妙珠寺遺跡	野々江町	平地・社地		05132	
43	野々江杉の木遺跡	野々江町	平地・畑		05133	
44	熊谷神社遺跡	熊谷町	平地・田		05134	
45	熊谷羽黒山横穴群	熊谷町	丘陵斜面・山林		05136	2基以上
46	正院興福寺裏畑遺跡	正院町小路	平地・社地		05138	
47	正院寺町遺跡	正院町小路	平地・社地		05141	
48	正院トノヤマ古墳	正院町川尻	丘陵・山林		05143	
49	飯塚1号横穴	正院町飯塚	台地斜面・山林		05149	
50	北方山岸B遺跡	上戸町北方	平地・田	古代	05090	
51	鶴飼三つ寺遺跡	宝立町鶴飼	平地・畑		05030	
52	飯田町遺跡	飯田町	平地・宅地・道路	中世	05102	
53	春日野大島窯跡	宝立町春日野	台地・畑・老人ホーム		05023	
54	飯田城山遺跡	飯田山	山地・山林		05103	
55	三杯焼窯跡	宝立町春日野	丘陵・山林	近世	05022	
56	あまきび焼窯跡	上戸町寺社	平地・林		05094	
57	カンド山武家屋敷跡	正院町	台地・山林		05142	
58	御山武家屋敷跡	正院町川尻	台地・荒地・畑		05148	
59	井林庚申塚	若山町経念	平地・田・畑		05111	

Tab. 1 周辺遺跡分布図地名表

弥生時代 弥生土器の土器片は、高波ふるや遺跡をはじめ、数ヶ所で確認されているが、縄文時代や、後に続く古墳時代に比べその数は極めて少ないと言える。珠洲市に限ったことではないが、奥能登は低い丘陵と台地が土地の大部分を占め、当時の水稻耕作に適した低湿地が少なかったことが、その理由であると考えられる。市史編纂を機に粟津かんじや畑遺跡で行われた調査により、弥生後期末葉、柳田式の時期の遺跡であることが確認された。これにより、珠洲では弥生時代後期末にいたって水田開発が進み、農耕集落が急増、古墳時代につながると考えられている<sup>(5)</sup>。

古墳時代 古墳時代になると、珠洲市域の遺跡は増加し、農耕による生活も安定したと考えら

れる。集落址と考えることのできる遺跡が多いことも事実の一つだが、古墳や横穴墓の数の多さがそれをものがる。ことに横穴墓は北陸地方でも南加賀地域、小矢部地域、氷見地域とともに分布の集中する地域の一つでもある<sup>(6)</sup>。珠洲で古墳が造られはじめたのは4世紀中頃、鈴内地区においてであると言われている。鈴内地区、経念地区など、若山川左岸の丘陵部において総数150基にも達する古墳が確認されており、<sup>(7)</sup>珠洲市のみならず奥能登にとって、極めて重要な意味をもつと考えられている。この時期は口能登地域では小田中親王塚や亀塚（ともに鹿島町）や、雨の宮1・2号墳（鹿西町）といった能登一円の「王墓」とでも言うべき大型墳が築造されていた時期であり、珠洲地域では古墳の発生期であったと考えられるためである。その後、竹中川東岸の丘陵上に永禪寺古墳群が築造される。1号墳は1947年に珠洲郷土史研究会が、2号墳は1952年に九学会調査古墳班が発掘しており、1号墳の組合式箱形石棺からは、直刀、鹿角装朱塗りの剣などのほか、全国的にも稀少な胡ろくが出土している。石棺、鹿角装剣、胡ろくなどから、吉岡康暢氏は5世紀末から6世紀初頭の古墳であるとしており、この時期、能登の中核的政治権力を有したと見られている七尾地域の勢力下に、珠洲地域の首長層は入っていたのではないかと考えられている。<sup>(8)</sup>

珠洲市域で横穴墓が築造され始めるのは、6世紀中頃とされている<sup>(9)</sup>。前述したように古墳時代後期珠洲市域の横穴墓は、一地域の横穴墓の数としては北陸地方でも群を抜いている。吉岡氏は水系毎に5つのブロックに分け、<sup>(10)</sup>田嶋明人氏はこのブロックの在り方を「水系などの自然条件を主要な契機として成立したのではないか」としている。<sup>(11)</sup>いずれにしても、弥生時代の珠洲を見てもわかるように、河川の中・下流の限られた土地で農耕を行わなければならなかった当地域で、水系毎に「ムラ」が発達したであろうことは想像に難しくなく、こういった集団単位の墓所がまとも造られることはごく自然なことであろう。このように、珠洲市域で横穴墓がさかんにつくられた古墳時代後期、7世紀に大畠古墳群が築造される。大畠古墳群は永禪寺古墳群の南西約1kmの丘陵南斜面に位置し、四基程度の円墳から成る。多量の須恵器を出土し、横穴式石室を有する1号墳や、金銅装双竜式環頭大刀柄頭を出土した4号墳の存在は、かなり広い範囲を支配下におさめた「ムラ」の有力者層である豪族と、その親族の墳墓であったと考えてよいと思われる。横穴墓の隆盛の中にあって当報告の大畠南古墳群と近接するため、両者の関係は十分考慮する必要があるだろう。

**奈良・平安時代** 珠洲市域は、養老二年（718年）5月、律令制のもとに能登国珠洲郡となったと記録されているが、それ以前は越前国珠洲郡であった。<sup>(12)</sup>珠洲郡の郡衙（郡役所）はその地名や現在に残る方格地割から、正院地域にあったと推定されている。<sup>(13)</sup>この時期の遺跡としては、上戸町寺社の北方山岸B遺跡が奈良時代から平安時代の遺物包含地であることが確認されているし、北方の北方遺跡、鶴飼の鶴飼三つ寺遺跡など数ヶ所が知られている。更に1989年には石川県立埋蔵文化財センターが飯田町遺跡を発掘調査し、平安時代の遺構、遺物を検出している。<sup>(14)</sup>平安時代末期には珠洲郡東部は源俊兼（能登国司）によって私領化され、その子、季兼が康治二年（1143年）に崇徳上皇の後、藤原聖子に寄進し、庄園（若山庄）となった。若山庄の庄域ははっきり確認されていないが、承久3年（1221年）に作成された能登国大田文によると、公田数500町を

誇る能登国最大の庄園であったという。<sup>(15)</sup>

古墳時代から平安時代にかけての能登は、若狭とともに日本海側有数の製塩地帯であり、近藤義郎氏は珠洲市森腰浜の調査で、同遺跡が製塩遺跡であることを報告している。<sup>(16)</sup>現在、珠洲市、珠洲郡内浦町では、多数の製塩遺跡が海岸沿いで発見されており、7・8世紀代を中心に、この地域で塩の生産が盛んだったことを物語っている。

中世 中世の珠洲が全国的に知られているのは、この時期に生産された須恵質陶器「珠洲焼」の生産地であるためである。昭和36年、「珠洲焼」あるいは「珠洲古陶」という名で陶芸史上に位置付けられるが、基本的には生活雑器である甕・壺・片口鉢の三器種が生産されており、稀に仏花瓶など仏器が含まれる。吉岡康暢氏は、比較的暦年代の明らかな経塚資料や中世墳墓の不時発見資料の完器などから、三段階Ⅰ～Ⅶ期に編年している。吉岡氏によれば、第一段階（第Ⅰ・Ⅱ期）は創業期、第二段階（第Ⅲ・Ⅳ期）が発展期、第三段階（第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ期）が変容、衰退期である。最古の珠洲焼が生産されたのは12世紀後半、平安時代末期であり、13・14世紀に最盛、16世紀前半ころにはその生産は行われなくなる。<sup>(17)</sup>珠洲古窯跡群は現在11群、約30基が確認されているものの、発掘された宝立町春日野の法住寺三号窯跡や、県指定史跡で天井部を完存する宝立町柏原の西方寺一号窯跡以外、窯体について詳しくは知ることができない状況である。約四世紀間にわたって生産された珠洲焼は、東北地方の日本海側や北海道に運ばれた他、越後から川を使って内陸にももたらされたことが、近年、研究によって明らかになりつつある。

また珠洲地方では、2つの中世城郭が知られている。飯田町にある飯田城址は昭和60年の石川考古学研究会の分布調査により、主郭とされる2つの郭や、腰郭、小規模ながら尾根あるいは谷に造成した郭群の他、堀切りや井戸跡と推定される陥没地などが確認された。平野部との比高は40mあまりで、これまで確認されている城域はそれほど広範囲ではないが、整然たる山城の姿を残しているといえる。城主は上杉謙信の家臣長与一景連、在地土豪飯田与三右衛門、島山氏の家臣遊佐孫六などといわれるが、詳細は不明である。<sup>(18)</sup>一方、正院町正院川尻城は、古くから“要害”といわれその存在は知られていたが、昭和56年から59年にかけて石川県立埋蔵文化財センターが、昭和59年から61年にかけて珠洲市教育委員会が分布調査を行い、郭や空堀の規模が明らかになった。<sup>(19)</sup>橋本秀一郎氏は「珠洲長氏の城砦」であったものを、「天正四年から同七年の三年間、珠洲郡を制圧することになった越後上杉氏の家臣、長与一景連が居城として再利用した」と推測している。<sup>(20)</sup>

近世 珠洲市域で近世の遺跡として扱われているものは少ない。大島周辺でも、三杯焼、あまきび焼きといった窯跡、正院町にはカンド山武家屋敷跡と、御山武家屋敷跡、それに井林の庚申塚が知られる程度である。

珠洲市は、石川県内のみならず北陸の中でも、歴史上各時期にわたり、実に多くの特色を有する地域である。近年、石川考古学研究会による、製塩・製鉄といった生産遺跡や、中世城館の分布調査をはじめ、さまざまな視点からのアプローチが行われており、今後一層の成果があがることが期待されよう。

註

- (1) 紺野義夫・平山寅松 1976「地形と地質」『珠洲市史 自然編』 珠洲市史編纂専門委員会
- (2) 平口哲夫 1976「晩期旧石器時代の遺物」『珠洲市史 考古編』 珠洲市史編纂専門委員会
- (3) 杉島孝博 1976「高波ふるや遺跡」『珠洲市史 考古編』 珠洲市史編纂専門委員会
- (4) 橋本澄夫 1990「半島先端の珠洲地域」『日本の古代遺跡 43 石川』 保育社
- (5) 高堀勝喜 1980「原始時代の珠洲」『珠洲市史 通史編』 珠洲市史編纂専門委員会
- (6) 田嶋明人 1980「横穴群の盛行と古墳社会の変質」『珠洲市史 通史編』

珠洲市史編纂専門委員会

- (7) 昭和56～59年度に石川県立埋蔵文化財センターが分布調査を実施している。

1985『県内遺跡詳細分布調査報告書』

- (8) 前掲文献註(4)に同じ
- (9) 田嶋明人 1980「古墳社会の形成」『珠洲市史 通史編』 珠洲市史編纂専門委員会
- (10) 前掲文献註(4)に同じ
- (11) 前掲文献註(6)に同じ
- (12) 門脇禎二 1976「珠洲と古代国家」『珠洲市史 通史編』 珠洲市史編纂専門委員会
- (13) 前掲文献註(2)に同じ
- (14) 本田秀生ほか 1992『飯田町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- (15) 三浦ゆかり 1992「飯田遺跡の環境」『飯田町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- (16) 前掲文献註(4)に同じ
- (17) 吉岡康暢 1989「総論珠洲古陶」『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館
- (18) 平田天秋 1988「飯田城」『石川県城館跡分布調査報告』 石川考古学研究会
- (19) 前掲文献註(7)に同じ
- (20) 前掲文献註(15)に同じ
- (21) 橋本秀一郎 1976『珠洲市史 通史編』 珠洲市史編纂委員会

<その他の参考文献>

1. 児玉幸多・坪井清足 監修 1980『日本城郭大系 第7巻』 新人物往来社
2. 高井勝巳 1981『石川県城郭総覧』
3. 藤 則雄 編集・監修 1985『石川の地形・地質案内』 東京法令出版



Fig 4 表土除去風景



Fig 5 2号墳調査風景

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査の経緯と経過

珠洲市飯田と金沢中心部との間には、道路上で200km近くの距離がある。鉄道では、約3時間ほどかかり、自動車でも、能登有料道路を使用しても3時間ほどかかる。飯田から穴水までは、柳田村を通る大規模農道が、山あいや勾配の強い峠、そして山間に広がる水田を抜けて通っている。国道249号線は、飯田から宇出津を通り穴水から七尾に向かって海岸にそって通っているが、穴水までかなりの時間がかかるので、大規模農道の果たす役割が大きいものとなっている。しかし、この道は二車線を確保しているとはいえ、カーブの連続する道である。

そこで県は、奥能登振興策の一つとして道路整備に努めることとし、珠洲と金沢をより短時間に移動できるように整備している。その際、既存の大規模農道を利用して県土幹線軸道路（通称珠洲道路）とすることになった。これは、曲折する道をできるだけ直線的な道にすることで、車の高速化を狙ったものであり、快適安全な車の移動ができる。通常、県土幹線軸道路整備事業は、県土木部が実施する。しかしこの場合、大規模農道を整備拡充するということで、農林水産部が事業を実施し、珠洲土地改良事務所が施工している。

飯田と穴水を結ぶ県土幹線軸道路の整備事業は、現在なお遂行中である。五十数kmの長い路線のあちらこちらで工事が実施されている。山間部を縫う路線であるせいか、周知の遺跡や新たに発見される遺跡は少ない。本古墳群は、双竜文環頭太刀を出土した大畠古墳群に隣接し、鶴飼川・盤若川が作る平野に面する丘陵上ということもあって、当初より遺跡の存在が注意されていた。

今回確認された古墳群は、大畠古墳群から150m西に位置し横穴式石室墳2基以上で構成され、「大畠南古墳群」と命名した。大畠4号墳から出土したとされる双竜文環頭太刀を所蔵している竹内虎吉氏によって、大畠南1・2号墳から南の谷筋にある石材の露呈箇所を教えて頂いたが、古墳と確定することはできなかった。大畠古墳群と区別したのは、使用石材が大畠古墳群よりも小さいことと、古墳の空白地帯が若干あること、からである。

平成元年に珠洲土地改良事務所から遺跡の確認調査の依頼が当センター企画調整課に出された。同年11月に現地踏査・重機による試掘が実施され、古墳1基と古墳状隆起1基を確認している。翌平成2年に発掘調査を実施することとなり、石川県立埋蔵文化財センター主事 伊藤雅文が担当することとなった。調査に先立ち現地で伊藤と調査第一課長 平田天秋が、5月9日に珠洲土地改良事務所と調査の方法や工事日程の調整などを目的とした打ち合わせをおこなった。

打ち合せ前に平田と伊藤は、既に伐採の終わった事業予定地を踏査し、遺跡確認調査で発見された古墳1基の墳頂に石材を認めた。さらに古墳状隆起の他に石材の散乱した地点を確認し、ともに横穴式石室であることを予感した。ところが新たに確認した横穴式石室は、発掘調査範囲外に位置しており、当センターの企画調整課が工事可能な場所と珠洲土地改良事務所に回答していたので、7月に工事入札がおこなわれる予定になっていた。

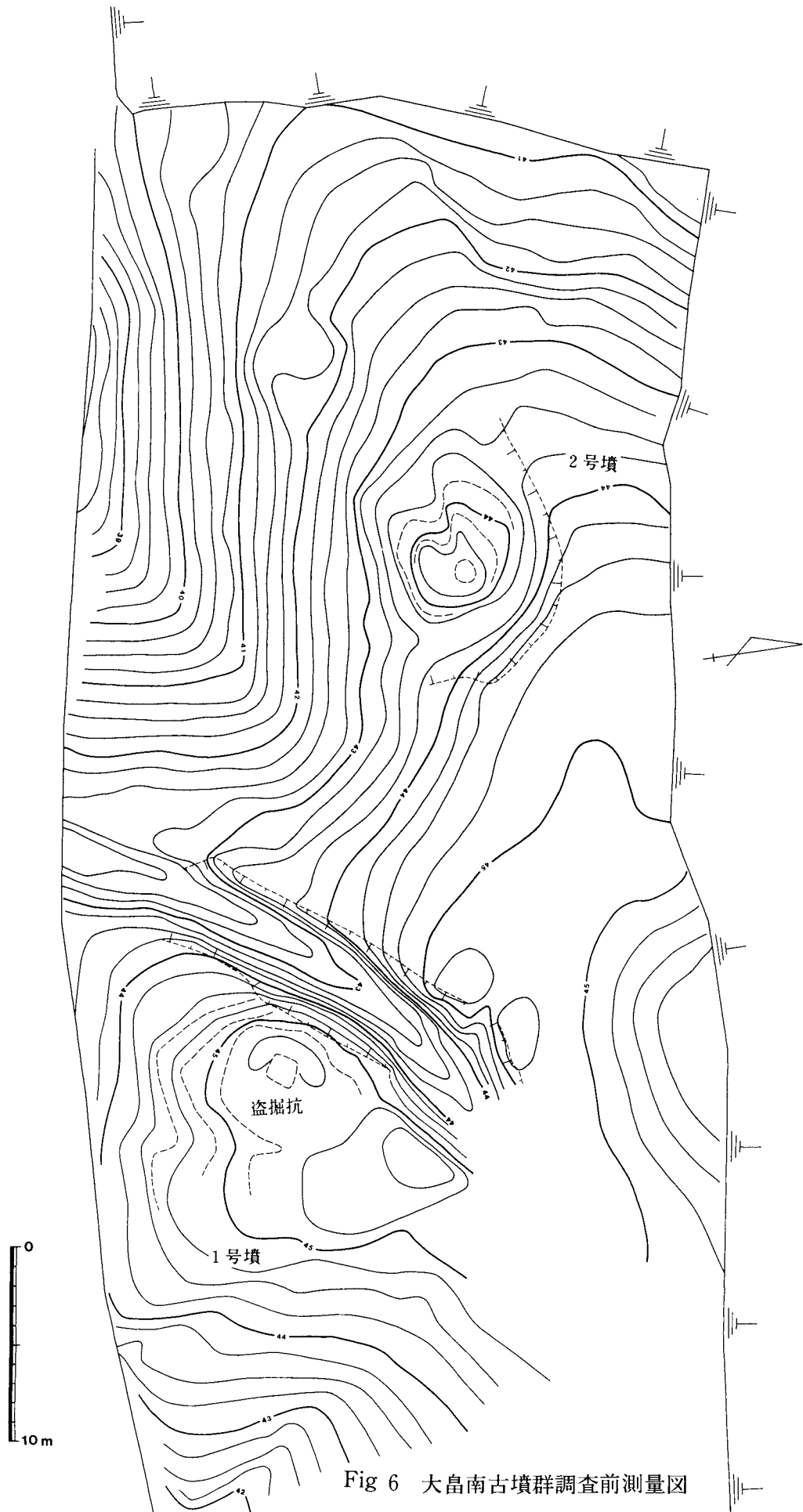


Fig 6 大畠南古墳群調査前測量図



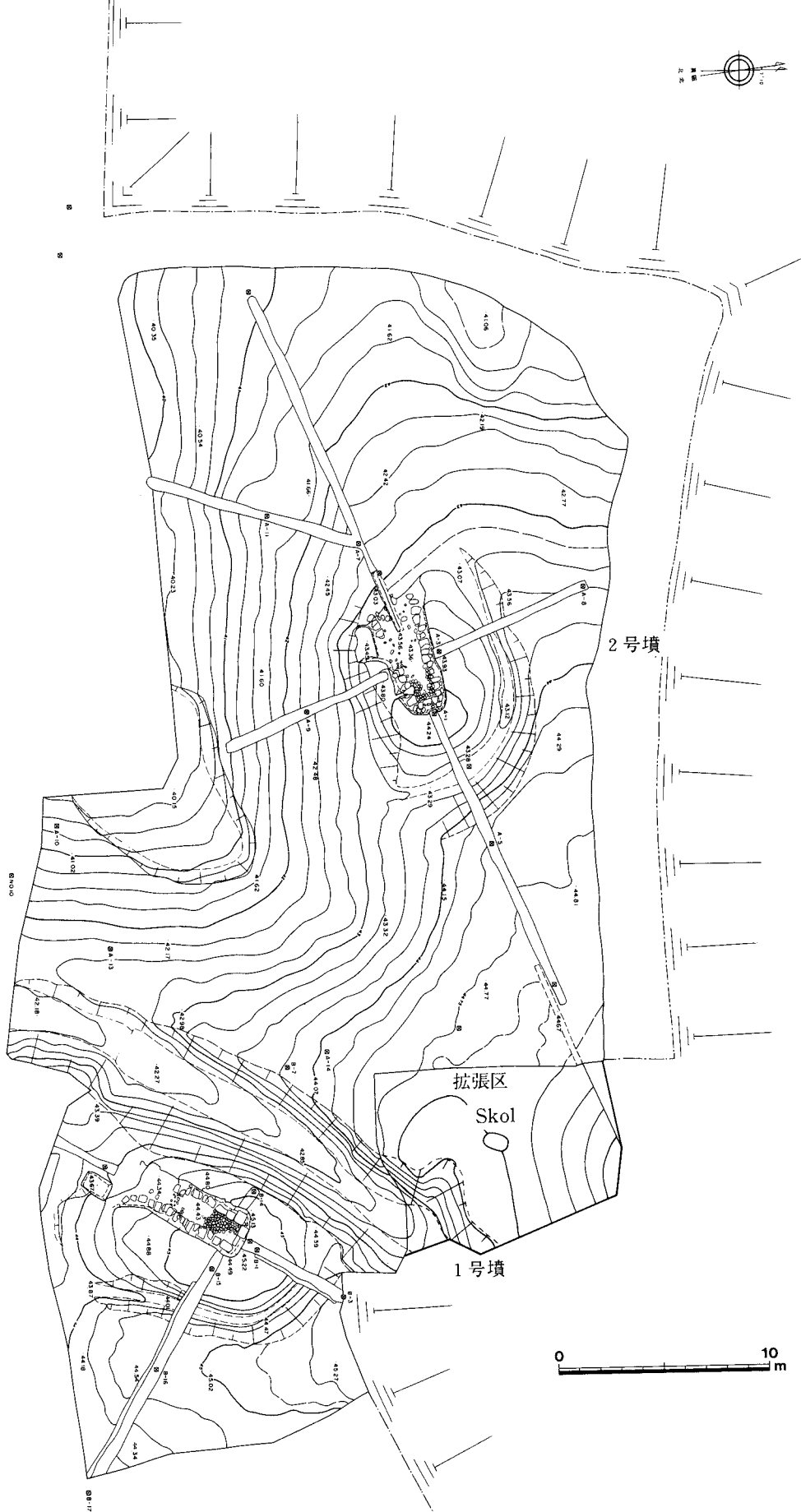


Fig 7 大島南古墳群調査後測量図

発掘調査すべき古墳が1基なのか2基なのか。2基になると、調査面積も600㎡から1200㎡と2倍程度に増加し、しかも横穴式石室と予想されるので、調査に費やされる時間は倍以上になる。現地で平田とともに発掘調査の必要を認め、珠洲土地改良事務所に申し入れた。珠洲土地改良事務所は、センターの申し入れを受け入れたものの、工事の入札を遅らせることはできないとした。しかし、古墳の位置する部分が、当初の調査予定地の際でしかも法面際に位置していたので、工事を実施しても当該場所を残して行うこととした。ただし、調査時の工事業者の申し入れによって、調査区域の一部分（約400㎡）を先にわたすこととし、先渡し調査区とした。調査に要する費用は、平成2年4月12日付けで耕地建設課に要求し、既に配当を受けていたので、当初はこの予算で調査を行うことにし、不足分については追加要求することにした。

5月19日に現地調査に着手した。まず、測量調査に必要な最低限必要な器材を持っていった。測量の最中に仮設小屋を建てるなどの準備をおこなった。調査の中頃の7月13日に報道機関に資料提供をおこない、7月15日に現地説明会を開催した。資料提供は、発掘調査の様子を知って欲しかったので、現地で行うことにした。しかし、2号墳石室内に遺物が出土している状況にあるものの、奥能登という地理的なハンデキャップを背負っているために、取材に来た報道機関が限られたことが残念であった。

記者発表の翌日は現地説明会の準備をおこない、15日午前11時に現地説明会を開催した。開催にあたり、珠洲市教育委員会に全面的に援助を頂いた他、珠洲市教育委員会の加賀真樹氏、当センターから安英樹と泉谷ゆかり両主事に協力を頂いた。当日の朝にかなりの雨が降ったが、直前

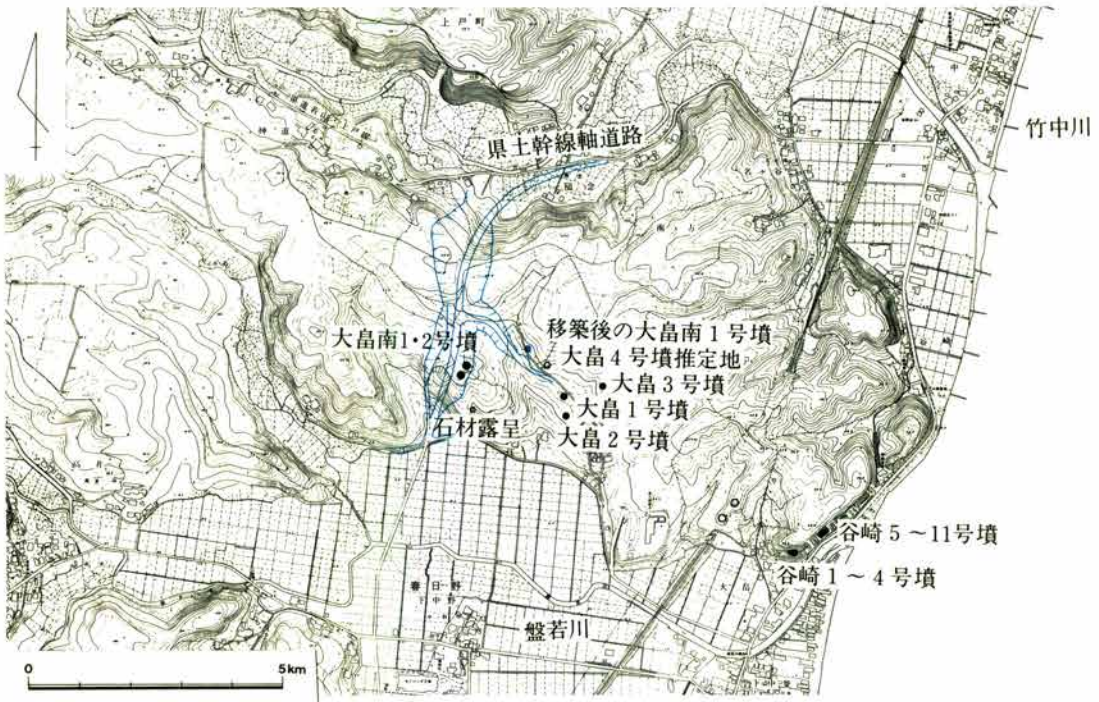


Fig 8 大島南古墳群周辺の古墳

の10時過ぎには上がった。このまま降り続けば現地説明会に来てくれる人がいないのではないかと思われ、雨が上がって一同ほっと安堵する。見学者数は75人で、そのうち80%が飯田・宝立・上戸などの地元の見学者である。珠洲は、郷土史を勉強する会の活動が活発なのでそれを証明するかのようなのである。

調査の終盤近くになって、大きな発掘調査成果を上げたものの、遺跡の現地保存は無理であった。しかし、珠洲市教育委員会に周辺に移築できないか、調査第一課長 平田天秋をとおして申し入れを非公式におこない、基本的に同意が得られることになった。移築場所は、確定されていなかったが、調査地周辺に仮保管することになった。発掘調査終了直前に石室石材にマーキングして解体した。平成4年5月中旬に、珠洲市教育委員会によって元の位置から150m程西に1号墳の移築が行われ、現在一般に公開されている。

## 第2節 調査日誌

5月9日(水) 晴 現地で珠洲土地改良事務所と打ち合せ。調査区域外で石室らしい石組みを確認(1号墳)。珠洲土地改良事務所に調査の必要を申し入れ、了解してもらう。

5月10日(木) 晴 珠洲市教育委員会の加賀真樹主事と、珠洲焼資料館で大畠南古墳群発掘調査の協力要請をおこない、具体的な打ち合わせをおこなう。

5月16日(水) 晴一時曇 本日より現地調査に入る。風冷たく肌寒い。1・2号墳の杭設定。

5月17日(木) 晴 掘削前の地形平板測量開始。2号墳から雪を頂く立山が見える。地元では、立山が見えると翌日雨が降ると言う。

5月18日(金) 曇一時雨 平板測量。やはり、雨が降った。

5月21日(月) 晴 作業員の作業開始。器材をセンターから運び、器材整理。電話敷設、ベルトコンベアー等の発掘機械を搬入。隣の工区の工事業者の重機で山の上の古墳際まで運んでもらう。

5月22日(火) 晴 下草を刈り、アゼを設定。ベルトコンベアーを設置し2号墳近くより部分的に掘削開始。

5月23日(水) 曇一時雨 2号墳掘削、墳丘裾から早くも7世紀末の須恵器が出土。

5月24日(木) 曇一時雨 2号墳表土除去、1



Fig 9 石材解体移動風景

号墳石室内盗掘坑清掃。

5月25日(金)晴時々曇 2号墳表土除去、1号墳の補足の平板測量。

5月28日(月)晴 2号墳表土除去。

5月29日(火)曇後晴 2号墳表土除去。

5月30日(水)晴 2号墳表土除去、1号墳表土除去開始。

5月31日(木)晴 1号墳表土除去完了。

6月4日(月)晴時々曇 1号墳の精査をおこない周溝・墓坑を確認。

6月5日(火)曇後晴 1号墳周溝・墓坑掘削。石室内を1～8区に区分する。

6月6日(水)晴 墓坑掘削。周溝掘削(墳丘北東区完了・北西区・南東区開始)。周溝内より黒曜石・チャート製の石器2点出土。縄文集落と重複する可能性を考えた。

6月7日(木)晴 1号墳周溝掘削。

6月8日(金)晴 1号墳石室開口部精査。

6月11日(月)晴 1号墳の石室内・周溝精査。

6月12日(火)晴 1号墳の石室内・周溝・前庭部精査。

6月13日(水)晴 1号墳、石室内精査。墳丘周辺部分の流土除去。

6月14日(木)晴 1号墳側壁崩落状況の写真撮影、石室内清掃、周辺流土除去。

6月15日(金)曇後雨 1号墳石室内アゼの写真撮影、墳丘アゼ断ち割り。

6月18日(月)晴 1号墳流土除去。2号墳精査開始。

6月19日(火)晴 1号墳石室内アゼ実測。2号墳周辺精査。

6月25日(月)曇時々雨 1号墳石室内アゼ除去。

6月27日(水)曇一時小雨 1号墳石室内アゼ除去。袖部の土器群を精査。工事で先渡しすることとなった部分を掘削し、地山までほぼ下がる。

6月28日(木)曇時々晴 1号墳床面精査。先渡し地点のみ遺構検出。

6月29日(金)晴時々曇 1号墳床面精査。先渡し地点の全体写真撮影・実測図の作成。本地



Fig 10 遺物整理風景

区の調査を完了する。

6月30日(土)曇 1号墳石室内遺物出土状況の写真撮影。

7月2日(月)晴時々曇 1号墳遺物出土状況を実測し、部分的に遺物を取り上げる。1号墳の墳丘土層図作成。2号墳石室上面を精査し、1号墳周辺流土除去。

7月3日(火)雨後曇 2号墳の石室内にアゼを設定し、いよいよ石室内の掘削開始。2号墳周辺流土除去。

7月4日(水)曇一時晴 2号墳石室内掘削、および周辺流土除去。1号墳遺物出土状況を実測する。

7月5日(木)曇 2号墳石室内掘削、および周辺流土除去。1号墳の遺物群の写真撮影

7月6日(金)晴時々曇 2号墳石室内掘削、および周辺流土除去。1号墳遺物出土状況の実測後取り上げ。

7月7日(土)晴時々曇 1号墳の遺物取り上げ。

7月9日(月)晴後雨 2号墳石室内アゼ実測。1号墳石室の写真撮影。夕立あり。

7月10日(火)晴 1号墳石室の写真撮影。2号墳石室内アゼ除去、周辺流土除去。

7月11日(水)晴 2号墳周辺流土除去。

7月12日(木)晴 2号墳周辺流土除去、石室床面精査。

7月13日(金)曇後晴 記者発表をおこなう。2号墳床面精査。2号墳周溝掘削、周辺流土除去。

7月14日(土)晴 現地説明会の準備。2号墳床面精査、周溝掘削。

7月15日(日)曇時々雨 現地説明会に約80名が参加。熱心な人々であった。珠洲市教育委員会加賀氏や、当センター主事 安・泉谷両名に手伝ってもらう。

7月16日(月)晴後雨 1号墳石室実測。2号墳石室床面精査。周溝掘削。

7月17日(火)曇 2号墳床面精査。石室実測用杭設定。周辺流土除去。

7月18日(水)晴時々曇 1号墳石室実測。2

号墳周辺流土除去、遺物出土状況の写真撮影。

7月19日(木)晴時々曇 1号墳石室実測。2号墳周辺流土除去、遺物出土状況の実測。

7月20日(金)晴 1号墳石室実測。

7月23日(月)晴時々曇 2号墳周辺流土除去。

7月24日(火)晴 2号墳周辺流土除去。航空測量のための清掃。

7月25日(水)曇 航空測量実施。

7月26日(木)曇 1号墳石室図面完了。

7月27日(金)曇後晴 2号墳石室の細部写真撮影。

7月29日(日)晴時々曇 2号墳石室実測。

7月30日(月)晴時々曇 1号墳石室の断ち割り。2号墳石室実測。珠洲市 林市長と同市議会議員十数名見学。これは、1・2号墳の石室移築を珠洲市に申し入れたことによる現地視察である。

7月31日(火)晴時々曇 床面の土を入れた土嚢袋を整理し、石材移動の準備を行う。2号墳石室実測。1号墳の補足実測。

8月1日(水)晴 2号墳石室石材の断ち割り。2号墳墳丘土層断面図作成。1号墳の石材を外し、仮安置場所まで移動。

8月2日(木)晴 2号墳の石材を外し、仮安置場所まで移動。2号墳の盛土除去。

8月3日(金)晴 2号墳の補足実測。

8月6日(月)晴時々曇 器材をセンターに戻して現地作業を終了する。



Fig 11 現地説明会風景

### 第3章 大島南1号墳の調査

#### 第1節 墳 丘

データ  
墳丘長径12m 同短径 8 m 現存高0.8m

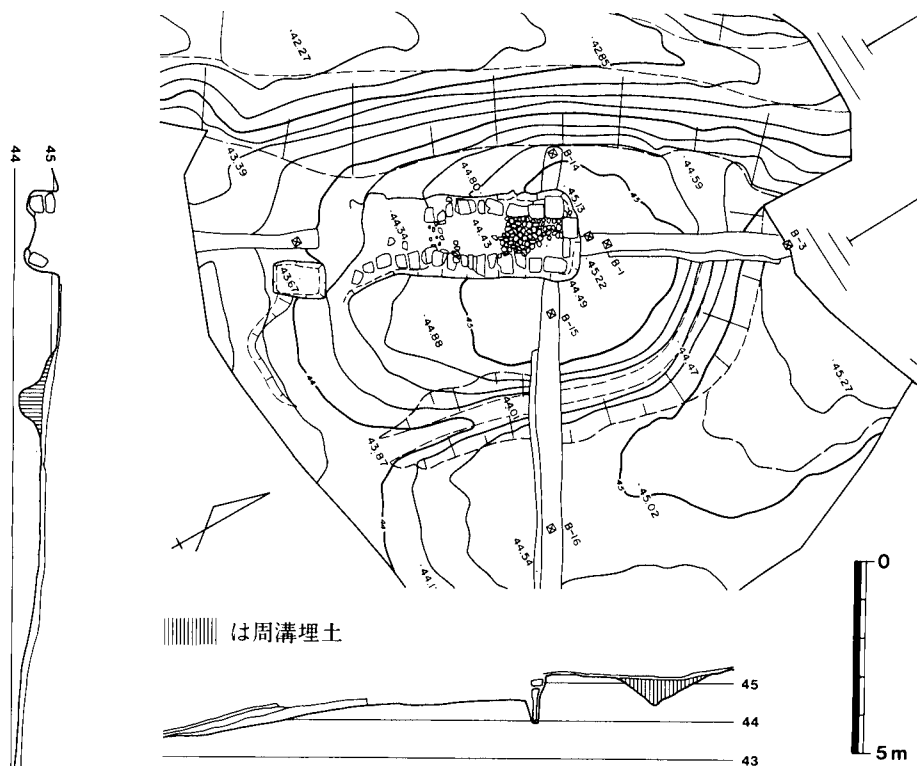


Fig 12 1号墳墳丘図

1号墳は、尾根筋からやや南にずれて、「山寄せ」に墳丘を構築し、山側に周溝を掘り込んでいる。また、墳丘西側は、近世・近代の道となっていた掘り割りによって大きく破壊されている。墳丘盛土もまた、完全に流失していた。調査前は、なだらかな隆起と浅くめぐる溝が見られるのみであった。このように遺存状況は、決してよいものではない。

墳丘は、四隅の不明確な方形を呈し、主軸長12m、現状の直角辺長6mを測るが、道で破壊されている部分を復元推定すると、1辺8m程度である。しかし、周溝が弧状を呈することや、墳丘が明確な方形をなさないことから、「方墳を意識した長楕円形墳」というのが正確である。そして、墳丘は「山寄せ」に作られている。すなわち、尾根筋が周溝北数メートルから西に、また周溝東脇を通るようであるが、1号墳の位置する部分は比較的平坦面が広がり、南の調査区外に平坦面が伸びているので、2号墳の「山寄せ」の状況とは若干異なる。したがって、1号墳の周

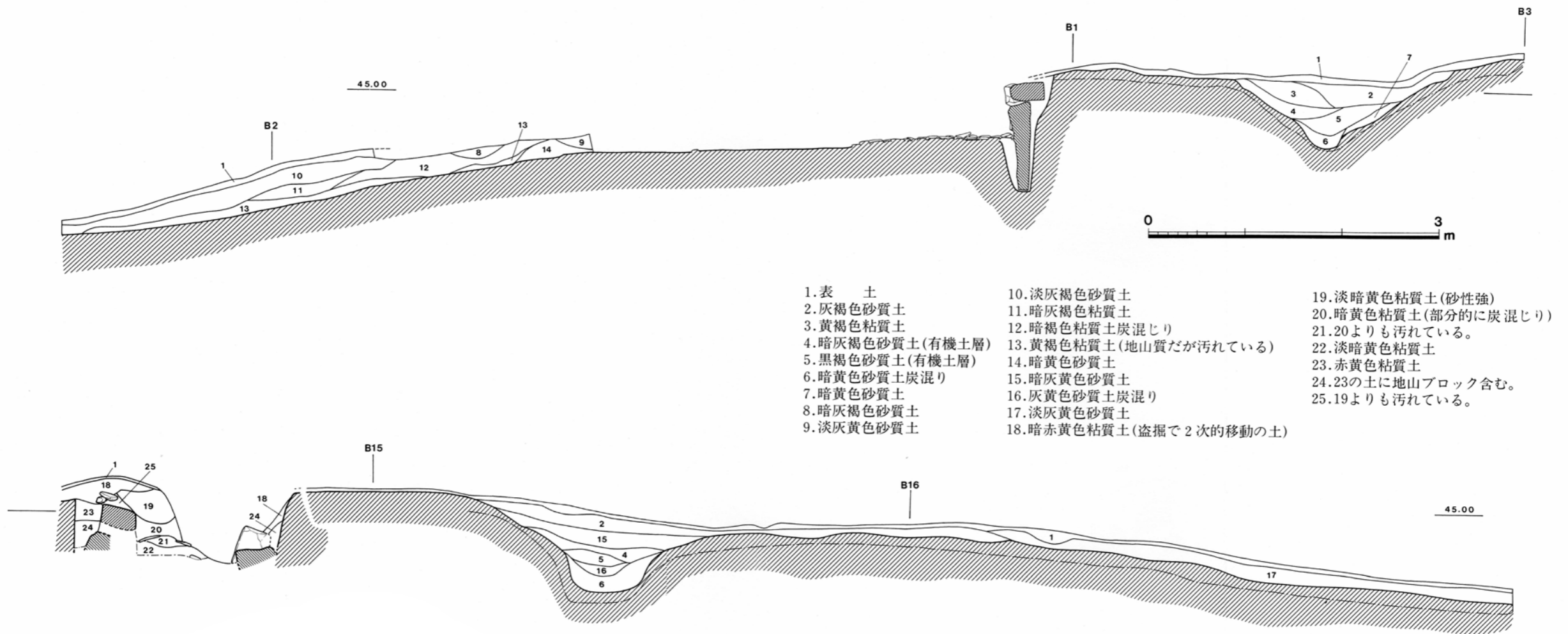


Fig 13 1号墳墳丘土層図

溝は、石室背後に馬蹄形にめぐっていたと思われる。

墳丘盛土は、流失のために遺存していないので、表土直下は地山である。また、墳丘南の前庭部分の傾斜は、周囲とあまり変わらず、墳丘盛土が二次的に動いた土が堆積しているので、南の墳裾を確認したい。しかし、周溝の窪みが標高43.75mのコンターまで及んでいることや、43.75mまでのコンターの間隔と43.50mのコンターとの間隔がやや広くなって、僅かながら傾斜変化が見られる。したがって、43.75mのコンターラインまで墳丘と考えることができる。

しかしながら、石室は標高44.4m付近で開口部となり、先に推定した墳丘基底面と約65cmの高低差が存在する。石室開口部と墳丘基底が同一である必然はないものの、「ハ」の字に開く羨道形態は墳丘外を意識し、前庭を構成するものなので、石室開口部と墳丘基底に差を設けるは、やや不自然の感もないではない。

周溝北側は周溝東側とかなり様子が異なっている。石室背後にあたる周溝北側は、緩やかな円弧を描き断面「V」字形で、溝底の平坦面がほとんどない状態である。一方周溝東側は、若干東に広がるような直線的な形で、断面「U」字形を呈する。また、北側の墳丘の傾斜と周溝の傾斜は同じだが、東側は墳丘の傾斜の方が強い、という違いもある。そして、周溝東側の方が墳丘を視覚的に意識した周溝掘削といえよう。また、平坦面の広さの違いは、おそらく南から掘削し、排土をそちらに動かした結果と考えられる。

周溝埋土は、どの地点でもほぼ同じ堆積状況である。周溝最下層に炭粒混じりの暗黄色砂質土がある。その上層には有機土層としての暗灰褐色・黒褐色砂質土が堆積している。これは、早い段階に墳丘側から土が流れ込み、その後一定期間表土層を形成できるような安定した堆積状況を示す。この有機土層は、墳丘側が高く外側が低いという傾斜をもって堆積し、しかも地形的に高い石室背後が厚く、南がやや薄い堆積となっている。また、墳丘からの土の流入も少なからず認められる。

周溝の上層として、暗黄灰色・灰褐色・黄褐色砂質土がある。これは、一気に埋められたような土で、墳丘を崩した時の埋積土と考えられる。石室前面に、周溝中に認められた有機土層は見られない。炭粒混じりの黒褐色粘質土が石室前庭部に見られ、表土的にある一定期間風化する状態にあった土と考えられる。そうすると、その下層にある暗黄色砂質土は、盛土の流土あるいは崩落土と考えられる。

## 第2節 石 室

データ

石室長	5.6 m	現存高	0.5m
〔玄室〕左側壁長	3.10m	〔玄門部〕幅	0.86m
右側壁長	3.25m		
玄室奥幅	1.08m	〔羨道部〕長	2.5m
玄室前幅	1.17m	〔開口方向〕	N-29° 40' - W



概ね南西に開口する、両袖式横穴式石室である。玄室内に15cm前後の偏平な川原石を敷きつめ、「ハ」の字に広がる羨道をもち、付近で採取できる泥岩質の石材で石室を構築している。石室開口方向が約30°西に振っているのは、真南だと前庭部が谷斜面に向いてしまうので、ある程度西に開口することによって石室前面の空間を確保したものと考えられる。

#### 堆積状況

石室は既に盗掘を受けおり、天井石は遺存していなかった。付近にも天井石の可能性のある石材や欠損した石室材の地表の散乱が認められなかった。石室内埋土は、基本的に天井石抜き取り後に崩落堆積した墳丘盛土である。

床面直上の堆積土は、奥壁側より淡暗黄色粘質土、砂性の強い黄色粘質土、それよりも暗い土の大きく3層に区分できる。それが奥壁右側から羨道方向に流入していることがわかる。しかし、いずれの土層も床面に対してほぼ水平堆積に近い状態であることや、側壁抜き取り時の流入土の上に堆積している（d-c断面）ことから、石室破壊後の第1次堆積土と考えられる。ただし、奥壁側に近い堆積土である淡暗黄色粘質土と床面敷石の範囲とが一致するので、石室破壊以前に床面に堆積した土の可能性もある。このように理解すると、敷石部分の床面は盗掘を被っていない状態と考えられる。

#### 墓坑

石室検出面で墓坑を確認した。墳丘盛土が全て流失していたので、墓坑掘削が墳丘構築工程中のどこに位置付けてできるのか不明である。2号墳例を参考にすると、盛土施工と共に石室を構築

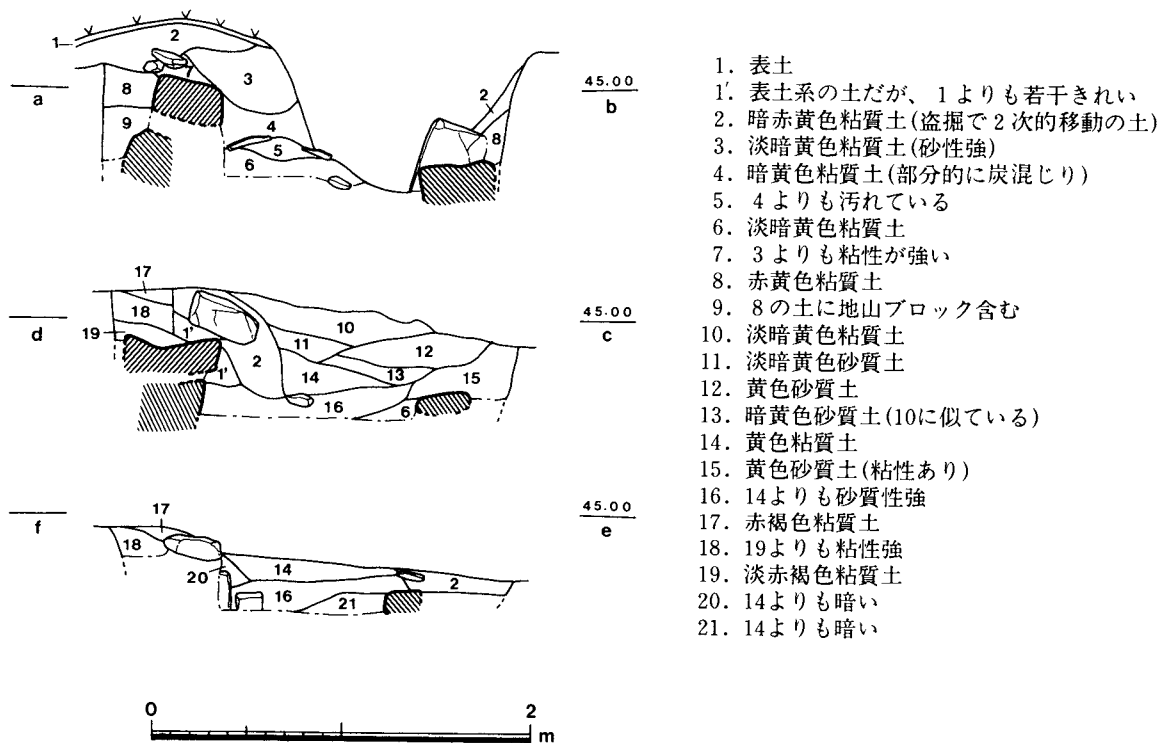


Fig 14 1号墳石室土層断面図

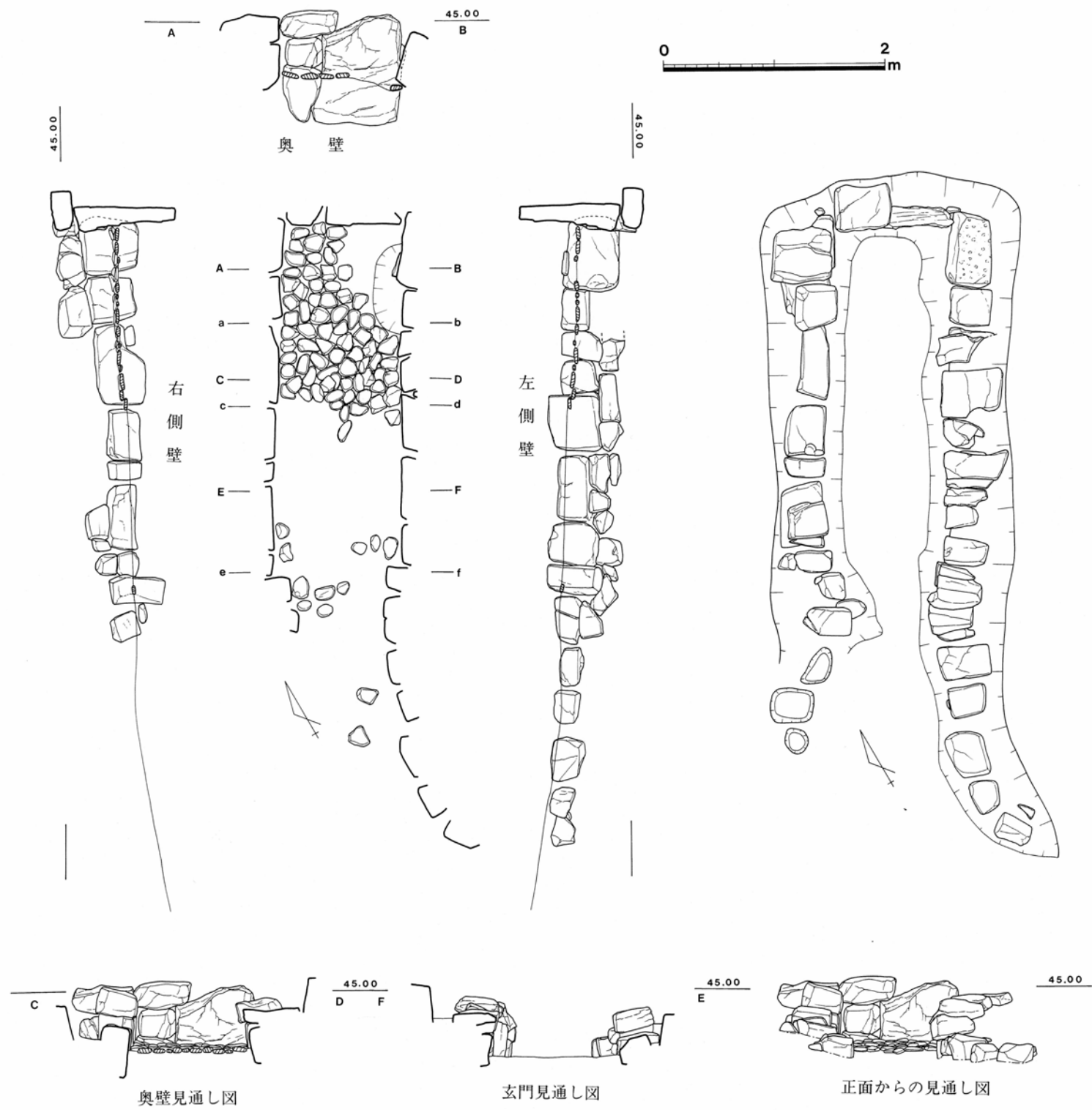


Fig 15 1号墳石室展開図

した可能性も考えられる。

墓坑掘り方は、石室石材のすぐ際にまでおよび、裏込め土の量を最小限度に押さえている。裏込め土は側石1段ごとに詰めているようで、地山の粘質土を用いている。本古墳群の石組みの特徴として、石材を設置する時に下の石材との間に裏込め土を意識的に入れていることである。これによって、「石を組む」というよりも「石を置く」と表現した方がよい。なお、裏込め土を叩き締めたような痕跡はない。

#### 奥壁

奥壁は、右側壁方の最下段が深さ約50cmまで埋め込まれ、石材のほとんどが床面下にあることになる。左側壁に接する石材は、他の石材と異なり板状の節理面で剝離して10~20cmの厚みしかない安山岩系の石を用いている。一方、右側壁に接する石は、右の石材をおいた後、玄室幅を確保するためにおかれ、三段の石積みとなっている。これによって左右両石材の高さがほぼそろうことになり、側壁第二段と合うことになる。

#### 側壁

左右両側壁とも第二段までしか遺存していない。右側壁の羨道部の石材が抜かれているものの、左側壁の状況から考えて「ハ」の字に開く平面形を呈するものと考えられる。積み方は、両側壁ともよく似ている。左側壁では奥壁から第一段第1石に続いて第2石目から第二段石材が積み上げられているように、側壁を通しての石材積み上げの段が通らないようである。これは、遺存

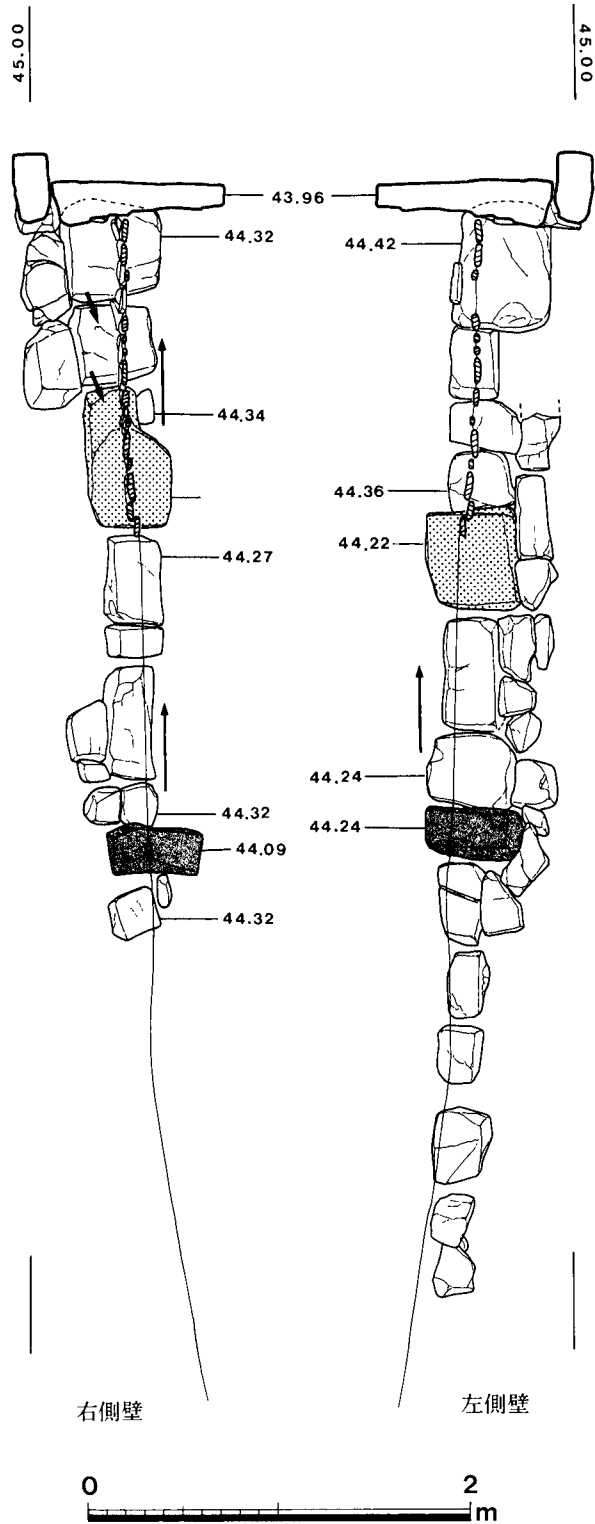


Fig 16 1号墳側壁詳細図

状況の悪い右側壁でも、玄門部の第二段の高さが奥壁第一段の高さにほぼ合う。すなわちこれは、左右両側壁の段積みが同じ状況であることを示す。段数の数え方は、混乱するかもしれないが、単純にその石の第一段から数えることにする。

第一段の石は、石材の長辺を横方向の石室主轴にし、その小口を石室に面している。そして、石材底面のレベルが、奥壁から右側壁で1.2m、左側壁で1.5mで5～10cm程度の小さな段差が認められる。これは、石材の形に左右されるようであるが、よく見ると、積み方にも影響している。



Fig 17 1号墳第二段石材設置状況

つまり右側壁では、奥壁から3石めで段差がついており、それより奥壁側の石（1・2石め）が羨道側の石に加重（3石め）が掛かっているのが、奥壁側から石をおいたのではなく、墓坑の段差部分から埋置していることがわかる。また、奥壁から5石めで段差がついているが、右側壁で見られたような力の掛かり具合を明確に見出しがたい。つまり、段差をつけて石をおくことによって、第二段目の目地を通すようにしている。

第二段目の石材から、基本的に小口積みで石室を構築している。そして、第二段目以上においても、やはり先に確認した段差をつけた部分を境にして、奥壁側と玄門側で積み方が変わることが推測される。これは、段差のある石の玄門側から左側壁で部分的に一段増えて三段構成となることや、右側壁玄門付近の第二段石材に同程度の石を架けた時に奥壁付近の第二段の高さに合うことから、奥壁から玄門にいたる側壁の中ほどで一段増えるようである。使用する石材が玄門にいくにしたがって小さくなることにその要因を求めることができよう。

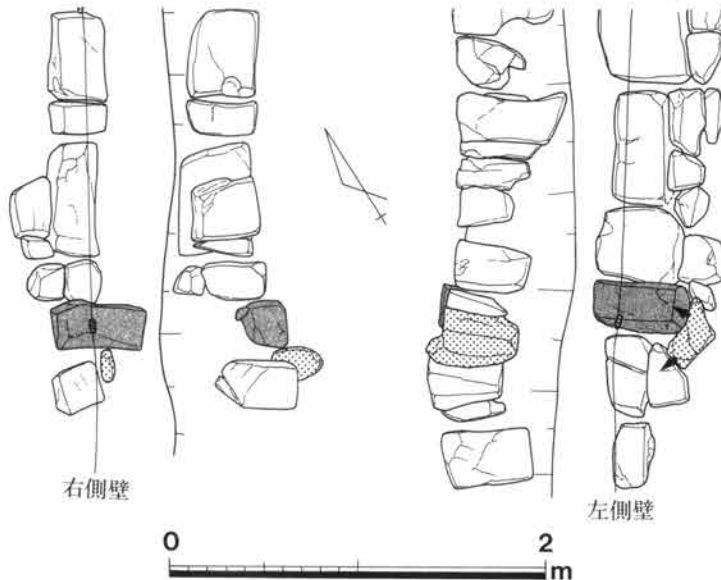


Fig 18 1号墳玄門部の袖構造(矢印は加重方向)

持ち送りは第二段からみられ、若干石材がせりだしている。約1.1mという狭い玄室幅で、そのまま持ち送りをおこなえば、低い天井高と考えられる。

### 玄門部

玄門部は、左右に石を立てて袖構造となっている。それぞれ左・右袖とする。右袖石の高さは標高44.6m、左袖石の高さは44.7mと若干の違いが認められるが、いずれも床面深く据え付けられている。特に右袖石が深く埋められているのは、上面を揃えるための高さ調整の機能がある。袖石より上部構造の遺存状態が悪いので明確にしがたいが、左側壁が玄室から玄門そして羨道へと、一体となっていることが指摘できる。

左袖石と羨道第1石目第二段に掛かるように、第二段の石がおかれている。その石が、あたかも袖の屈曲に対応するような挟り込みが認められる。これが人為的なものかどうか石材の風化のためにわからないが、少なくとも石の表面が抉れているようになっていることによって玄室から羨道にいたる平面形が、側壁第二段でも維持されている。

それより上の構造は、わからない。左袖石隣の羨道第1石が、他の羨道の石に比べてやや大きく、右袖隣の石材底面にも沈み込みを防ぐ川原石がある。基底石の掘り込みもこの石を境にして開口部側が浅くなるので、それまでと異なり大きな加重がかかる状態ではないと推測できよう。すなわち、開口部までの羨道全体に天井石がのる構造ではなく、少なくとも袖石から開口方向に1・2石程度まで天井石の加重が掛かっていると考えられる。

### 羨道部

羨道右側壁が失われているが、石材の抜き取り穴の位置から、「ハ」の字に広がる形状を呈し、あたかも前庭部のような状況である。石材の掘り込みは非常に浅く、その基底面しか埋め込まれていないので、玄室部分と対照的である。

また、石材の間隔も広くなり、石室内部に向ける石面が、広がるカーブにあわせて置かれている。この広がりをあと1石伸ばして復元すると、石室前面にくることになるのか。



玄門袖石と第2段側壁(1)



同 上 (2)



第2段側壁材除去  
Fig 19 1号墳玄門構造

このような構造をとる場合、石室壁体と外護列石が一体となることが推定されるが、本墳のその存在の可能性は不明である。墳丘の項でも記したが、墳丘基底面と石室開口部（前庭部）と約60cm近い比高差が存在する可能性がある。外護列石を想定することによって、石室と墳丘との関係に不自然さが残る。つまり、石室開口部端の石は前面に向けた状態と推測できるが、外護列石の存在を積極的に支持するものではない。

#### 敷石

20cm内外の偏平な石を敷いて床面としている。その範囲は、玄室部分と考えられ、羨道から出ているものは持ち出されたものである。ただし、玄室全体かそれとも屍床部分のみか不明である。

### 第3節 遺物出土状況

遺物は、盗掘などの乱掘によって2次的な移動を受けているが、2号墳のように細片と化していない。床面敷石上からの遺物の出土はなく、床面敷石上に刀などの大型鉄器の錆の痕跡もみられない。これは、徹底的な盗掘によるものとも考えられようが、土器類が非常に良く遺存していることから、元々副葬遺物が少なかったためとも考えられる。なお、床面上20cmまでの土をフルイにかけたが、鉄釘・鍔の木棺緊結部材が全く出土しなかったため、木棺以外の棺を想定しなければならない。

さて遺物は、玄室南半分から羨道東側にかけて主に出土しており、土器群が左袖部に集中して見られる。刀子は玄門近くの敷石が抜かれた面上に石室主軸に直交して出土し、2次的に移動したものである。遺物は、基本的に検出床面よりやや浮いた状態で出土している。

玄室中央に坏G蓋（3）、南1mに坏G（16）が裏返しの状態で、さらに坏G蓋（4）が二つに割れている。また、羨道部からは、石室壁面に押しやられた状態で坏B蓋（22）や、壁面まで行かないまでも坏B（27・28）、高杯（33）の杯部のみ床面から5～10cmも浮いている。高杯（33）が石室3・5区の破片と接合しないしは同一個体が出土していることから勘案すれば、石室内にあった土器が、攪乱で掻き出されたものと考えられる。

左袖部から杯G蓋6、杯G7、杯B蓋4、杯B3、高杯2、鉢・長頸壺各1が、ひとかたまりで出土した。これらの土器もまた、土器の上に土器が置かれていることや、上下逆さまになっているもの、蓋と身のセットになるべきものが離れた状態になっている。したがって、この土器群は二次的に移動した結果と考えられる。また、床面から5～10cm浮いた状態である。このレベルは、敷石の高さとほぼ合致するので、埋葬時の床面が土器群底の高さである蓋然性は高い。

破損している個体が少ないので、埋葬当初に近い状態から移動されたと考えると、側壁に近い位置から順次集められたと考えられる。このような観点で土器群を眺めてみると、埋葬当初に近い土器配置を復元できよう。

土器群の構成は、次の通りである。袖石際に杯B蓋（21）が側壁に立てられ、奥壁に向かって杯B（30）とその中に杯G（13）、上に杯G蓋（8）杯B蓋（25）が一塊になっている。その横に杯G（14・15・19）、杯G蓋（6・7）、20cm離れて杯B蓋（24）・杯G蓋（5）がある。この

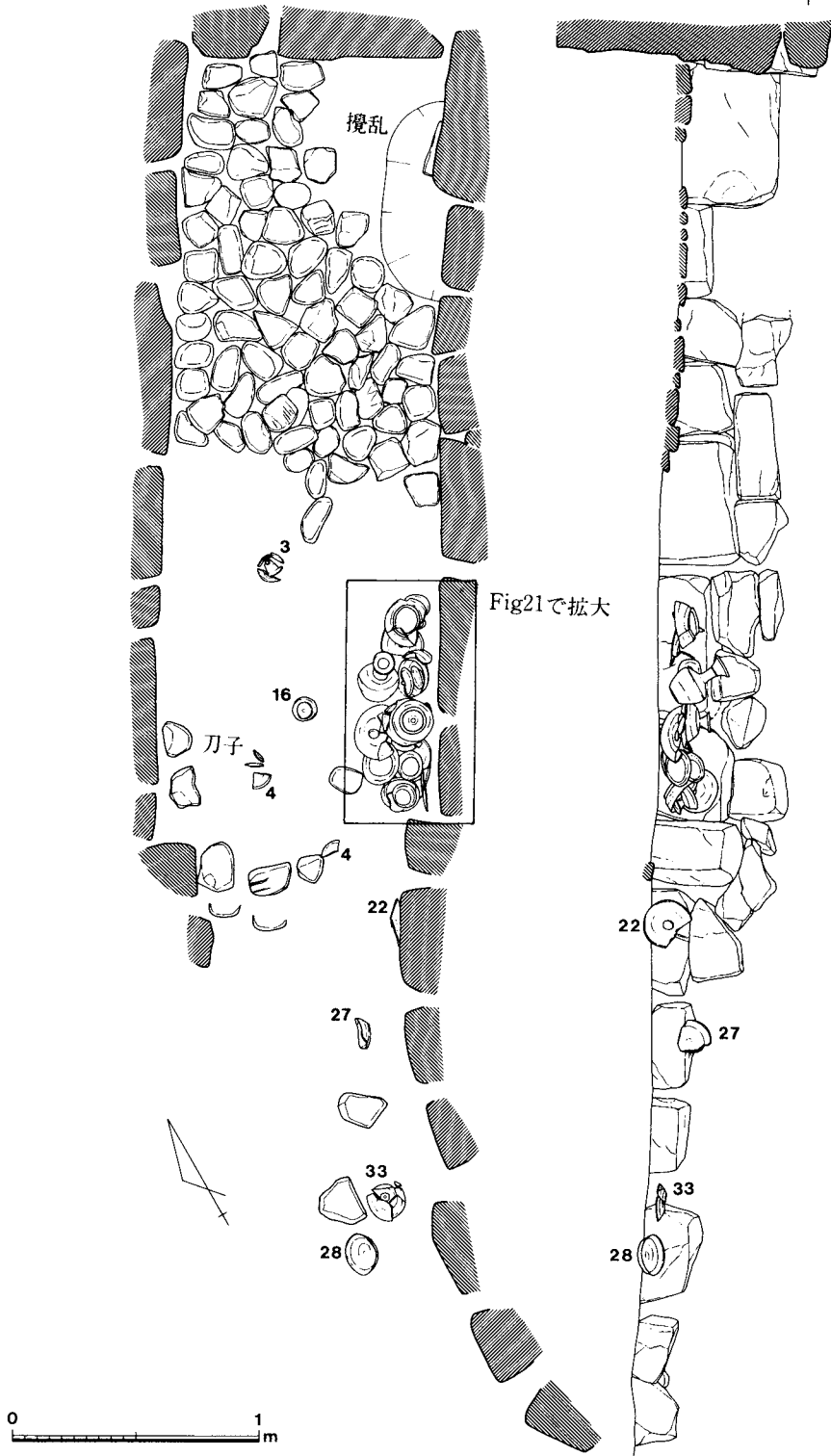
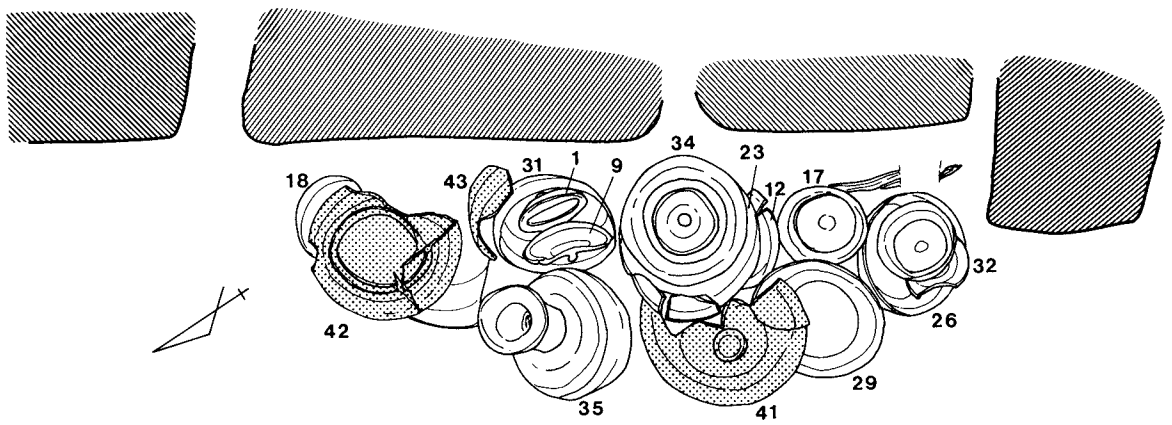
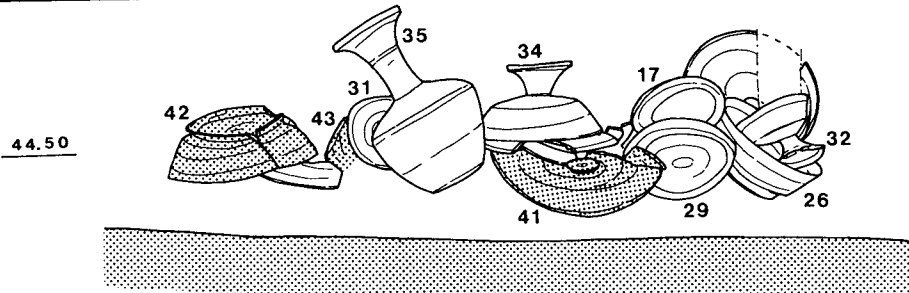


Fig 20 1号墳石室内遺物出土状況

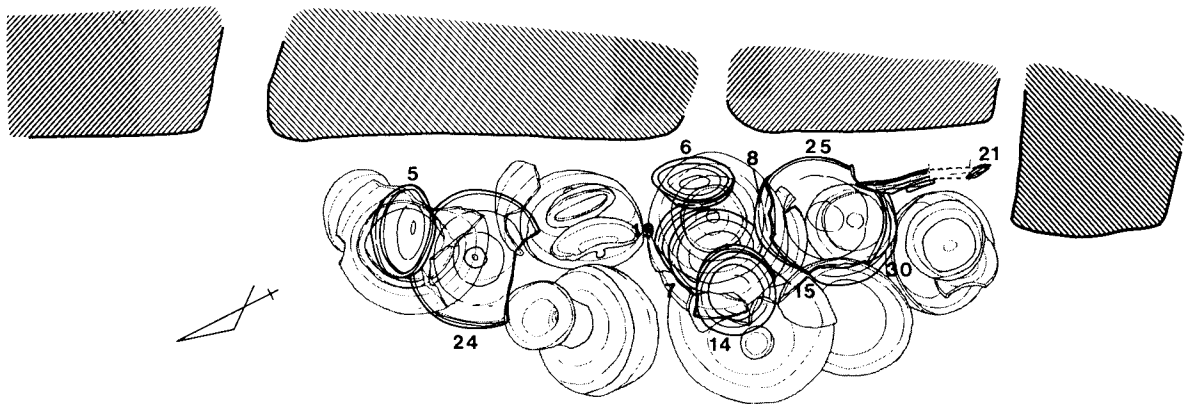


0 30 cm

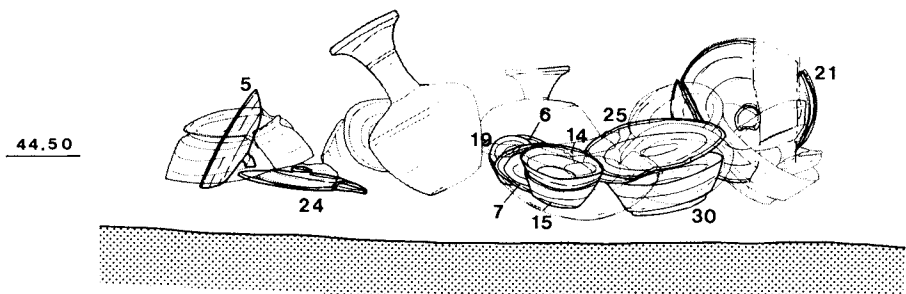


44.50

1号墳遺物出土状況 (上)



0 30 cm



44.50

Fig21 1号墳遺物出土状況 (下)



2群の間に長頸壺、鉢の内部に杯G蓋（1・9）、外に土師器杯（43）があり、杯Gや口縁を下にして土師器杯Bがおかれている。また、先の一群の上から前にかけて杯Bや杯G、高杯などがある。基本的に、杯は口縁を下におき、口縁を上にする時は内部に他の土器を入れているようである。

石室が埋る前に開口部側からの作為によって土器群が形成され、土器は、土器群に近いところから積み重ねるように上におき、さらに奥に向かって置かれたようである。玄門に近いほどその重なりが激しいことからもうかがえる。そうすると、左側壁玄門近くに杯Bと杯Gが、その横（右側壁側）に長頸壺・鉢・土師器杯などが置かれていたと思われる。しかし、平瓶や横瓶の置かれた位置はよくわからない。

このように、土器群の状態から遺物の盗掘を主目的とするものではなく、人が通路として使えるように空間を明けている状態であることを示す。土器群を追葬に伴う片付けの可能性を考えてみると、追葬に伴う土器が見当たらないことから、その可能性はない。つまり、後世の盗掘を目的としない乱掘によるものと判断できる。

土器群以外に点々とある土器は、当然プライマリーな状態でないので、乱掘に伴うものであるが、土器群の形成と時間的にどのような関係になるのであろうか。土器群を構成する土器は完形が多いのに対し、それ以外からの出土土器は破片となったものが多く、接合資料も各地点から出る傾向にある。これは、さらに遺物が動いた結果と考えられるので、土器群よりも新しく動いたものと判断できる。

以上より、杯G10セット、杯B5セット、高杯3、鉢1、長頸壺1、平瓶、横瓶が墓前祭祀具として副葬されていたと考えられる。大畠南2号墳では、瓶類が多く認められる。また大畠1号墳出土須恵器の写真を見ても各種の瓶壺類が認められる。このような器種構成の差が、盗掘によ

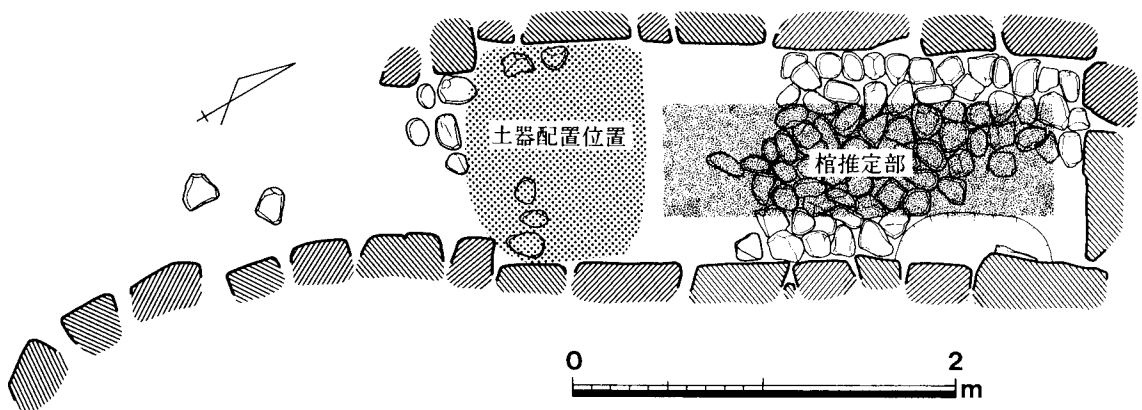


Fig 22 1号墳棺推定部と土器配置概念図

るものかそれとも元々副葬されていなかったのかかわからないが、祭式としてある以上、元々存在したと考えられ、乱掘によってその痕跡を留め得ないと考えられる。

また、土器の出土状況から、供献された土器群は、玄門付近に集中的に置かれており、追葬の痕跡は見られないようである。これは、単体埋葬であることをしめす。棺の種類や規模を知ることにはできないが、土器群の復元的に求めた位置関係から、2m程度の長さの棺と考えられる。棺幅は常識的に考えて、60cm程度であろう。

## 第4節 出土遺物

### a 管玉

長さ29.9mm、径7.75mm、重量3.2gを測り、両側から穿孔されている緑色凝灰岩製の管玉である。石の層理としての縞模様がみられ、硬質で表面に光沢がある。後期になると、穿孔方法が両側から片側に変化するとされているが、本例は伝世品と理解できようか。

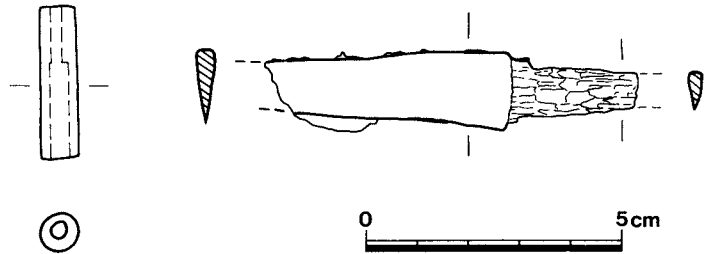


Fig 23 1号墳出土管玉・刀子

### b 刀子

刃先と茎尻を欠損し錆化が激しいが、全体的に遺存状態は良好である。刃部現存長41mm、幅3mmを測る両関式の刀子で、茎部には僅かに木質が遺存している。茎部近くの刃部はやや内わんし、刃先に向かって緩やかに幅を減じているので、研ぎ減りによるものと考えられ、よく使いこまれた刀子である。

### c 須恵器

#### 杯G（1～20）

蓋が10個体、杯も10個体出土している。焼成の状態から2と16、5と18、6と14、7と15、8と17がセットである可能性が高い。それ以外では、蓋の1・3・9（小破片でわからないが10も含まれるかもしれない）が杯の11・12・13・19に対応する可能性が高い。しかし、蓋の4の胎土の質感がややしっとりとしており、それに対応する杯を見つけることはできなかった。また、杯20に対応する蓋も見られない。焼き膨れが20個体中8個体（6・7・9・12・14・17・18・20）に見られ、特に杯に顕著である。

蓋は、頂部に宝珠形の鈕、口縁内面に返りをもつ形態である。鈕の形態から二つに分類できる。

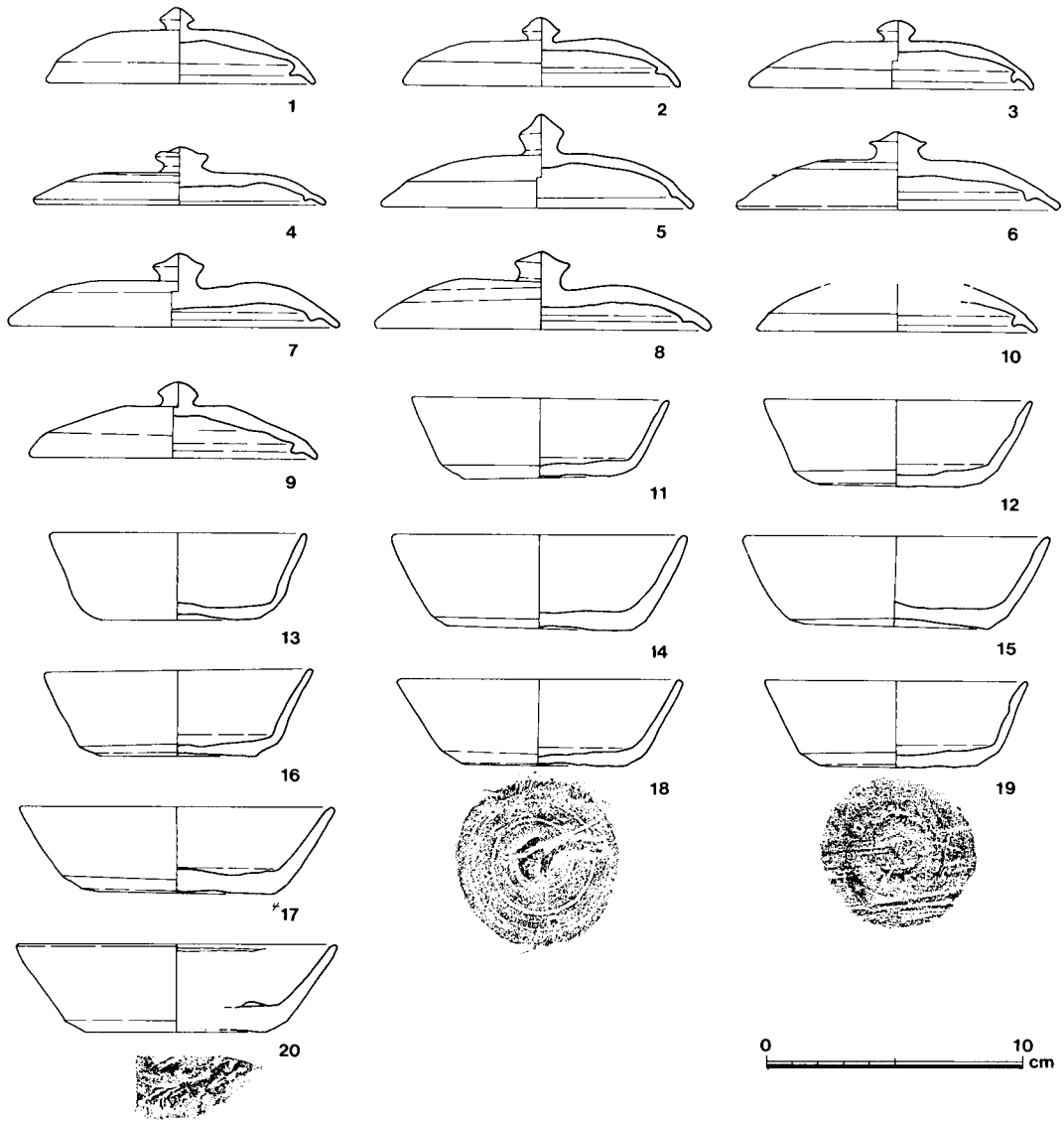


Fig 24 1号墳出土土器(1)

6・7・8はやや扁平で、宝珠頂部の尖りや左右への鏢のような突出が特徴的な鈕で、これをA類とする。4の鈕は丸く突出しA類のような鋭さはないが、鈕の頂部の尖の具合が類似する。また、5の鈕は、頂部が尖るといってA類に共通し、それを縦長にしたような形状である。これら4～8の返りの形態は、小さく下方に垂下する正三角形を呈するという共通する特徴がある。したがって、これら一群をA類と理解する。

また1・2・3・9の鈕は小さくて、宝珠頂部が丸く左右への突出度が少ない。これらをB類とし、A類よりも口径が一回り小さな傾向にある。返りの形態は内方に向い、3のようにやや反り返っているものもあるが、概ね直線的に伸びている。

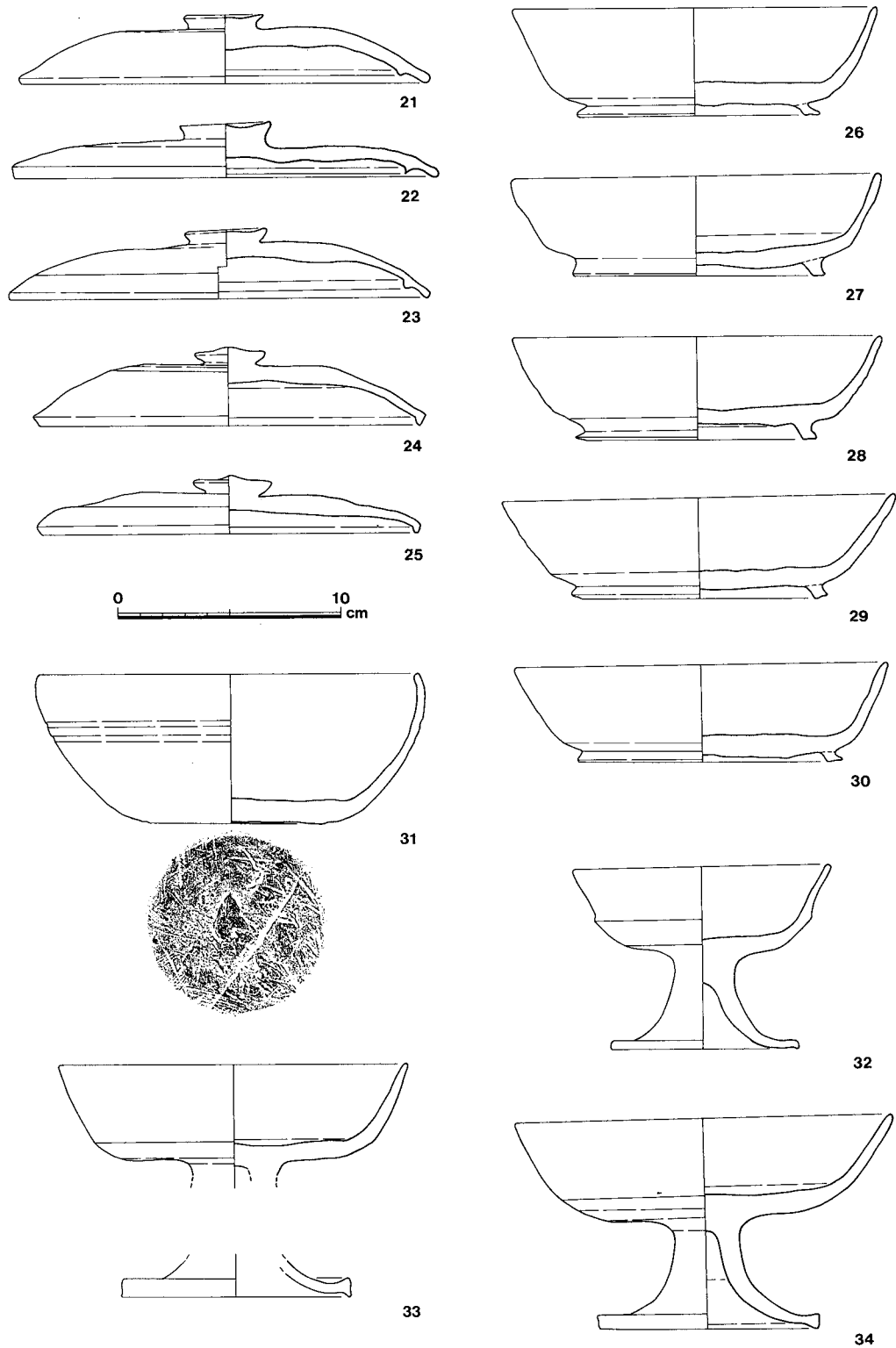


Fig 25 1号墳出土土器(2)

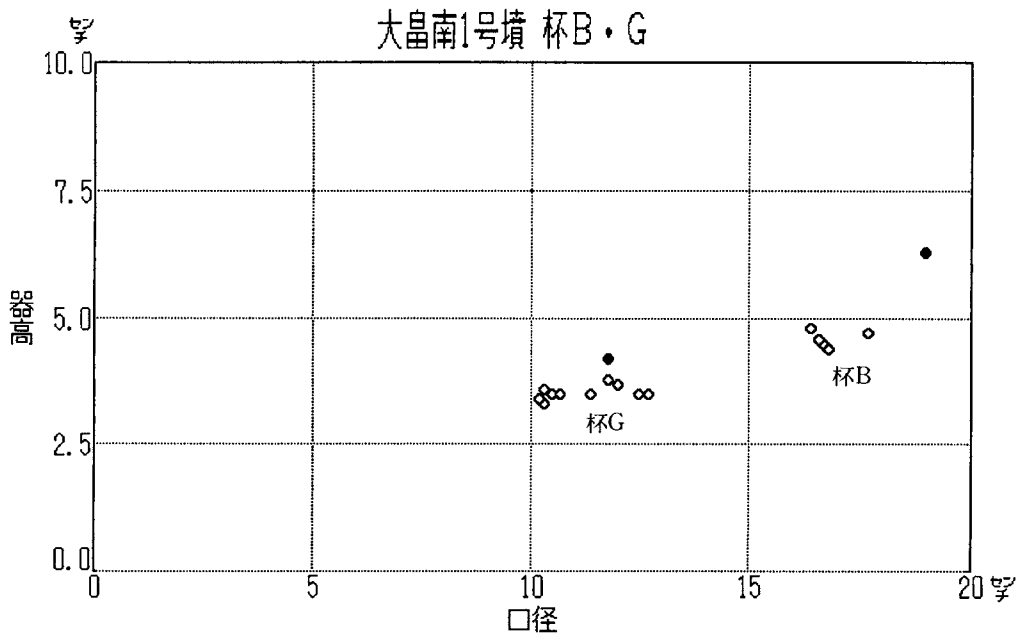


Fig 26 1号墳杯法量図(黒丸は土師器・白丸は須恵器)

杯の口径が10.2~12.7cm、平均が11.3cmで多少のばらつきがある。杯の底部はヘラキリ後ナデを施したり、腰の部分にヘラケズリをおこなうなど、2次的な調整を加えている。12の底部に砂粒が付着したり、13では粘土目のような焼台を残していたり、17・18のように灰を被っているものもある。重ね焼の状態によるものであろう。体部は外傾しつつ直線的に伸び端部にいたる。見込みは、横方向のナデが見られるものもあるが、杯Bと違って特徴的ではない。

#### 杯B (21~30)

蓋5個体(21~25)、杯5個体(26~30)が出土している。そのうち蓋内面に返りを持つものが3個体(21~23)でa類とし、それ以外をb類とする。

a類の鈕は偏平で、鈕周縁より中心部が凹み、かつその中心が突起しているが、鈕周縁より高くない形状である。適切な例えでないが、カルデラ火山のようである。体部は外傾し、b類よりも径が大きい傾向にある。返りの形状は、三角形であるが、巻き込みの強いもの(21)もあり、杯G蓋の返りに共通する要素も見られる。

b類の鈕は、a類の鈕頂部の突起をより突出させ、鈕の凹みが失われている形状を呈し、奈良時代的である。先にも記したが、鈕径はa類よりも一回り小さい傾向にあるが、頂部を凹ませる必要がないために鈕基部を絞ることができることによる。口縁端部は、奈良時代的な形状、すなわち端部を少し下方に垂下させて鍵状を呈する。24は腰高、25は低平という違いはあるが、口径がほとんど同じである。

杯は、ほぼ同じ口径を示し、どっしりとした高台を持つ。すなわち、26・27・28・30の高台は、底面を下に接するように外に広がる形状である。29・30は高台外側を浮かす形状で、2号墳で見られるような高台内側を浮かすものはない。体部下半から底面にかけてヘラケズリが施され、そ

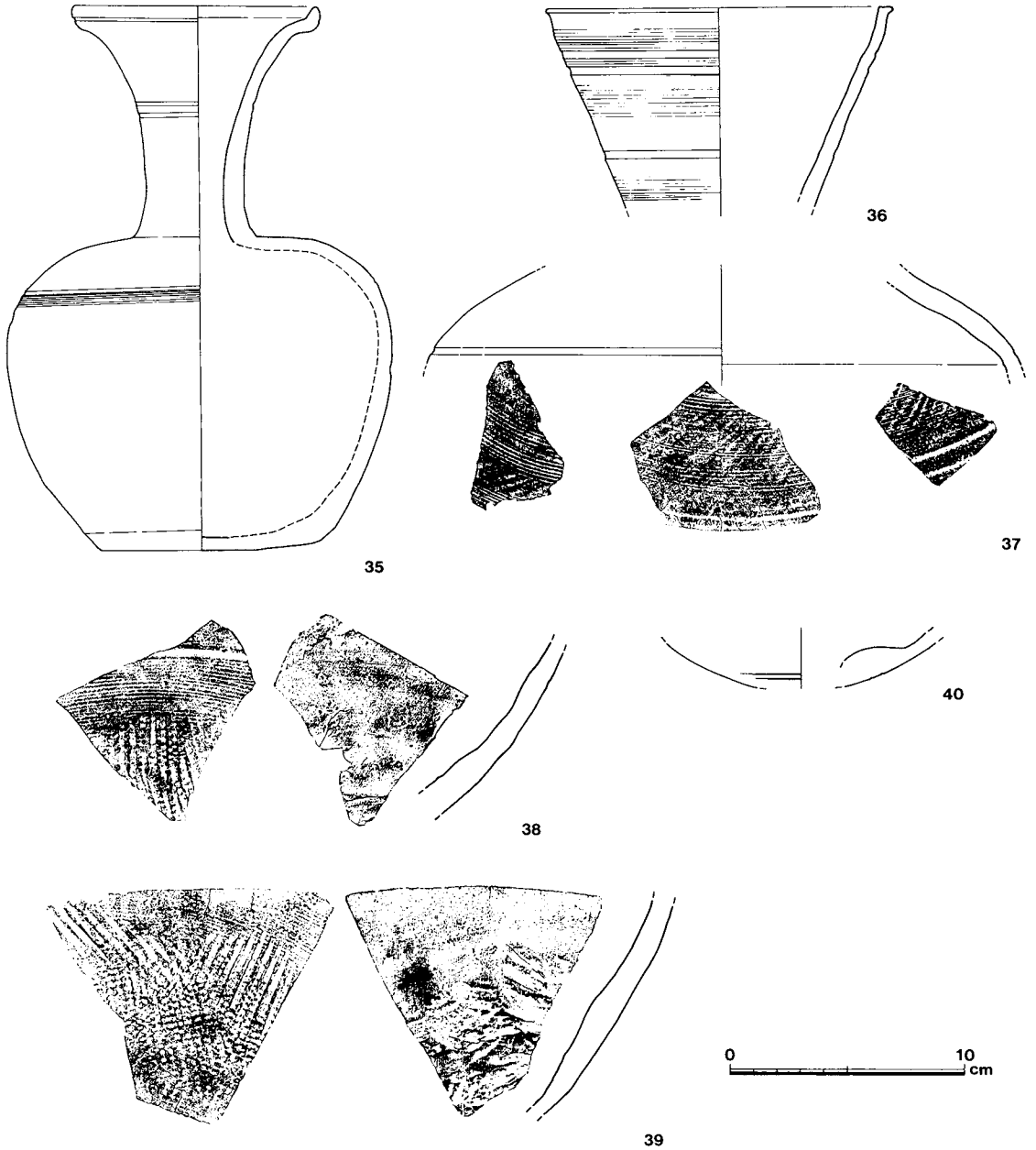


Fig 27 1号墳出土土器(3)

の後丁寧なナデがみられる。そのために、底部から体部にかけての腰部の張りが強い。28・29の体部の外傾度がやや高い。

21と30、22と29、24と26が杯・蓋のセット関係と確認できた。しかし、23と28、25と27がその可能性が高いようであるものの、確実ではない。また、蓋で見られたa・b類の違いが、杯の違いを反映していないので、二つの類型の時間的近接性を示すものである。

#### 鉢 (31)

平らな底部から内わん気味の体部、そして口縁端部は内側に入り込んでいる。体部外面に2条の沈線があり、底部にはヘラケズリやいろいろな擦痕が見られる。これは、底部を平滑にするためであろう。底部に焼成時の亀裂が走ってかなり歪み、内面に自然釉が付着している。

#### 高杯 (32～34)

大形2と小形1の計3個体の二種類が出土した。大形高杯はともに同じ形状である。しかし、33の胎土中に海綿骨片を含むが、34での確認が困難であったことや、ロクロ回転の方向が逆であるという違いがある。大形高杯は、平な杯部下半から丸みのある腰部、直線的に伸びる杯部上半をもつ。杯部下半はヘラケズリ。杯部と接合する脚部は細く絞り、大きく広がるように裾に至る。脚裾は、端部に至って明確な面を持っている。小形高杯は、杯部上半途中までヘラケズリが施され、それより上との境界に稜をなすほか、外反しつつ口縁端部に至る。脚部の形状は大形高杯と共通するが、杯部との接合部が中実になっているという違いがある。

#### 長頸壺 (35)

完形品である。平らな底部、やや潰れた球形を呈する体部、緩やかに広がる頸部から摘み上げられて端面をもつ口縁部に至る。頸部と体部中央上半に沈線を施している。底部から体部下半にかけてヘラケズリで器壁を整え、カキメで仕上げている。比較的粗い砂粒を多く混入させているが、海綿骨片が含まれているか器壁の表面観察からわからない。

#### 瓶類 (36～40)

36の口縁端部上面は平らで、沈線やカキメが見られる。口径から横瓶などの口縁と考えられる。37は屈曲する肩部にあたり、外面を平行タタキ後カキメで仕上げている。平瓶と考えられる。38・39は同一個体で、外面に平行タタキとカキメが、内面にそれぞれの調整に対応するように、同心円文当て具痕とナデが見られる。横瓶の可能性がある。40は横瓶の短側部である。タタキ、カキメがみられる。



Fig 28 1号墳調査風景

d 土師器

杯B (41・42)

畿内産土師器で、蓋と身がセットになっている。胎土は赤灰色を呈し、暗文を施すという特徴がある。胎土中に、白色粘土の小ブロックを部分的に含むが、43がスジ状なのに対し、畿内産土師器である41・42は点状のブロックという違いがある。これは、43が模造するのに粘土までもその対象にした結果であろうか。

高台はやや反り気味で平坦な底面をもち、比較的高い高台形態である。器壁は薄く、見込みから体部にかけて均一な厚さである。見込みは若干下がり気味で、体部へ立ち上がりにかけて、内面にユビオサエが認められる。体部は外反気味に伸び、口縁端部をコテのような工具を用いて内側に丸く収めている。そのために端部の外反の度合いが強くなっている。見込み全体にラセン暗文、体部に二段放射状暗文が施されている。径高指数は33である。

蓋は、頂部が平らな鈕をもつ。口縁端部内面は、小さく下方に突出する。内外面にわたってナデが施されているが、口縁端部外面に小刻みなヘラミガキをおこなっている。外面には、平行の暗文が鈕際にまでみられる。

杯A (43)

平らな底から丸い腰部、直線的に立ち上がる体部へと続き、丸い口縁端部にいたる。全体的に厚手の作りで、底部と体部の厚みの差が少ない。口縁端部外側が、若干外に捻り出されて凹線状を呈する。しかし、内面に対応するような調整痕は見られない。底部からこの凹線近くまでヘラケズリが施され器面を整えている。胎土に若干の長石などの砂粒の他、海綿骨片を非常に多く含むのが特徴的である。また、内外面ともくすんだ赤灰色を呈し、部分的に細かいスジ状になった白色粘土の小ブロックを含む。口縁形態は違うが、畿内産土師器を意識して「赤い土師器」を指向して地元で作った杯Aである。

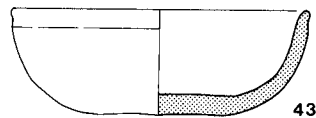
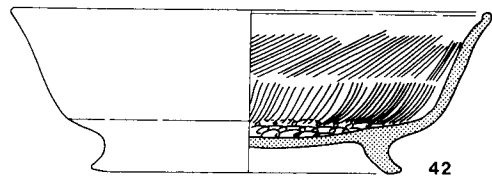
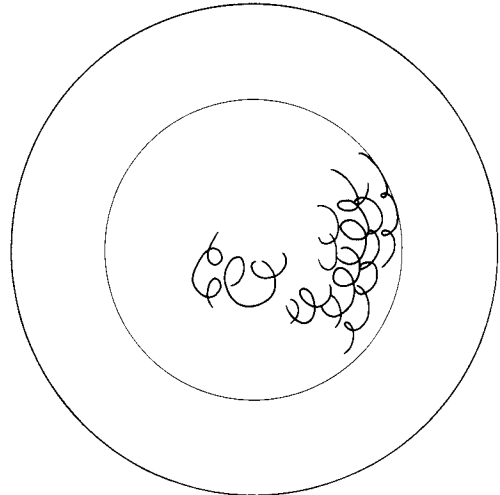
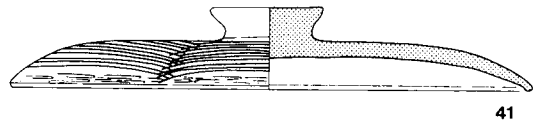


Fig 29 1号墳出土土器(4)



## 第4章 大島南2号墳の調査

### 第1節 墳 丘

データ  
墳丘長径11m 同短径8m 現存高0.82m

2号墳は、1号墳と同規模・同形態、すなわち隅が丸い方墳を意識した楕円形を呈するようで、主軸辺長11m、もう一辺8m、現存する高さ0.82mの規模と考えられる。墳丘は、「山寄せ」に作られている。周溝は弧状を呈し、尾根の高い方の北側に掘られている。墳丘南側は、かなり土が流れているようで、現状の墳丘盛土の南はすぐに谷地形となる。また、墳丘背後から石室前面

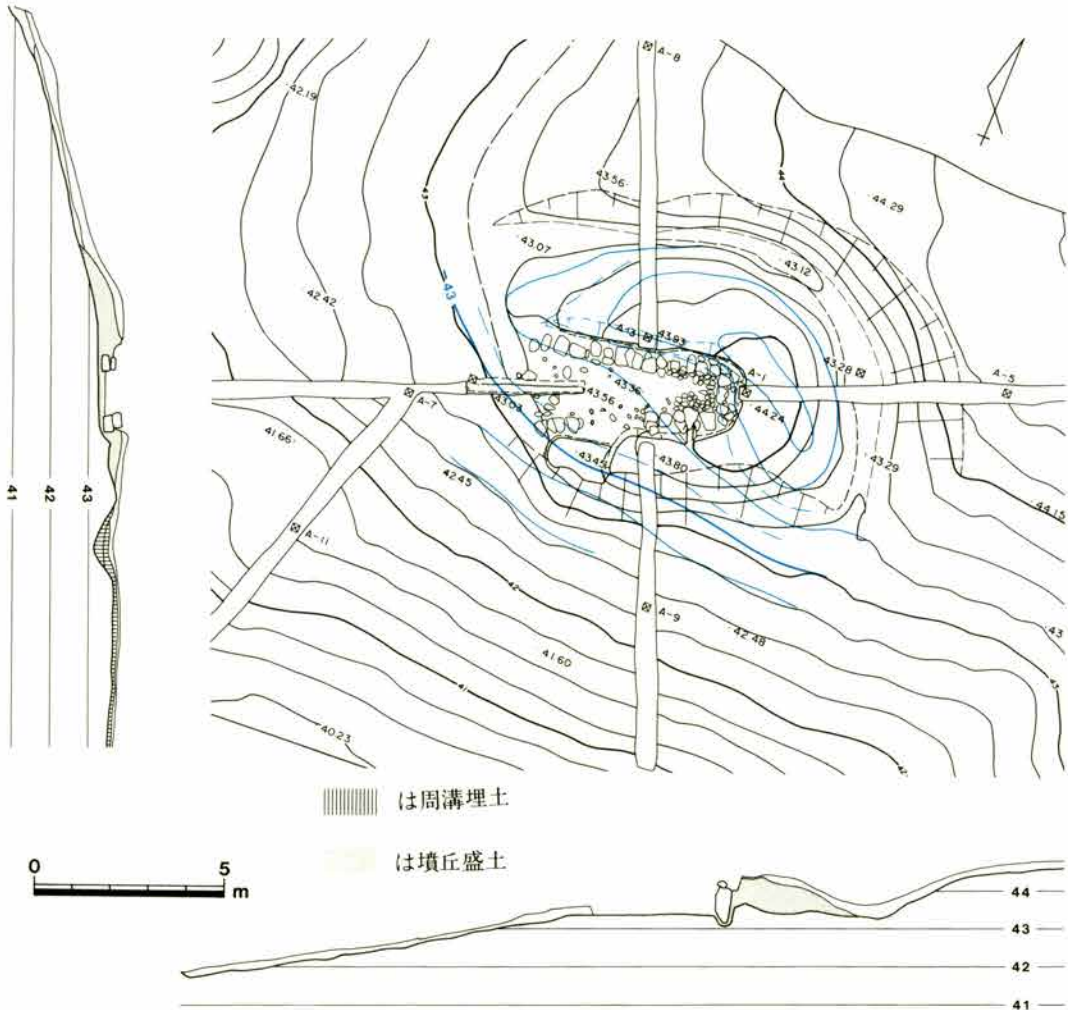


Fig 30 2号墳墳丘図(赤色のコンターは墳丘下地山地形)

にあたる西側にかけて尾根筋が通るようで、傾斜が緩くなっている。

墳丘西側では、標高43.25mのコンターが周溝に入り込んで石室開口部に続いて墳丘を形成している。一方、標高43.125mのコンターは地形にそって43mのコンターラインと並行し、自然地形の状況であるが、後者のコンターの方向が石室主軸に斜交することから、ある程度の地山流出の可能性がある。

また、墳丘南側の標高43.20m付近にある盛土端を墳丘裾にすることはできない。それは、墳丘盛土のコンターラインが谷のコンターラインにほぼ並行した状態で現墳頂まで及んでいることや、石室主軸を中心にして北側の墳丘裾を折り返し、8mの墳丘規模と推定しているが、折り返して求めた墳丘裾が自然地形となっている42.75m付近になってしまうからである。

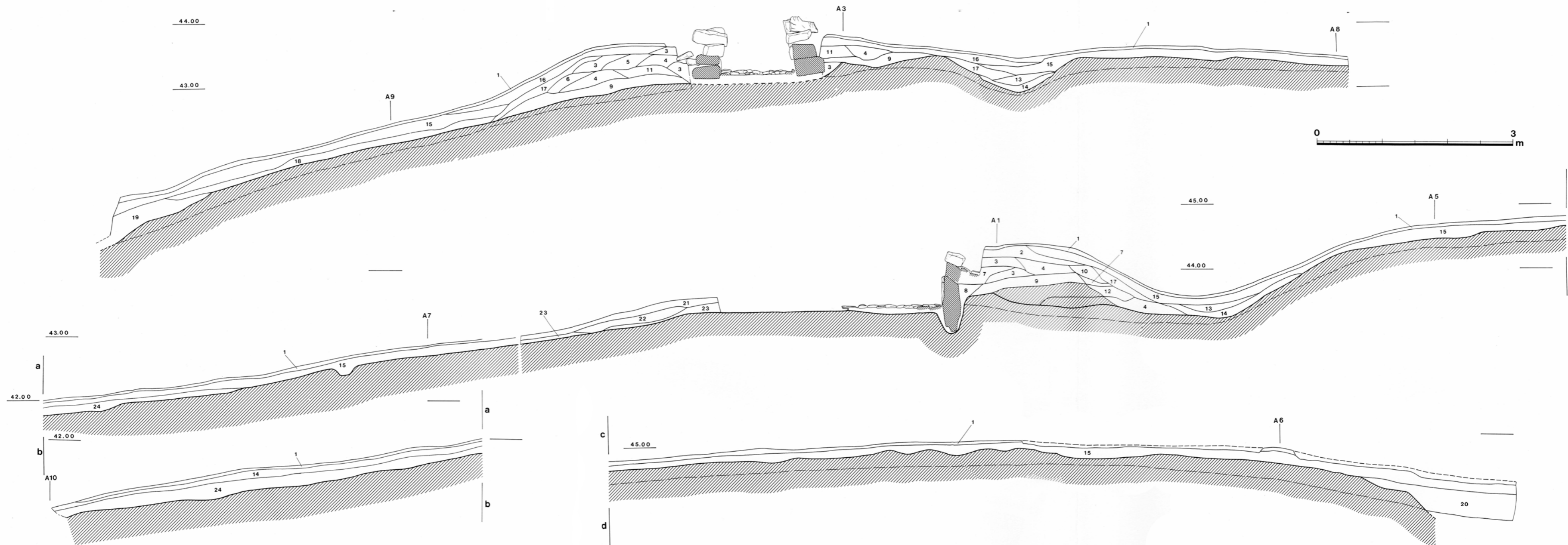
石室背後の周溝底が最も高く、西・南方向に若干浅くなっている。周溝南端では、標高43mと43.25mとの間が広がって平坦になっているので、周溝の延長部分にあたると考えられる。周溝は、1号墳と異なりほとんど埋っていなかった。そして1号墳の周溝の断面形がV字に近く、墳丘側の傾斜が強いのにに対して、2号墳の方が両側とも同じ傾斜になっているという違いがある。これは、墳丘構築の方法が削り出しを主にするのか、それとも墳丘基底面から盛土を行なうか、という工法の違いに反映されると考えられる。

地山は周溝に沿って「L」字の土堤状に隆起し、盛土は石室部分から南側にかけて石室基底面を作り、さらに土を盛り上げて墳丘を構築している。盛土の一単位は大きい。そして叩き締めの痕跡は認められず、あまり締りのない盛土である。

地山の上に堆積している旧表土系の土と考えられる炭粒混じりの灰黄色砂質土が、墳丘のほぼ全面にみられる。炭粒が土の中に入るのは、墳丘構築前の山焼きの痕跡であろう。その上に、黄褐色粘質土系や暗赤褐色粘質土系が、水平堆積されている。これらの土は、地山を盛り上げたもので、粘質・砂質あるいは、白色粒の入り方などの差異がみられる。

石室掘り方は、地形の高い墳丘背後から右側壁方で第1段の石材にのみ見られ、谷に面する左側壁では盛土を行なって見かけの掘り方状にしている。つまり、墳丘外側から盛土をおこない石材裏を溝状にして裏込め土を充填している。次の盛土は、石室第2段相当になり、石を組み上げながら墳丘を構築していることがわかる。このように石室掘り方を持たない構築方法となっている。

周溝下層は、墳丘や尾根からの流土である淡黄褐色粘質土が周溝の傾斜に沿って堆積し、その上に有機土層である黒褐色砂質土がある。石室背後の土の堆積は顕著ではないが、墳丘左右に墳丘流土が厚く堆積している。特に、左側壁玄門部近くが大きく破壊され石材が抜かれながら、奥壁近くの側壁が0.8m程の高さで4～5段の石組が遺存していることからわかるように、墳丘・石室の破壊が主に前面（西半分）に対しておこなわれたと推測できる。



- |                       |                              |
|-----------------------|------------------------------|
| 1. 表土                 | 15. 暗灰色砂質土                   |
| 2. 黄褐色粘質土(地山白色粒含む)    | 16. 15よりも粘性強い                |
| 3. 暗赤褐色粘質土            | 17. 暗黄灰色砂質土                  |
| 4. 暗赤褐色粘質土(地山白色粒含む)   | 18. 15の土に墳丘盛土と思われる土がブロック状に入る |
| 5. 3よりも砂性強い           | 19. 暗黄灰色砂質土                  |
| 6. 3よりも粘性強い           | 20. 淡黄灰色粘質土                  |
| 7. 4よりも白色粒多い          | 21. 淡灰褐色砂質土                  |
| 8. 灰黄色粘質土             | 22. 黒褐色粘質土(有機土層)             |
| 9. 灰黄色砂質土(炭粒若干含む旧表土か) | 23. 黄褐色粘質土(汚れている)            |
| 10. 4よりも赤っぽい          | 24. 暗赤褐色粘質土                  |
| 11. 4よりも砂性強い          | 25. 淡暗黄褐色粘質土                 |
| 12. 赤褐色粘質土            | 26. 暗赤褐色粘質土(古墳破壊時の土)         |
| 13. 黒褐色砂質土(有機土層)      | 27. 黒褐色砂質土                   |
| 14. 淡黄褐色粘質土           |                              |

Fig 31 2号墳墳丘土層図

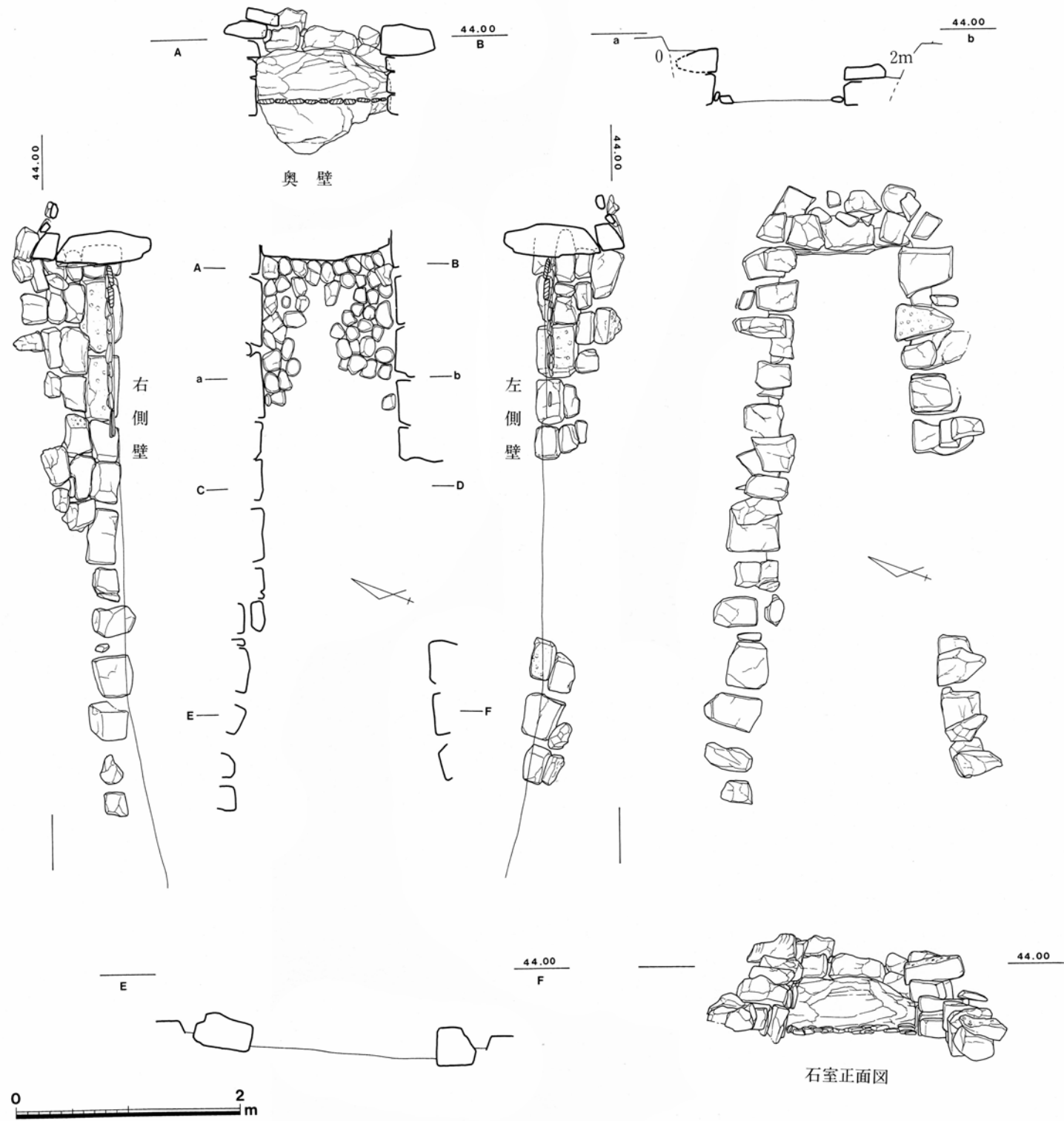


Fig 32 2号墳石室展開図

## 第2節 石 室

データ			
石室長	5.0 m	現存高	0.82m
〔玄室〕 右側壁長	3.36m	〔羨道部〕 幅	1.61m
玄室奥幅	1.16m	開口部幅	1.95m
同最大幅	1.22m	〔開口方向〕	N-69° 58' - W
推定玄門幅	1.20m		

ほぼ西南西に開口する横穴式石室で、玄室には偏平な川原石を敷き、奥壁第一段に安山岩を用いている他は、泥岩質の石材で横穴式石室を構築している。しかし、2号墳は、羨道が玄室よりも一段広がる横穴式石室で、羨道部というよりも前庭部という表現が適切かと思われる。しかし、無用の混乱を避ける意味から「羨道部」としたい。また、本墳も真南に開口していないのは、1号墳と同じように石室前面の空間を確保するために、地形に左右されて作られたものと考えられる。

### 堆積状況

石室内の堆積状況は、至極単純である。奥壁近くと羨道とも埋土状況が同じなので、石材抜き取りと同時の乱掘、その後の土の堆積という過程が考えられ、それ以後、今回の発掘にいたるまで人の手が加わった形跡は見られない。埋土中より乱掘時期を示す遺物の出土はない。周辺から珠洲焼甕片が出土しており、その年代の一端を示す可能性がある。おそらく、1号墳と同じような時に乱掘されたものであろう。なお、近接する大畠古墳群の横穴式石室の破壊は、石材採取を主目的にしていたとの付近の住民の話がある。1号墳でもそうであるが、遺物の遺存状態の良さがこのような目的にあったためと思われる。

堆積土は基本的にレンズ状の堆積を示す。床面から、汚れた黄褐色粘質土、やや暗い淡灰黄色粘質土、淡灰黄色粘質土、表土という層序である。a-b断面でのみ黄褐色粘質土が、右側壁際の敷石が遺存している部分に対応するように見られる。この土を、これより上の堆積と一連のもの

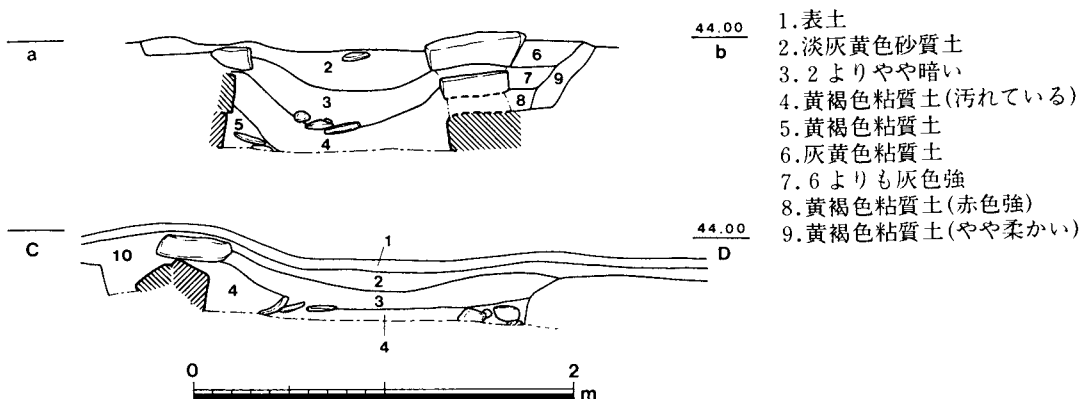


Fig 33 2号墳石室土層断面図

のと考えるか、それ以前と考えるかで、その評価が大きく異なってくる。つまり後者に考えると、天井石のある段階の自然堆積となる。しかし、側壁第一段まで約20cmもの厚みをもっていることから、自然堆積の可能性は少なく、石室埋没にかかる一連の堆積土の可能性が高い。

#### 墓坑

墳丘盛土がその基底面から見られることから、墓坑を掘削せずに石室を構築していることがわかる。ただし第1節の墳丘で述べたように、石室第一段までの盛土段階が、石室周囲から土を盛り上げるために石室構築部分を窪ませたようになっているので、あたかも墓坑のような観を呈する。基本的に、盛土は石室各段ごとに施されている。

#### 奥壁

奥壁は、高さ82cmの第三段まで遺存していた。第一段は1石からなり、1号墳と同じように永禪寺1号墳箱形石棺に用いられているような安山岩質の石を用い、床面下50cm近くまで埋め込んでいる。第二段で石の高さを揃えるように、低くなっている左側壁側には、1石入れている。しかし不安定な状態になるためか、側壁に組込むようにしている。

第三段は、右側1石しか残っていない。第二段までが持ち送りが見られないのに対し、その上の石は若干せりだしている。石の外側が下がった状態となって、いわば「そっくり返った」状態になっているので全く築造当初の状態と言えないが、この段から持ち送りが始まっていると考えられる。それは、側壁が、床面から第三段まで垂直に積み上げながら、それ以上に持ち送

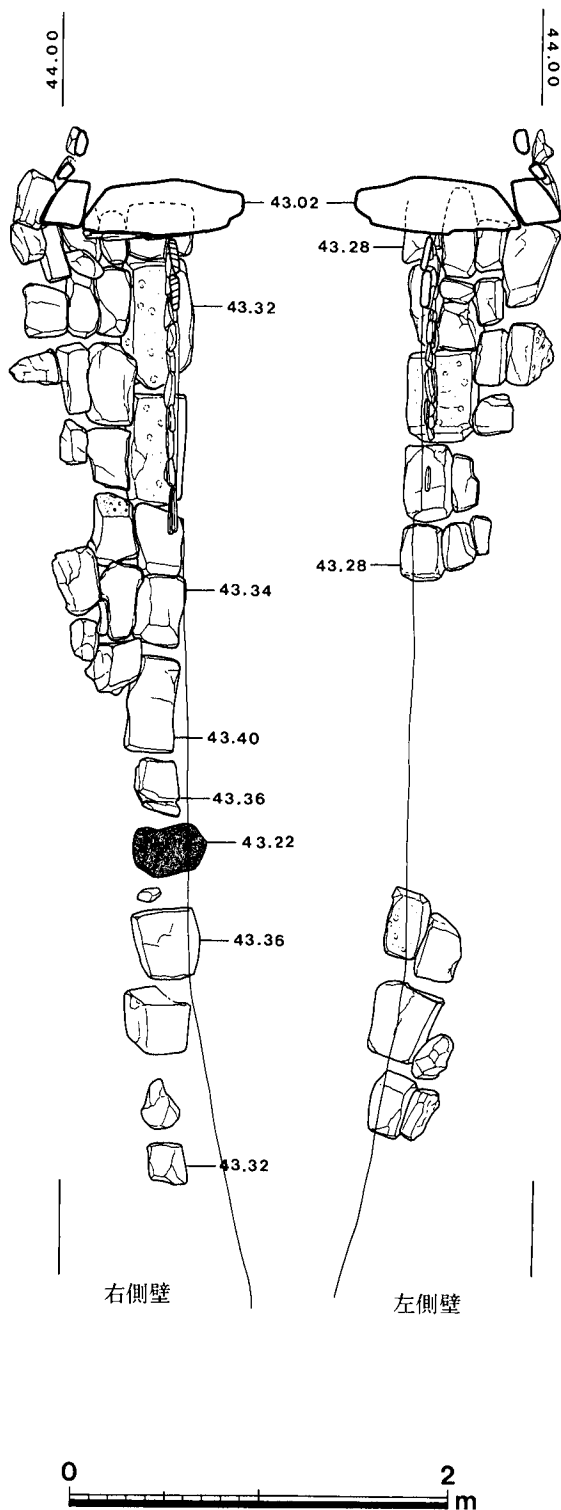


Fig 34 2号墳側壁詳細図

りが見られる状態からである。

### 側壁

左側壁玄門付近の石材が抜き取られている他は、奥壁近くを中心に良好な遺存状態である。全体的に第一段石材の床面への掘り込みは浅く、10cm強の深さしかない。これは、2号墳が盛土と同時に石室構築方法をとっていることによるものであろう。

側壁第一段は、比較的大きめの石材を用いている。長方形の長辺を主軸に平行にして、その小さな面を石室に向けている。右側壁で標高43.6m付近で目地が揃っている。しかし左側壁では、同じ高さで目地が揃いつつも、奥壁から第3石以外が二段構成となっている。つまり、右側壁第一段に相当する左側壁は、基本的に二段構成となっている。これは、最下段が腰石的な使い方をしていないことから頷けることである。また、右側壁の方が、より大きさの揃ったそして形のよい石材が多いことから、左側壁より優先して構築したのであろう。

最下段の底面のレベルは、概ね同じで水平である。そして右側壁「袖石」は、一段深い状態となっている。そして、各段の目地が概ね通るようになっているが、左右側壁奥から5石目で第一段が低くなることから、多少段構成が変わるようであるが、大きな変更はない。

### 玄門部

右側しか残っていない。玄室側壁が玄門にいたって、立柱のような石材になる。他の側壁用材と異なって約15cm深く掘り込まれている点は、袖石などのより大きな加重のかかる部位の構造に似ている。しかし、その高さが30cmしかなく貧弱なので、両袖式横穴式石室の袖石と同一視することはできない。そして、その外側に更に1石おいて、いわば側壁の2重構造となっている。羨道は、2重目の石に連続する。このように、玄室から玄門にいたって一段広がり羨道に続くという、特異な構造をもつ。

玄門の立柱の石材を仮に「袖石」とする。「袖石」の床面上の高さは、わずか30cmである。しかも、全体的に内方向に傾き、上面も内側に面を向けているので、築造時よりも内傾してしまっ

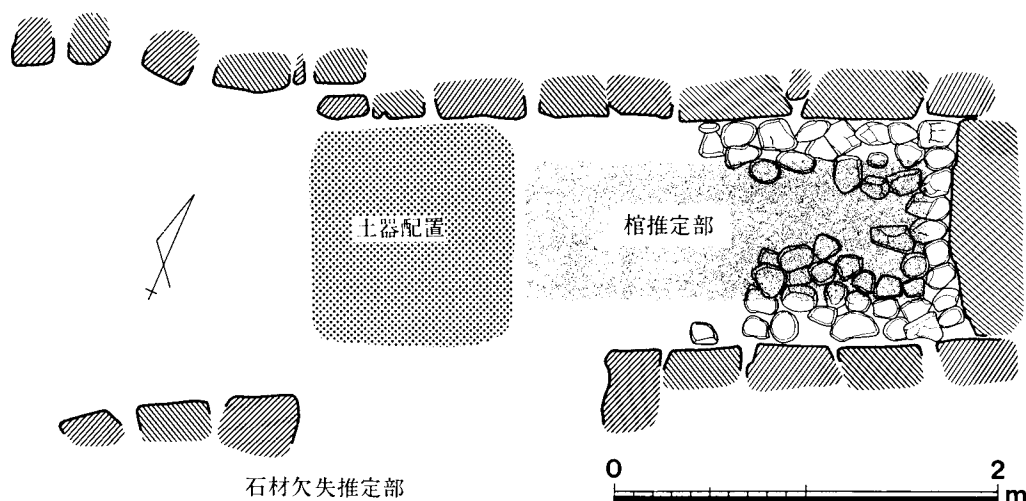


Fig 35 2号墳本棺推定部と土器配置概念図

たとえられる。そして2重目の石が「袖石」とほぼ同じ高さなので、第二段以上は、両側に石材がかかるように積まれて直角に広がっていたのではないかと推測される。

玄室左側壁を伸ばすと、羨道が右側壁と同じように広がっていることがわかる。石材抜き取り穴を検出できなかったが、羨道を左右対称形であったと考え、羨道をもつ横口式石槨に類似する構造となる。

#### 羨道部

左側壁羨道構成石材は、石組が全体的に開口部方向に傾いているので、動いた状態と考えられる。しかしながら、第二段石材が遺存していることから、石材のずれはそれほど大きくないものと考えられる。そして、現状での羨道は、若干開きつつも直線的に伸びる構造となっている。石室と墳丘との構造的関係はわからない。

右側壁開口部から1・2石目は非常に貧弱であるが、対になる左側壁は若干小振りの石材を使用しているものの、二段目石材がその上にのり、さらに上に壁体を構築できるように面をもっている。そして、玄室よりの二段目石材は、その上面高が隣の一段目石材に揃うようで、それが玄室第二段の高さ（標高43.6m）に相当する。このように、少なくとも開口部近くからそれなりの高さをもった壁体が想定される。

1号墳では、玄門付近までしか天井石がなく、羨道は基本的にオープン構造と考えているが、2号墳は反対に開口部近くまで天井石の存在が予想される。平面形ばかりでなく、壁体構造も違うことを示す。

#### 敷石

敷石は、1号墳と同じように20cm前後の川原石を用いている。現状では、奥壁から1m強までしか遺存していないが、築造時に玄室のどこまで敷かれていたか不明である。1号墳と同じように考えると、玄門から1mまで敷石が施されたであろう。

### 第3節 遺物出土状況

遺物は、攪乱された状態で出土しているので、現位置を保つものは全くない。遺物は、奥壁から2m近く開口部よりの所、すなわち玄門付近にかけて集中してみられる。これは、左側壁玄門付近の石材の抜き取り位置に合致するので、前節の堆積状況の項で述べたように、石材抜き取りに伴う攪乱の結果と考えられる。また、周溝や前庭部を中心に瓶類の破片が散見している。このような状態なので、完形品は皆無に近い状態である。

床面は、攪乱によって若干掘り込まれている。特に石材抜き取り付近は抜き取り後にできる落ち込みなどの凹凸が見られるために、10cm以上の遺物のレベル差が見られる。堆積土層からそれ以降の掘り返しが認められないので、複数回の盗掘の可能性はない。したがって、破片と化してしまった土器類は、それ以後に大きくその場所を動いていない可能性がある。

横瓶（遺物番号29以下数字のみ）の破片は、右「袖石」付近に集中し、それから奥壁にかけて重複するように小形の平瓶（23）の破片が見られる。また、長頸壺（24）は奥壁側抜き取り付近



から平瓶（23）付近までの広範囲に破片が分布するが、その主な分布は石抜き取り付近である。それぞれの破片の集中する所が、本来置かれていた場所に近い位置であるという原位置論的前提であれば、横瓶（29）が右側壁玄門、平瓶がその奥脇にあり、長頸壺がさらに右奥の左側壁際に置かれていたと考えられる。

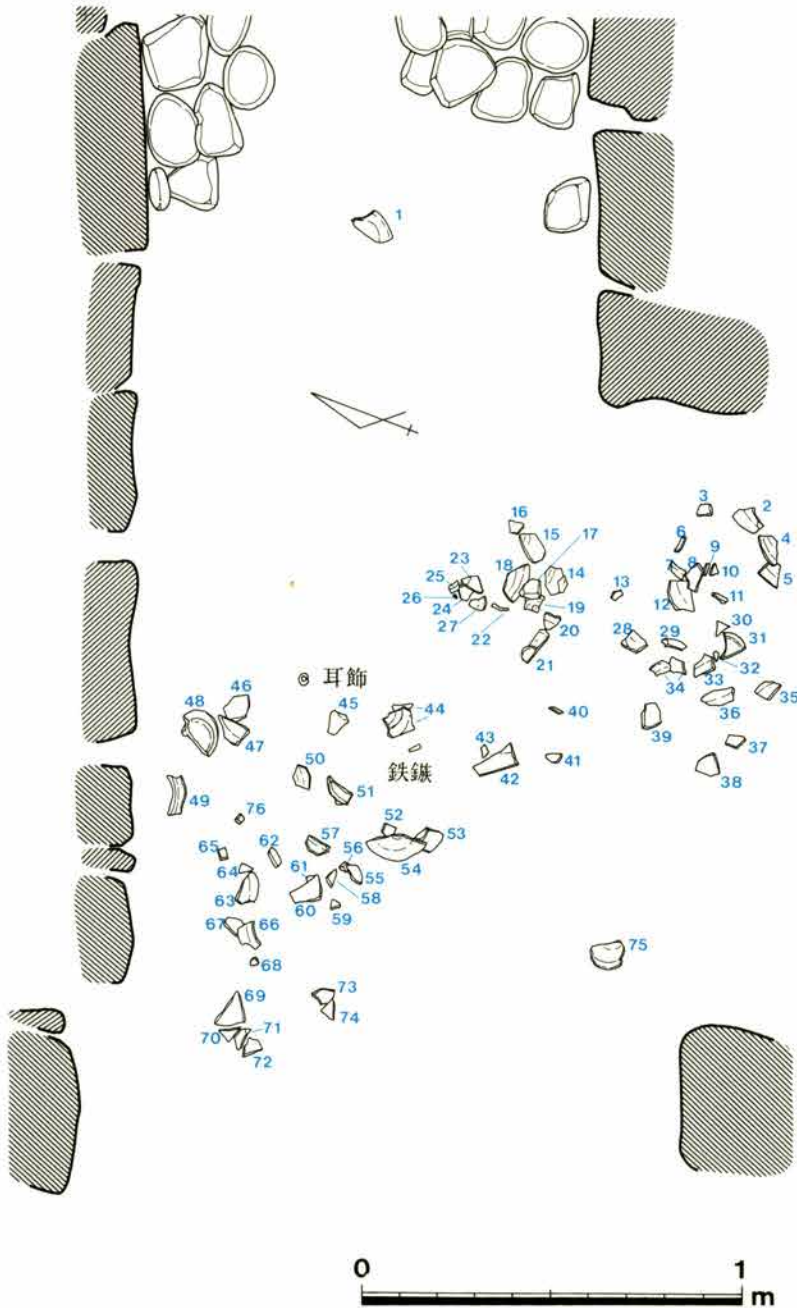


Fig 36 2号墳遺物出土状況(番号は、遺物取り上げ時につけたものである)

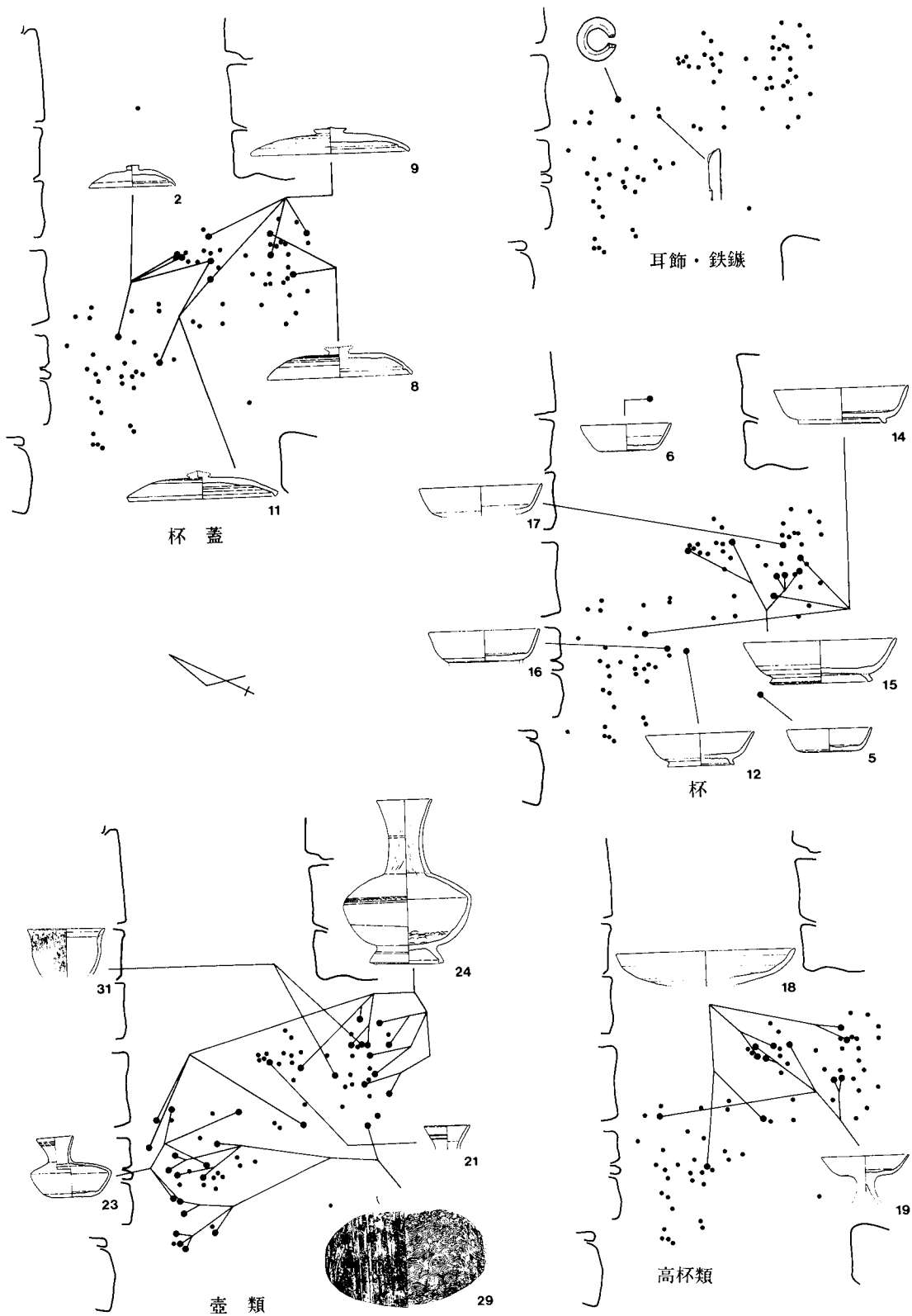


Fig 37 2号墳遺物出土関係図(遺物は縮尺不同)

杯類は破片数が少ないので、壺類のようにいかない。破片は広範囲に分布しているが、横瓶奥から抜き取り付近にかけて斜に分布域がある。そして、杯蓋と身の分布に大きな差が認められないのは、それがセット状態で使用されていたからである。石材抜き取り付近に比較的多く出土しているのは、横瓶よりも奥に置かれた杯類が主体を占めるからであろうか。

横瓶の一破片が抜き取り部分から出土したり、杯B片(14)や杯A片(6)、杯B蓋片(9)などが右側壁から抜き取り穴にかけて出土している。この状況は、石材抜き取りに伴った攪乱がこの方向から行なわれ、遺物の持出しがこの方向からなされたことを示す。

耳飾が奥壁から約2.5mで出土し、床面よりも約10cm浮いた状態である。二次的に動いた状態であり、1号墳と同等規模の木棺の長さを2mとするとその外側から出土していることからわかる。また、その30cm南で鉄鏃が出土している。同一個体かどうか不明だが、鉄鏃の籠被片のかつぎが羨道部近くから出土しており、これも当初の状態ではない。

なお、1号墳と同じように鉄釘の出土は全く見られず、棺釘使用の木棺を想定することはできない。また、1号墳と同様に、2mの棺でその前面に供献土器群という配置を考えると、土器の分布状況から復元的に考えた土器配置と矛盾しない。

## 第4節 出土遺物

### a 耳飾

いわゆる金環で、比較的小型の部類である。外径1.8cm、環体幅3.5mm、同厚5mm、環体開き部間1.4mm、重量5.9gを測り、金が良好に遺存している。銅芯の錆びの状態が、環体開き部から見える。銅芯の錆びの状態と表面の金の状態とがあまりにかけはなれているので、ある種の違和感がある。おそらく金は、鍍金のような薄い膜ではなくて、金張りのような厚みのある金の薄板を張り付けているものと考えられる。開き部の金を最後に被せているために、そこだけ剥落している。

なお、菅谷文則「古墳時代の耳飾について—とくに金環を中心として—」『古代国家の形成と展開 大阪歴史学会25周年記念論集』吉川弘文館(1976年)と、永嶋正春「耳飾の素材と製作技法について」『井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録』言叢社(1988年)を参考にした。

### b 鉄鏃

ともに長頸鏃で、1が刃部、2が籠被のかつぎである。同一個体の可能性もあるが、はっきりしない。1は刃部から小さな腸袂をもち、刃部に比べてやや太い籠被に続く。刃部幅7mm、背幅2.5mm、籠被幅5.5mmを測る。2は籠被で、錆化によって表面が全て剝離し、当初の形状を留めていない。

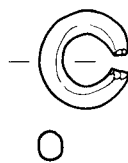


Fig 38 2号墳出土耳飾

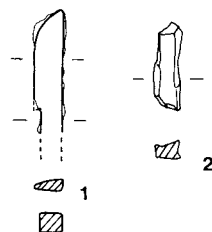


Fig 39 2号墳出土鉄鏃

c 須恵器

杯G (1~3、4~7)

1と2の鈕の形態は、扁平なボタン状を呈して左右への突出が見られないという点で類似するが、返りの形態が異なる。すなわち、2の返りは鋭利に内方に向くのに対し、1は、丸みをもち緩やかに巻き込む形態である。そのために体部は、1が直線的なのに対し、2は内に包むように傘状を呈する。3は鈕を欠損しているが、全体的プロポーションが2に近い形態である。

杯は4個体出土し、6・7の口径が11.4cmと若干大きい。いずれも、ヘラキリ後にナデなどの2次的調整や圧痕が見られ、平滑に仕上げられている。また、底部から体部にかかる腰の部分にも2次的な調整がおよび、直線的な体部となる。内面には多少の凹凸が見られる。破片となっているものが多いので、蓋と杯とのセット関係は不明である。

杯B (8~11、12~17)

8・9は内面に返りをもつタイプの蓋で、1号墳の分類にしたがえば、a類ということになろう。しかしながら、1号墳のa類は鈕の頂部が凹んで中心に小さく突出するという形態だが、2号墳では9しか鈕形態がわからないものの、鈕頂部の突出の度合いがより強く、1号墳というb類に近い形状である。

10・11は1号墳のb類に当てはまる。11の口径が18.6cm、10が13.7cmと大きさに隔たりが認められる。10に見あう杯の口径は12.5cm程度となり、杯Bの蓋とするにはかなり小さい。口縁端部の形状も、11や1号墳の24・25よりも鋭角に、そしてしっかりと作っている。調整などの技法はともに同じであるが、ロクロの回転方向は逆である。この違いが時期的なものの可能性があらう。つまり、より新しい要素として、10が杯A蓋となる可能性を考えたい。

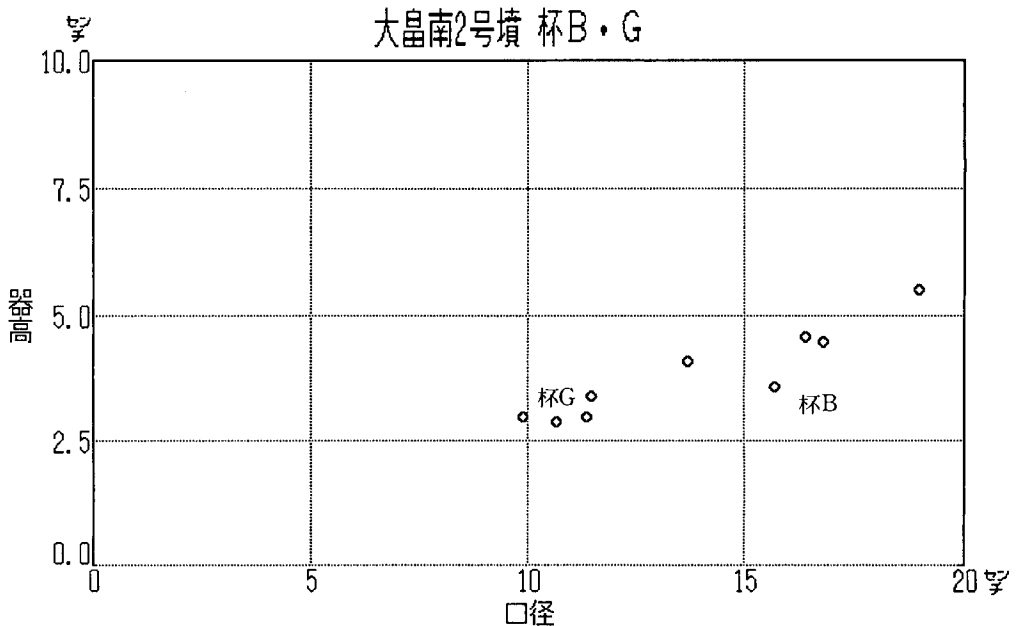


Fig 40 2号墳杯法量図

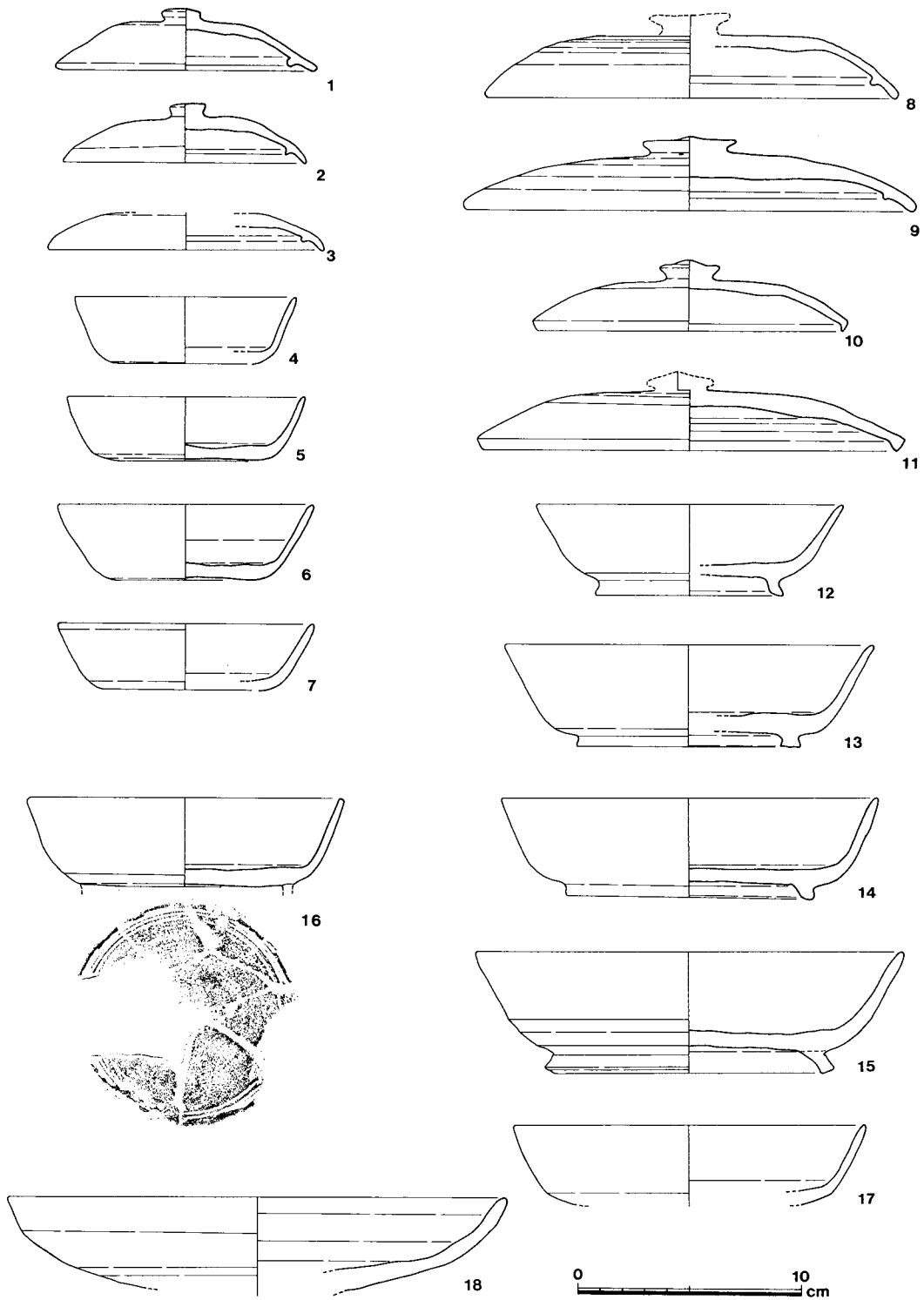


Fig 41 2号墳出土土器(1)

杯は7個体出土している。12の口径が13.7cmと15cmよりも小さく、体部の外傾度もやや強く、杯B中において特異である。高台はいずれもしっかりとしており、12・14の底面が内側が浮く状態、13の底面が下に付く状態、15が外側に浮く状態となっている。体部途中までヘラケズリがおよび、15ではその痕跡を明瞭に残している。16は、高台が剥がれている。杯の接着面に円周状に沈線を掘り込んで高台の接着を容易にする加工を施している。

承盤 (18)

脚部を欠損している。緩やかな傾斜を持つ底部から、不明確に立ちながらその度合いを強め丸い口縁部に至る。外面はヘラケズリ・ナデ、内面は全面ナデ調整が見られるが、全体的に粗い作

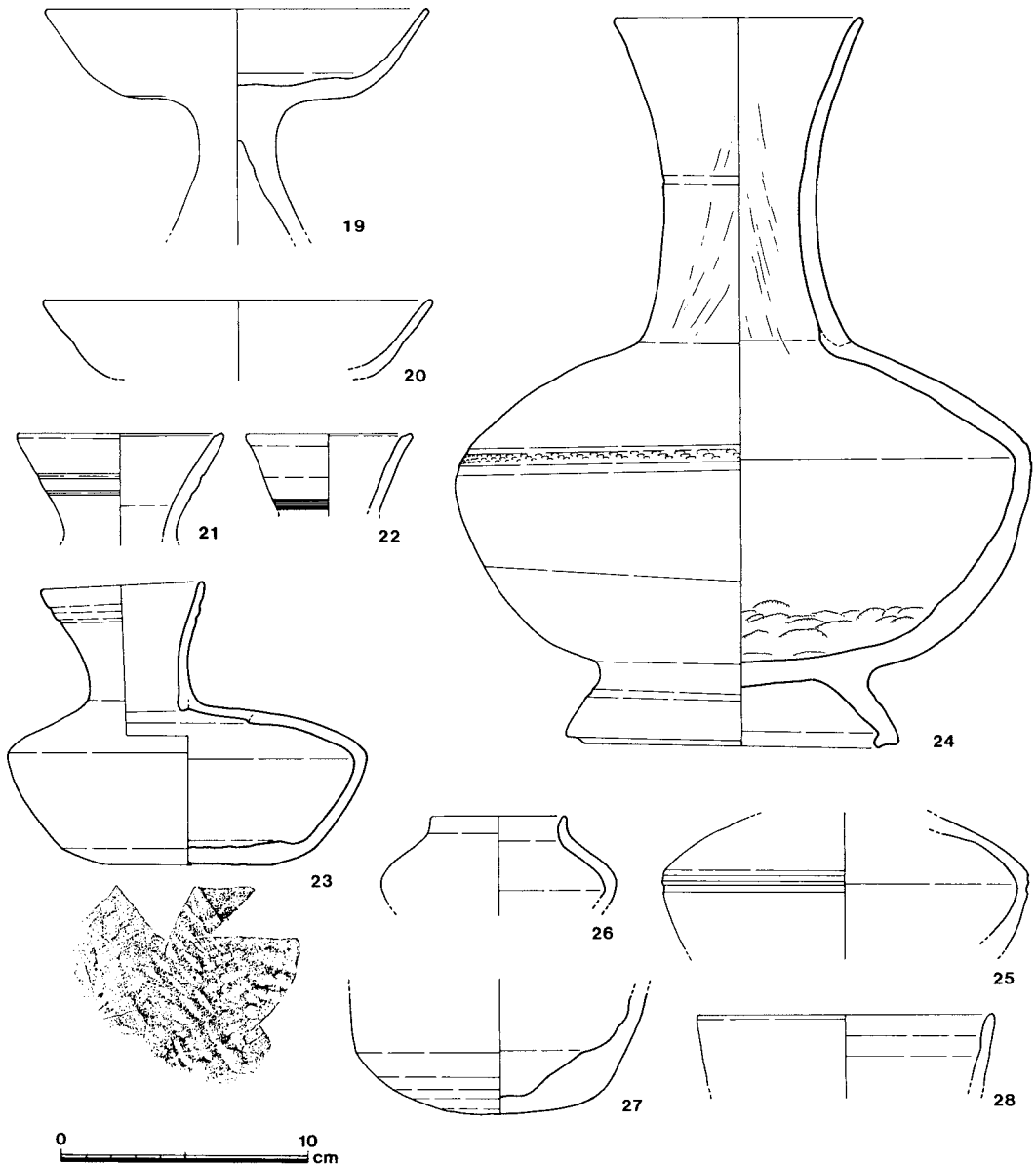


Fig 42 2号墳出土土器(2)

りである。体部から口縁部にかかる立ち上がりは、大きく2回の屈曲が見られ、粘土紐巻上げ時の痕跡と考えられる。

#### 高杯 (19・20)

19は脚裾部のみ欠損している。全体的に遺存状態および焼成は悪く、調整などほとんどわからない。1号墳出土高杯 (Fig25・33・34) に類似するが、脚柱部と杯部の接合部分が中実となっている点で異なる。灰白色を呈し軟質である。海綿骨片を多く含む。なお、20の体部の傾きが杯Bに比べて大きいので、高杯の杯部の可能性が考えられる。

#### 平瓶 (21~23)

21・22は口縁部のみである。23は口縁上部に面を持ち、外面に2本の沈線をめぐらせている。頸部は口径に比べてよく締まっている。24も口縁上部に面を持ち、外面に装飾は見られない。23はほぼ完形である。平な底部と比較的丸く屈曲する体部、そして丸く収める口縁端部下に2本の沈線をもつ口縁部に至る。口縁部は少し歪みを生じているが、当初は余り開かない口縁形態と考えられる。底部にタタキが見られる他、ヘラケズリも施され、平滑な底部にしようという意図がうかがえる。

#### 長頸壺 (24・25)

24が完形に近く、25は体部中央のみ遺存している。24の高台は、高く直線的に伸び、底面が外開き気味でどっしりと落ち着いている。そして下膨れのレンズ状を呈する体部そして反り気味の口縁部に至る。体部上下半の境界に2本の沈線に挟まれた刺突文を施している他、口頸部中程にも沈線が見られる。体部下半内面にナデつけたような工具痕が認められる。体部下半はヘラケズリされているが、その後のナデによってきれいに消されている。25は24よりもふた回りほど小さ

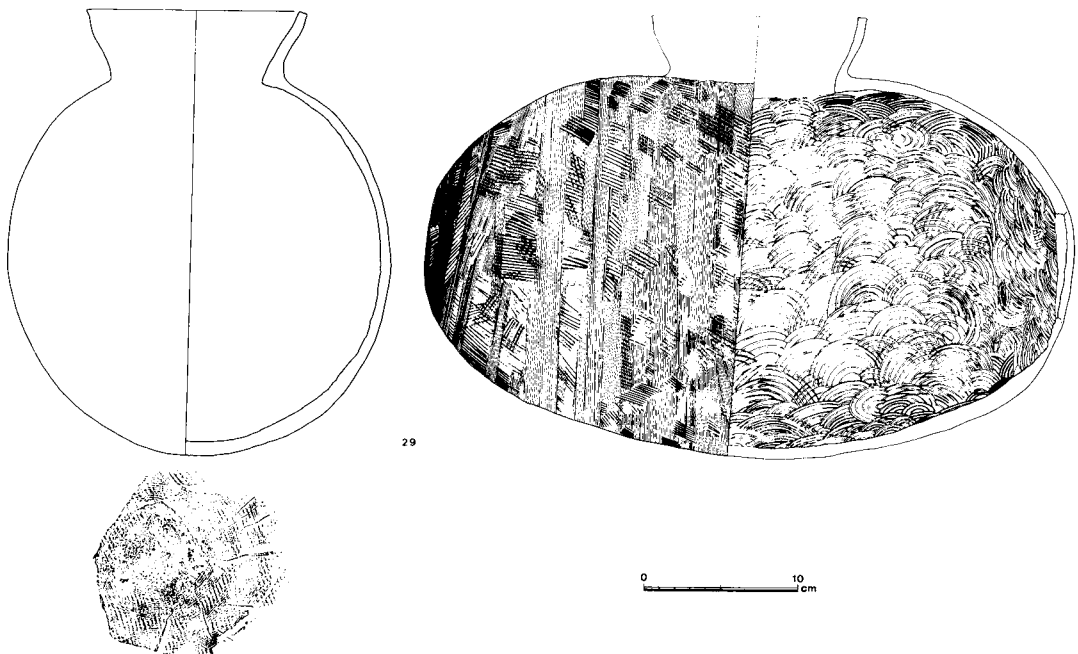


Fig 43 2号墳出土土器(3)

いが、概ね同じ器形である。体部中央に2本の沈線がある。なお若干の焼き膨れが見られる。

#### 短頸壺 (26)

口径5.6cm、体部最大径9.6cm、現存高3.6cmを測るミニチュア製品で、底部を欠損している。欠損部を推定復元すると、体部最大径が器高の中ほどで、約6cmの器高と考えられる。このような小形品は、子持長頸壺の一部品と考えた方が妥当である。すなわち、長頸壺がもう一個体存在したことがわかる。

#### 横瓶 (27~29)

27は小形、29は通有の大きさである。27は横瓶の短側部にあたると思われる。内面に短側部を作り出すための指による押出しと思われる凹みが見られ、外面にヘラケズリが施されている。29はほぼ完形に近い。俵形の体部に直口する口縁をもつ。内面に同心円文の当て具痕、外面に平行タキの後にカキメを施しているが、カキメは全面密の状態ではなく、間隔が粗く器面を平滑に

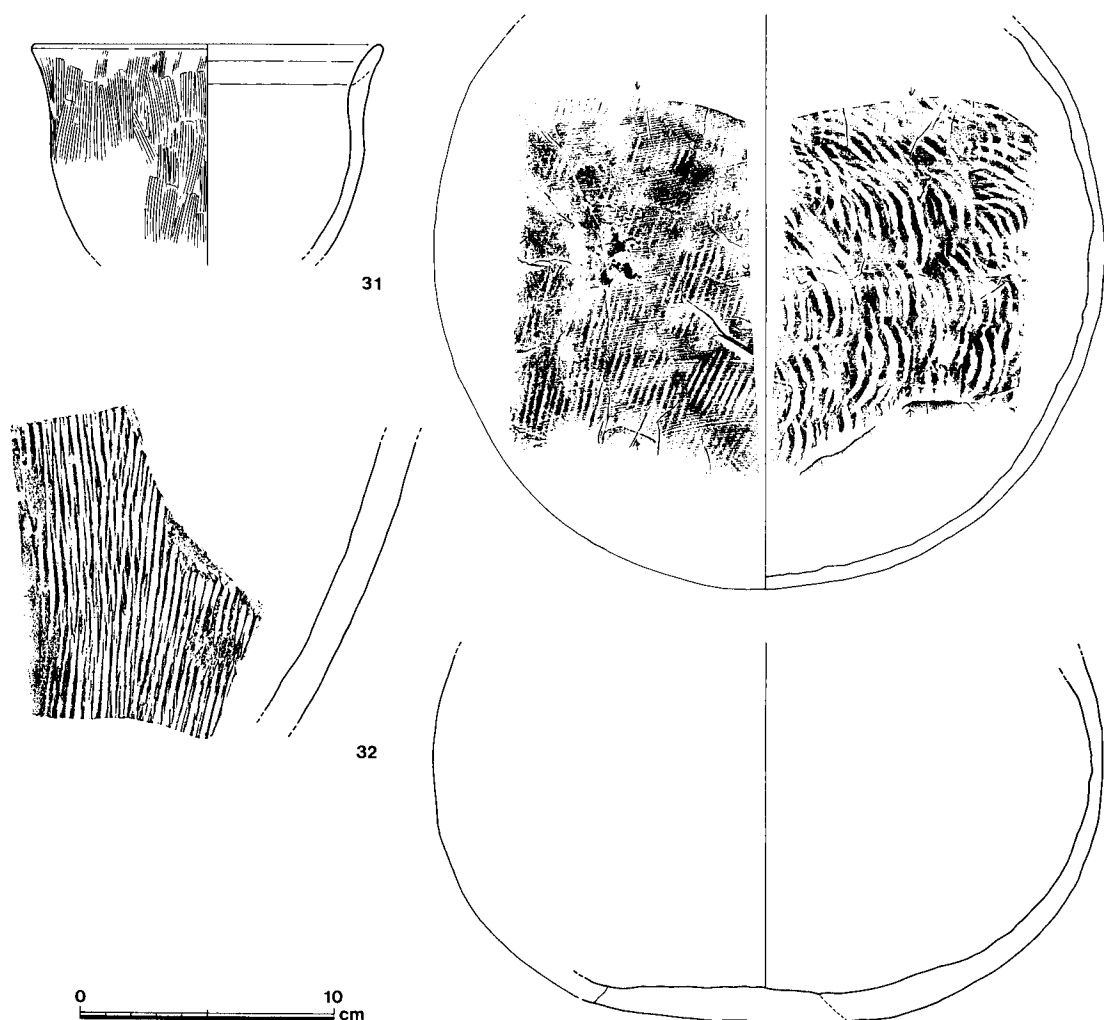


Fig 44 2号墳出土土器(4)



するというよりも、大きな凹凸をなくす目的と考えられる。28は口縁部のみで、口径が12cmを測り、直線的に伸びる形状である。口径と直線的な形態から、横瓶の可能性はある。

#### 提瓶 (30)

提瓶とは断定できないが、閉塞板の状態からその可能性を考え、偏球形の体部の片面部分と考えられる。内面に同心円文当て具、外面にタタキの後カキメを施している。提瓶の口縁部分に相当する破片の出土はない。

#### c 土師器

#### 鉢 (31)

口径13.8cm、を測る小形の鉢で、底部を欠損している。外面はハケ、内面はナデ調整だが、部分的に接合痕を残している。底部はおそらく丸みを持ち、開き気味に頸部に至る。頸部のくびれの縮りは弱い。

#### d 珠洲焼 (32)

外面タタキ、内面ナデの調整を持つ甕の破片である。内外面が灰白色を呈し、生焼けである。時期は不明。

## 第5章 その他の遺構等

### 第1節 遺構

調査区内で、表土・流土層を除去し地山まで下げて精査したものの、古墳以外の遺構の検出は、僅かに土坑1基 (SK01) のみであった。

#### SK01

SK01は、尾根筋の最も高いところに位置している。長径1.2m、短径0.88mを測る平面楕円形、深さ10cm強の皿状を呈し、東の壁には焼土が遺存している。焼土は、地山に接し、以下に述べる暗黄灰色粘質土にかけてあるので、単発的ではなくてある一定期間に火が焚かれたことがわかる。土坑底はほぼ平坦で、部分的に炭を含む地山系である暗黄灰色粘質土が、底から壁にかけて薄く堆積している。そして上層には、火焚きによる堆積土と考えられる、炭を多く含む黒灰色砂質土が全体にみられる。遺物の出土がなかったので、時期不明である。

1. 黒灰色砂質土 (炭混じり、炭量多い)
2. 暗黄灰色粘質土 (部分的に炭)

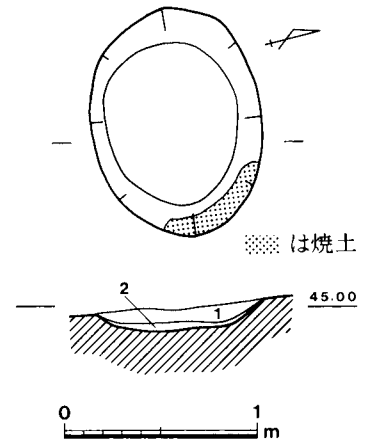


Fig 45 SK01 実測図

## 第2節 遺物

1は楔形石器で、1号墳周溝東北区から出土している。透明感があり挟雑を含まない黒曜石から作られている。長さ28.0mm、最大幅17.1mm、厚12.7mm、重さ6.73gを測る、くさび状を呈する。先端は、使用によると思われる剥離が一直線になって潰れた状態になっている。また、反対側は平坦面となっており、その三方のエッジに小さな剥離痕がみられる。2は剥片で、灰色の頁岩系の石である。3.4gを測る。使用痕はない。

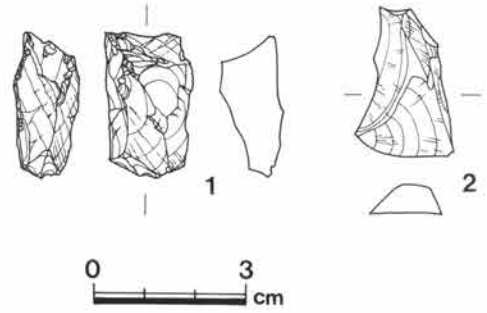


Fig 45 出土石器



Fig 46 航空写真

## 第6章 総括

発掘調査によって、本古墳群の築造が7世紀第4四半期であることを推定した。7世紀は、横穴式石室墳の築造が急速に衰え、いわゆる「終末期古墳」あるいは「飛鳥時代の古墳」と呼ばれる古墳の築造が顕著である。終末期古墳の概念は、7世紀という時期的なものばかりではなく、特定階層による特定墳墓をさす。このような時代背景の下に大畠南古墳群が作られたことが、古墳群理解にあたっての前提として存在する<sup>1)</sup>。さらに、7世紀末から8世紀初頭に作られた横口式石槨である小松市金比羅山古墳が、大畠南古墳群の直後に作られていることから〔浜野1983〕、その特殊性がうかがわれる。

一方、珠洲地域は奥能登に位置し、口能登における弥生時代終末から古墳時代全期間を通じて活発な墳墓造営がおこなわれた展開と、全く違う様相である。珠洲では、5世紀後半に永禪寺古墳群が作られ、6世紀後半以降にも横穴墓が200基以上確認・推定されているものの、古墳時代前中後期にわたって継続した古墳造営活動は見られない。このような地域的な特性もまた、前提条件として認識できる。

なお、両墳とも単体埋葬である。

### 第1節 土器の年代的位置づけ

大量に出土した須恵器とともに、1号墳に副葬されていた畿内産土師器の出土に注目できる。畿内産土師器杯Bの口縁端部が小さく内側に屈曲することや、2段放射状暗文と見込みラセン暗文の組み合わせから、飛鳥IV期に属することがわかる。飛鳥IV期の実年代は、7世紀第4四半期と

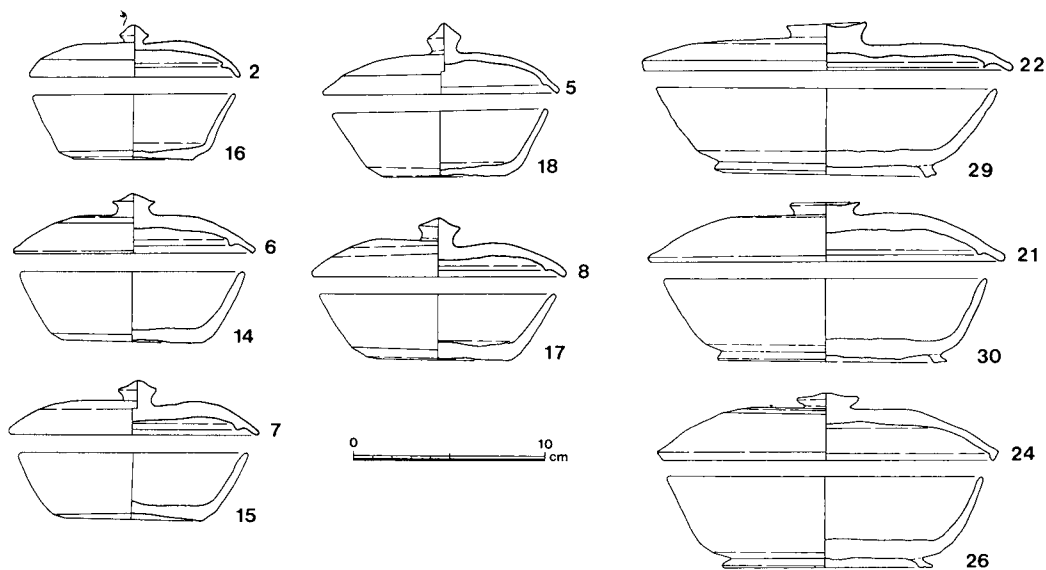


Fig 47 1号墳出土須恵器の杯・蓋のセット関係

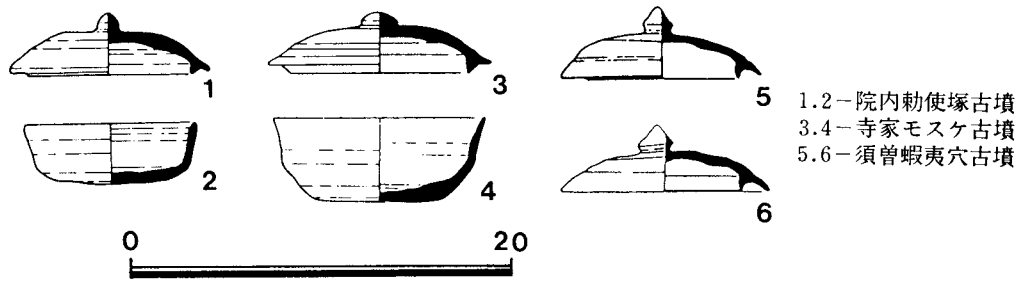


Fig 48 能登の7世紀の古墳出土杯G

考えられている [西1982]。伴出している須恵器杯Bもまた同時期と考えられるが、杯Gはどうであろうか。なお、大畠南古墳群の杯Gを杯Aともいうことができようが、返りを持つ蓋を伴うことから用語の混乱を避けるために杯Gとした。<sup>2)</sup>

七尾市院内 勅使塚古墳の杯Gは口径9 cm弱で、蓋の鈕は乳頭状である。蓋内面の返りもまた、口縁線から下への垂下の度合いも大きい [土肥1985]。また、羽咋市寺家モスケ古墳の杯Gは、口径11.4 cmとやや大きいが、蓋の鈕形態が丸いボタン状を呈し、返りの突出度も高い [羽咋市教委1992]。口径からすれば、新しい要素を感じられるが、鈕が定形的な宝珠形でないことや返りの垂下度が大きいという要素もある。したがって、院内 勅使塚古墳の土器群は、飛鳥編年でいう飛鳥Ⅱ期に相当し、7世紀第2四半期に考えられる。寺家モスケ古墳の土器群は、それよりもやや新しいと思われるが、次の時期になるのか類例の増加を待って判断したい。

能登島町須曾蝦夷穴古墳は双室墳で二石室同時構築されているが、そこから出土する杯Gの口径は、9 cm強から10 cm前後で院内 勅使塚古墳よりも、大きい傾向にある [富田1992]。蓋の鈕は、いずれも整美な宝珠形で、返りの先端が口縁線ないしは内側に位置し、かつ返りの内傾度も大きくなる、という違いがある。これらの土器群は、7世紀第3四半期に属することが、北野博司氏によって論述されて [北野1992]、概ね飛鳥Ⅲ期に平行すると考えられている。

大畠南1号墳の杯Gの特徴は、杯の最大口径が12.5 cmとさらに大きくなっていることや、蓋の鈕の左右への突出がさらに顕著になり、返りの形態も形骸化して小さく内面に垂下していることである。このように、大畠南古墳群の杯Gは、院内勅使塚古墳や蝦夷穴古墳の杯Gよりも型式的

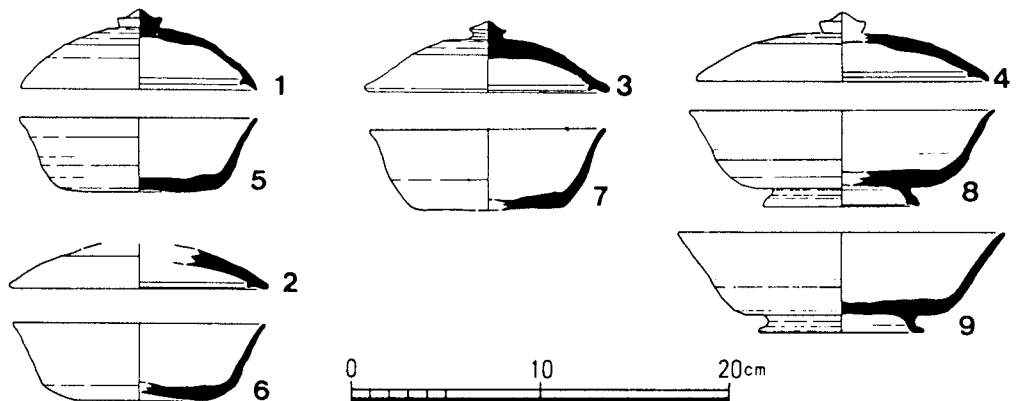


Fig 49 稲舟窯出土須恵器(註より)

に後出的要素が認められる。

さて、瓦陶兼業窯である、輪島市<sup>いなふね</sup>稲舟窯の須恵器杯Gは、口径12~13cmをはかり、須曾蝦夷穴<sup>すそえぞあな</sup>古墳の杯Gよりも口径が大形化している。蓋についても返りがかなり退化しているほか、杯Bという高台を持つ杯が新たに出現している。この杯Bの高台径は、口径の約2分の1程度と小さい。いっぽう大島南1号墳の杯Bの高台径は口径の約3分の2と、高台径がより大きい傾向にある。形式的に高台径の小さなものから大きなものへという変化が容認されるならば、稲舟窯の方が古い様相をもっていると考えられる。ともかく、大島南古墳群の出土土器は、稲舟窯に最も近い印象を与えている。

木立雅朗氏は、稲船窯の年代を飛鳥IV期前後に求めている [木立1987]。1号墳の被葬者が、畿内産土師器を入手しそれを埋納するまでにある一定期間が必要となり、1号墳の築造年代を飛鳥IV期でも新しい頃に求めることができる。そうすると、稲舟窯よりも新しい築造となるが、これによって矛盾が生じることはない。

さらに、2号墳から返りをもたない蓋のうち、口径が14cmのものがある(遺物番号12)。これに伴う杯の口径は13cm強となる。つまり、杯Aの可能性が考えられるので、1号墳よりもより新しい要素と判断でき、2号墳は1号墳よりも新しいという築造年代の一端を示す。

## 第2節 石室構造と使用尺度

石室構築には、専門的な技術やそれを熟知した人間が必要である。そして、構築する時に、なんらかの設計図や基準となるべき尺度がなければ、整然と配列された石の構築物を作ることは困難である。

本稿でも石室の企画を考えるために、1号墳の石室各部の数値を確認したい。

〔玄室〕左側壁長 3.10m      玄室奥幅 1.08m      〔玄門部〕幅 0.86m  
右側壁長 3.25m      玄室前幅 1.17m

ここで左右の側壁の長さに15cmの違いが確認できる。また玄室前幅と玄門部幅の差が31cm認められ、左右両側壁方に二分すると、15.5cmという数値が得られる。この15cmという長さを単位とする尺度は今のところ確認されていないので、この整数倍数が基本尺度の可能性があり、30・45・60となる。5世紀から7世紀にかけて使用された尺度として、高麗尺(1尺≒36.6cm)や晋尺(1尺≒24.5cm)、唐尺(1尺≒29.5cm)が知られている。ここで得られた整数倍数値は、唐尺に最も近い。試みに唐尺で各部を測ってみる。

〔玄室〕左側壁長 3.10m (10.5尺)      〔玄門部〕幅 0.86m (2.9尺)  
右側壁長 3.25m (11尺)  
玄室奥幅 1.08m (3.7尺)  
玄室前幅 1.17m (4尺)

このように比較的整数に近い、あるいはその2分の1に近い数値が得られている。他の可能性も考え、試みに高麗尺で各部を測ってみる。

〔玄室〕 左側壁長 3.10m (8.5尺)      〔玄門部〕 幅 0.86m (2.4尺)  
 右側壁長 3.25m (8.9尺)  
 玄室奥幅 1.08m (3尺)  
 玄室前幅 1.17m (3.2尺)

先に見たようなきれいな尺数值にならないので、1号墳は唐尺を基準にして作られている可能性が高い。

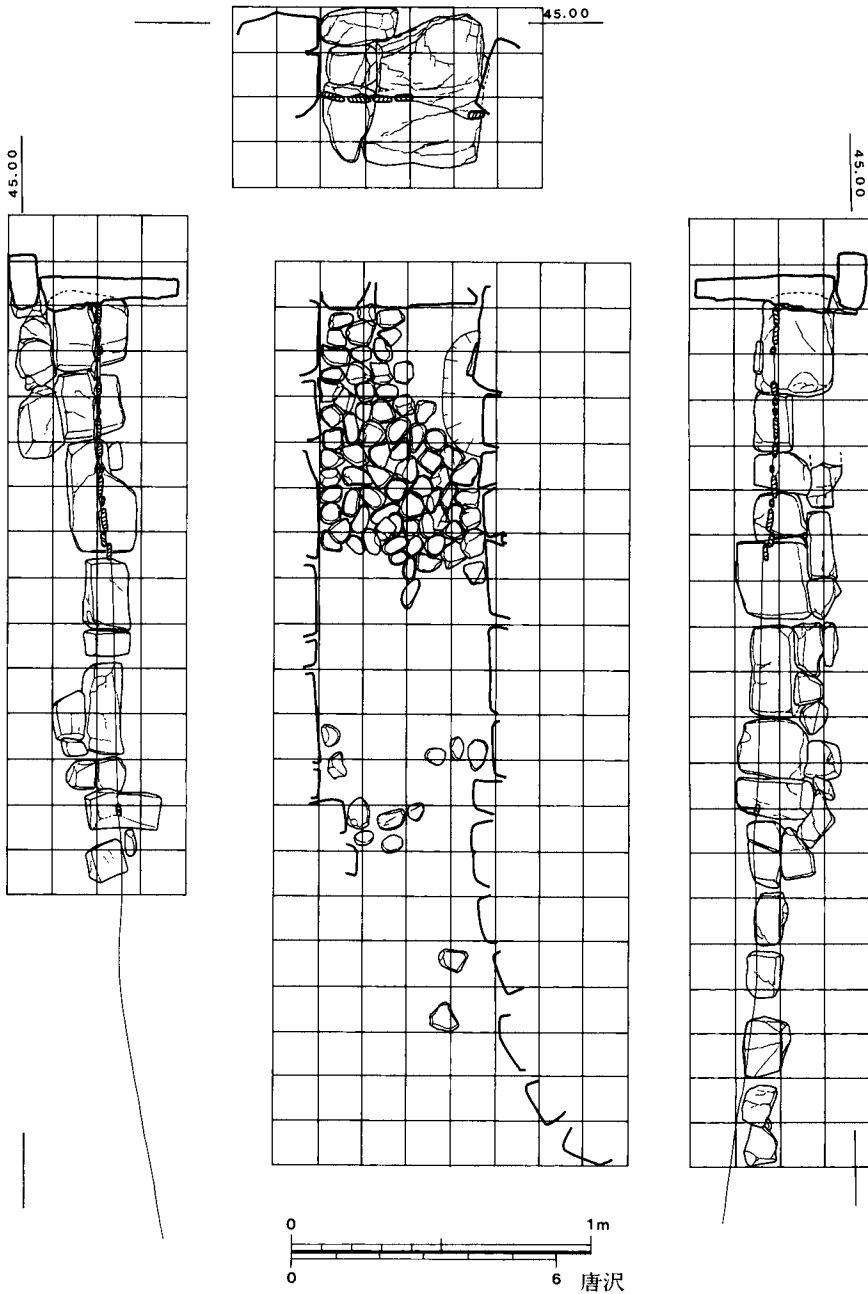


Fig 50 1号墳石室唐沢方目図

石室平面形に唐尺の方眼網を重ねる (Fig.50)。右側壁の数値が唐尺できれいに割れたので、この方を基準にすると、左側壁が奥壁にいくにしたがって幅を減じていることがわかる。これは、奥壁材の大きさに規定されたようである。奥壁から右袖石玄室側基底で11尺となり、それが半尺奥壁方に寄っている左袖石の前面に対応する。開口部は、奥壁から19尺になる。しかし、主軸よりも4.5尺広がった位置にあり、かつその石面も石室前面に向いていないので、更にあともう1石存在する可能性を考えたい。つまり欠失している石材は、奥壁から19尺、玄室から6尺広がって石主軸に直交する石材となる。

1号墳は、墓坑の掘り込みによる石室構築方法なので、壁面の水平の基準を床面に求めた。方眼網を重ねると、右側壁と奥壁の段構成が、1尺を基準としていることがわかる。しかし左側壁では、床面から1尺のところ目地の通る部分もあれば、必ずしもそうでない部分もある。壁面の第3段が既に失われているものの、復元的に考えれば、3段目上面が床面から2尺の高さにほぼ合致するようである。この左・右側壁の組み上げの違いは、それぞれにかかる奥壁の段構成の違いにあると考えられる。すなわち、右側壁に接する奥壁は3段構成で、ほぼ右側壁が1尺の高さにある。いっぽう左側壁に接する奥壁は、1段構成となっているために、側壁構築の基準高が床面高2尺になっているからである。

2号墳でも同様に、唐尺による換算作業をおこないたい。

〔玄室〕 右側壁長	3.36m (11.4尺)	羨道幅	1.61 (5.5尺)
玄室奥幅	1.16m (3.9尺)	推定玄門幅	1.20 (4.1尺)
同最大幅	1.22m (4.1尺)		

このように、必ずしも整数値となっていない。高麗尺の場合を下に記す。

〔玄室〕 右側壁長	3.36m (9.5尺)	羨道幅	1.61 (4.5尺)
玄室奥幅	1.16m (3.2尺)	推定玄門幅	1.20 (3.4尺)
同最大幅	1.22m (3.4尺)		

高麗尺とて同じような状況で、0.5尺単位で数値は得られるが整数ではない。つまり、より整数に近い数値を算出する唐尺を基準にしている可能性が大きいと考える。さらに、左側壁の玄門部分が破壊されているので、厳密な規格を測り得ないが、1号墳よりも後出すると考える2号墳に、唐尺が使われる蓋然性は大きいと考える。

すなわち、左側壁と右側壁の長さが、1号墳と同じように半尺違うと仮定すれば、11.5尺という右側壁長が理解できる。そして、玄室幅にみられた0.1尺の違いは、築造時の許容誤差内である。さらに右側壁開口部が奥壁からほぼ17尺であること、開口部が玄室より1尺広がっていることから勘案すれば、唐尺を用いて作られている可能性が極めて高い。

方眼網を石室平面図に重ねると、次のような点が指摘できる。1、玄室幅4尺、右側壁約11.5尺、「袖石」は半尺あわない。2、玄室幅と開口部とは、1尺の開きがある。羨道長5.5～6尺。袖構造や羨道構造が1号墳と全く異なるが、玄室については両者ほぼ同大であり、共通する規格として認識できる。石室立面に関して1号墳と同じように床面を基準とした。側壁でも1尺が構

築の単位になっているようである。そして3尺まで壁体が直立し、それより天井にかけて持ち送りがあがる。天井石まで5尺程度であろうか。

以上のように、両墳の石室が唐尺で構築していることを確認した。一般的に、7世紀後半になると高麗尺等から唐尺に変化するといわれており [和田1992]、畿内の横口式石槨も唐尺で作られているものが多い。大畠南古墳群は、この変化に対応しており、畿内産土師器の存在とも考えあわせ、極めて中央の政権と密接な関係にあったことがうかがえる。

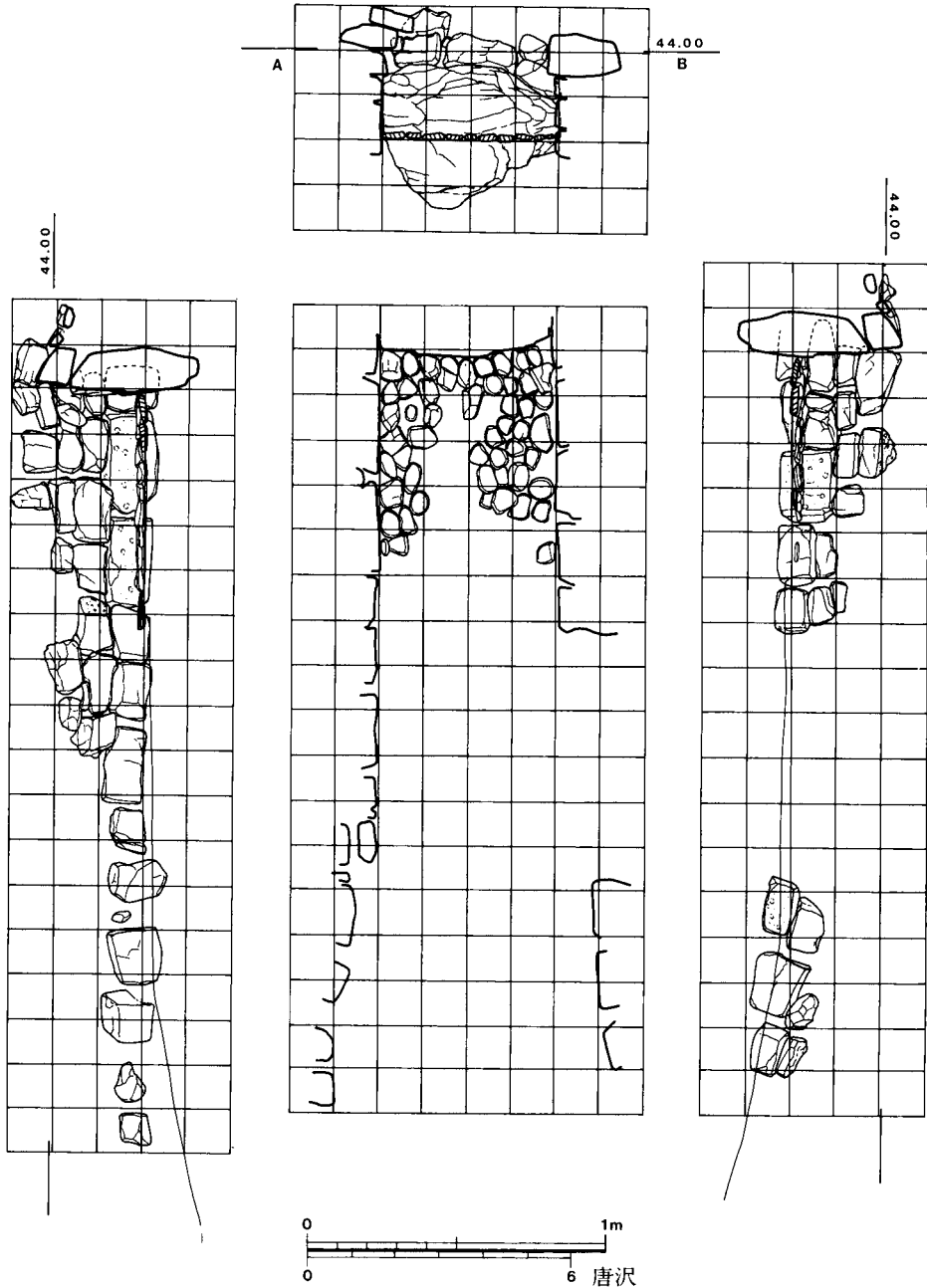


Fig 51 2号墳石室唐沢方目網



小松市にある金比羅山古墳は、本古墳群の直後に造られ、横口式石槨を埋葬施設とし、八角形墳の可能性もある終末期古墳である〔浜野1983〕。金比羅山古墳は、石槨の前庭部や天井部が破壊されているので、正確な数値を検討できないが、提示されている石槨数値のうち幅が87cm、高さが56cmで、唐尺で換算するとそれぞれ2.9尺、2.0尺となるので、やはり唐尺で作られていることがわかる。北陸における唐尺の使用例の一つとして注目できよう。

しかし、加賀市法皇山横穴群では高麗尺の使用が確認されている〔田嶋1971〕。横穴群で高麗尺が使われているのは、時期的な要因であろうか。7世紀から8世紀における唐尺の使用が、大島南古墳群や金比羅山古墳のような中央に直結するような性格の構築物のみ許されたのであろうか。本稿ではそこまで論及できないが、唐尺を用うる古墳と高麗尺を用いる横穴群、さらに横穴式石室の消長、そしてそれらの総合的な関係を考察することによって、北陸古代社会に大きな問題提起をおこなうことができると考える。

### 第3節 珠洲の古墳・横穴墓、そして畿内政権

奥能登は、口能登地域や七尾南湾岸地域と異なり、大きな河川や平野が少なく、山地が海岸間近まで及んでいるところも多い。そのために、水田耕作ばかりでなく、それ以外の水産業や海運業、あるいは各種の生産活動にも重きをおいていた。これは、可耕地の絶対量の少なさを示すものであり、原始・古代に遡ると、可耕地となるべき地域がより狭いことが予想される。このような地理的な制約から、弥生時代後期から古墳時代後期に至るまで比較的安定して墳墓を作っている口能登地域などと全く違う古墳時代を経ている。奥能登の古墳時代は古墳分布が希薄で、しかもその系譜を追うことが難かしい傾向にあるからである。

本古墳群の位置する珠洲地域は、奥能登にあっても比較的多くの古墳や横穴墓が集中する。これは、この地域の中に大島南古墳群を位置づけることによって、奥能登の古墳の特質の一端を垣間見ることができよう。本稿では、本地域における古墳築造の流れをトレースすることによって、奥能登古墳時代の問題点の抽出や時代背景の浮き彫りに努めたい。

出土遺物から確認された最も古い古墳として永禪寺古墳群がある〔吉岡1976〕。永禪寺古墳群は明確な墳丘と周溝をもち、1・2号墳は箱形石槨を埋葬施設としている。1号墳からは、刀、剣、長頸鍬とともに胡籙金具が出土している。坂靖氏によると、天狗山古墳やおつくり山古墳例とおなじタイプで、5世紀後半代の年代を与えている〔坂靖1992〕。また、田中新史氏は、5世中葉の年代を与えている〔田中1988〕。2号墳からは、刀とU字形鋤先が出土しているのみで、築造時期の根拠になる遺物の出土はない〔駒井1955〕。1号墳が最も良い墳丘立地なので、群形成の端緒になる可能性が高く、遅くとも5世紀後半頃には古墳築造を開始したことになる。吉岡康暢氏は、本古墳群の埋葬施設を口能登地域の箱形石槨との繋がりで理解しているものの、口能登の箱形石槨が果たして首長墓の主たる埋葬施設に成りうるのか疑問であり、埋葬施設で口能登勢力との関係を論じたり、古墳成立の契機にまで考察するのに躊躇をおぼえる。

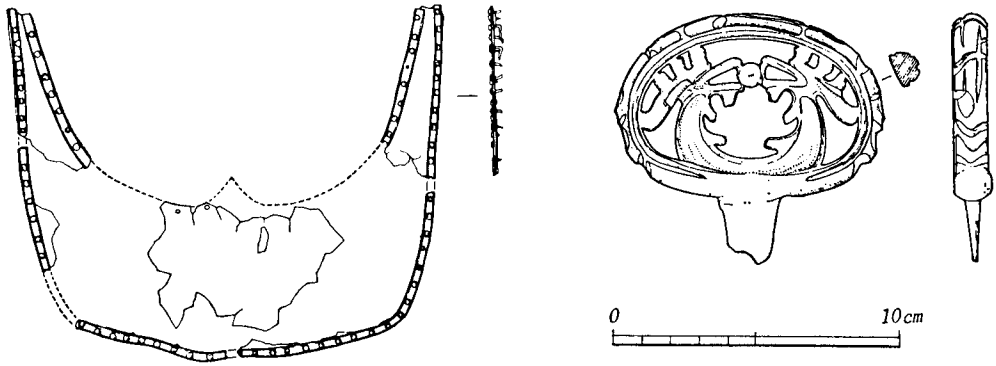


Fig 53 永禅寺1号墳胡籛金具(左)と大島4号墳双龍文環頭(右)

現在、永禅寺古墳群以外の古墳がいくつか確認・推定されている。筆者は全て踏査しているわけでないが、いくつか見てきた印象から考察したい。

上戸大池古墳群は数基から構成されていると考えられている。尾根の先端部にテラス状の段と高まりが存在し、これらを古墳と認識している。しかし、地表観察によって周溝などの痕跡や明確な墳丘裾を確認できない。経念古墳群は、数十基の大古墳群とされている。経念古墳群もまた、テラス状の段や尾根筋の比高50cm以下の小隆起を古墳と認識している。これらの古墳に共通することは、周溝が見られず、墳丘裾も不明確である。このように、永禅寺古墳群に見られるような明確な高まりとしての墳丘形態と極めて対照的である。これら小古墳を全て否定するわけではないが、反対に全て古墳と考えるには無理がある。経念古墳群などを発掘調査しない限り、その歴史的評価を下すわけにはいかないものの、墳丘（と思われる部分）の構築から見る限り永禅寺古墳群の墳丘と全く違うので、本考察から除外したい。さらに、これらを古墳と考えれば、両者に異なる築造契機を考えねばなるまい。

永禅寺古墳群以後の墳丘を有する古墳の築造は、大島古墳群に続くようである。1号墳は、昭和8年に発掘開墾されたので詳細は不明だが、無袖式の横穴式石室と考えられ、石室幅4尺3寸（1.3m）長さ17尺（5.2m）の規模で〔吉岡1976〕、永禅寺古墳群と同じ安山岩質の石材で石室を構築している<sup>3)</sup>。遺物が現存しないので細かい検討はできないが、金銅鞮金具や金環、土器類40～50個体が出土しており、当時の写真を見ると、杯Bや杯Gの他、子持ち壺、短頸壺、台付短頸壺などが出土していることがわかる。そして築造時期とともに、追葬があるのかそれとも単体埋葬なのか等々、杯Bの評価とともに杯Gの編年の位置づけを必要とするが、現物がないので判断できない。ともかく子細はわからないが、全体的な印象として大島南古墳群より新しく考えるよりも、むしろやや古いように思われる。

また、双竜文環頭の採集地点を4号墳としているが、具体的な古墳内容はよくわからない。環体は楕円形を呈し、まだ厚みをもっている。双竜の絡みがみられないことや、竜の角が4本である、写実的であるなど古い要素も認められるが、竜文のデザイン化がはじまっている。橋本博文氏による第3段階に相当し、6世紀第3四半期に製作されたものであり〔橋本1990〕、双竜文環頭太刀を副葬していた未検出の古墳（4号墳）の築造年代をこれに近い頃、7世紀初頭と考える

と、大島南古墳群は、大島古墳群の系譜を引き、同一被葬者集団の可能性と考えることができる。

そして、双竜文環頭太刀は日本海側に多く分布し、蘇我氏あるいは高句麗系豪族との関わりが指摘されているが〔清水1983、新納1991〕、興味深い説である。すなわち、門脇禎二氏は、珠洲に若倭部の存在を推定し、断定を避けているものの蘇我氏との関連を喚起しているからである〔門脇1980〕。

さて、珠洲地域の古墳の特色の一つに、200基以上の横穴墓群の密集がある。横穴墓群の分布は、金川水系にあるもの（岡田横穴墓群・岩坂藤瀬山横穴墓群・岩坂塚亀横穴墓群・岩坂向林横穴墓群・熊谷羽黒山横穴墓群で合計33基以上）と若山川水系にあるもの（鈴内二ノ谷横穴墓群・鈴内山岸横穴墓群・経念横穴墓群で合計100基以上）、そしてその中間に位置するもの（野々江ハゲノマエ横穴墓群で合計25基以上）、竹中川水系にあるもの（永禪寺横穴墓群で3基以上）、盤若川水系にあるもの（谷崎横穴墓群で10基以上）、さらに南の鶴島・南黒丸横穴墓群で32基以上、が確認されている。このように、横穴墓群は、金川・若山川流域に集中する傾向にあり、全体の8割近くを占めている。そして、竹中川・盤若川流域（鶴飼地域とする）と鶴島・南黒丸地域（南黒島地域とする）とは別地域である。未開口横穴墓がまだ多数存在すると考えられるが、分布の傾向は変わらないと考える。そして、盤若川流域に横穴式石室が存在し、後述するが、珠洲の首長墓は鶴飼地域でのみで築造されている。

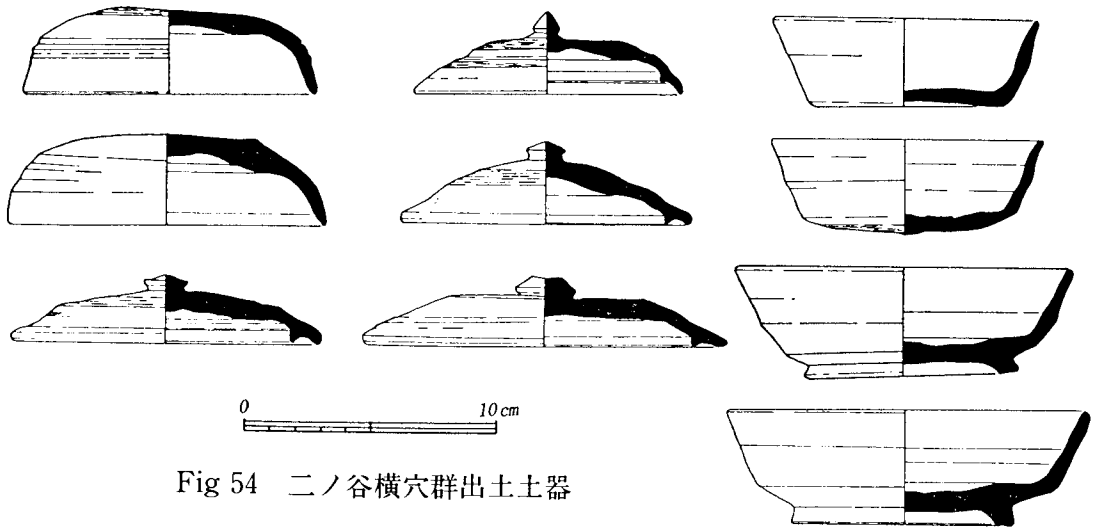


Fig 54 二ノ谷横穴群出土土器

発掘調査によって得られたデータ〔田嶋ほか1976〕を中心に、横穴墓群の様相を見る。築造時期は次の通りである。岩坂向林2号横穴墓から隼上りI段階〔菱田1986〕の須恵器が出土している。また、岡田1号横穴墓から飛鳥Ⅲ期、永禪寺1号横穴墓からも飛鳥Ⅲ期、同3号横穴から飛鳥Ⅳ期の須恵器、谷崎横穴墓群から飛鳥Ⅰ～Ⅲ期？の子持壺が出土している。また採集資料であるが、二ノ谷横穴墓群からは、隼上りI段階から飛鳥Ⅳ期までの須恵器が見られ、発掘調査によって得られた須恵器の時期幅にはぼ収る。横穴墓群の築造のピークがいつになるかわからないが、二ノ谷横穴墓群採集資料では飛鳥Ⅲ・Ⅳ期のものが主体を示しているように、横穴墓の築造あるいは追葬活動がこの時期に最も活発であったことを示している。

また珠洲市史で、田島明人氏は横穴墓の構造的特徴を各要素に分解して次のようにまとめている〔田嶋1980〕。北陸で横穴墓が集中する珠洲・氷見・羽咋・北加賀・南加賀の五地域にわけ、横穴墓の玄室平面形などの諸特徴を、氷見地域の横穴墓に類似性を見出している。これを珠洲地域が能登の他地域よりも結びつきの強い結果と解し、さらに山陰・九州地方の横穴墓の影響も強いという。

しかし横穴墓の形態が、被葬者集団の個性を体现する必然性は、現在の研究段階において肯定されるものではない。山陰地方や氷見地域と横穴墓掘削技術体系が共通している可能性を示すものであり、被葬者集団の繋がりを示すものではない。横穴墓の形態が、被葬者集団独自に選定できるものなのか、それとも別の要因で決まるものなのか、さらに横穴墓構築技術のみ受け入れるのか現状では判別しがたい。この点は、横穴式石室の受容の仕方とも密接に絡むと予想される。

次に横穴墓の副葬品である。耳飾（金環）や鉄鏃や刀などがあるが、全ての横穴墓に存在するわけではない。これらが初葬に副葬されたものなのかそれとも追葬か、あるいは時期的にどうであるか、玄室規模との関係等、不明な点が多い。岩坂<sup>いわか</sup>向<sup>むかひ</sup>林<sup>はやし</sup>2号横穴墓は最も古い一群に属するが、八窓鏢の刀やその鞘の責金具、鉄鏃が出土している。二ノ谷<sup>にのたに</sup>横穴墓群からも無窓鏢の刀や剣が出土している。それよりも新しくなると、鉄器の副葬例が少なくなるようで、鉄製品の採集が少なくなる。群形成の当初に副葬品を持つが、しだいに薄葬化の傾向が強まると考えられ、横穴群形成初期と盛期との性格が微妙に異なると予想されるが、本論では深く追及しない。

土器の実年代をもう一度整理すると、最近飛鳥I期の年代を7世紀中葉におく見解もあるが〔白石1982、奈文研1992〕、大勢の意見としてその年代を610年頃～30年前後と考える。最も古相の出土土器は、飛鳥I期よりも一段階古い隼上りI段階なので、7世紀を前後する頃に横穴墓群が築造を開始していると考ええる。そして、横穴式石室墳の築造開始とはほぼ一致する可能性があり、横穴墓群の営みの終りとともに、大畠<sup>おほたけ</sup>南古墳群が墓作りの終焉を象徴する存在である。

さらに論理を飛躍させると次のようになる。永禪寺古墳群<sup>ようぜんじ</sup>の築造開始を5世紀後半と考え、大型の1・2・5・6号墳を累代の珠洲地域の首長墳とすると、6世紀代の首長系譜を追うことができる。そして、7世紀以降大畠<sup>おほたけ</sup>古墳群に首長の墓域を移し、鶴飼地域が、古墳に現される社会関係の中で、常に珠洲地域の中で優位に立っていると考えられる。

7世紀に限っていえば、鶴飼地域は、横穴式石室と横穴墓の両者が併存している。横穴式石室構築には、横穴墓より多くの労働力を必要とし、専門的技術も必要であることから、横穴式石室の被葬者集団を横穴墓よりも優位に立っていると考えられる。吉岡康暢氏は、永禪寺古墳群や大畠<sup>おほたけ</sup>古墳群を珠洲地域の首長墳としている〔吉岡1976〕。単純に考えれば、大畠4号墳では双竜文環頭大刀、横穴墓では鏢付大刀という刀の質の違いを、そのまま階層差と理解できよう。また、一古墳に埋納される土器量も圧倒的に横穴式石室の方が多い。

しかしながら、それを珠洲地域の首長権確立と判断するには慎重にならざるをえない。それは、竹中・盤若川地域の生産基盤を古墳の眼前に広がる平野に求めるとしても、決して飯田・正院地域より勝っていると思われないからである。また、横穴墓群の分布が、圧倒的に飯田・正院地域に偏っているからであり、横穴墓の五つの群がそのまま地域を異にする集団を背景としていると

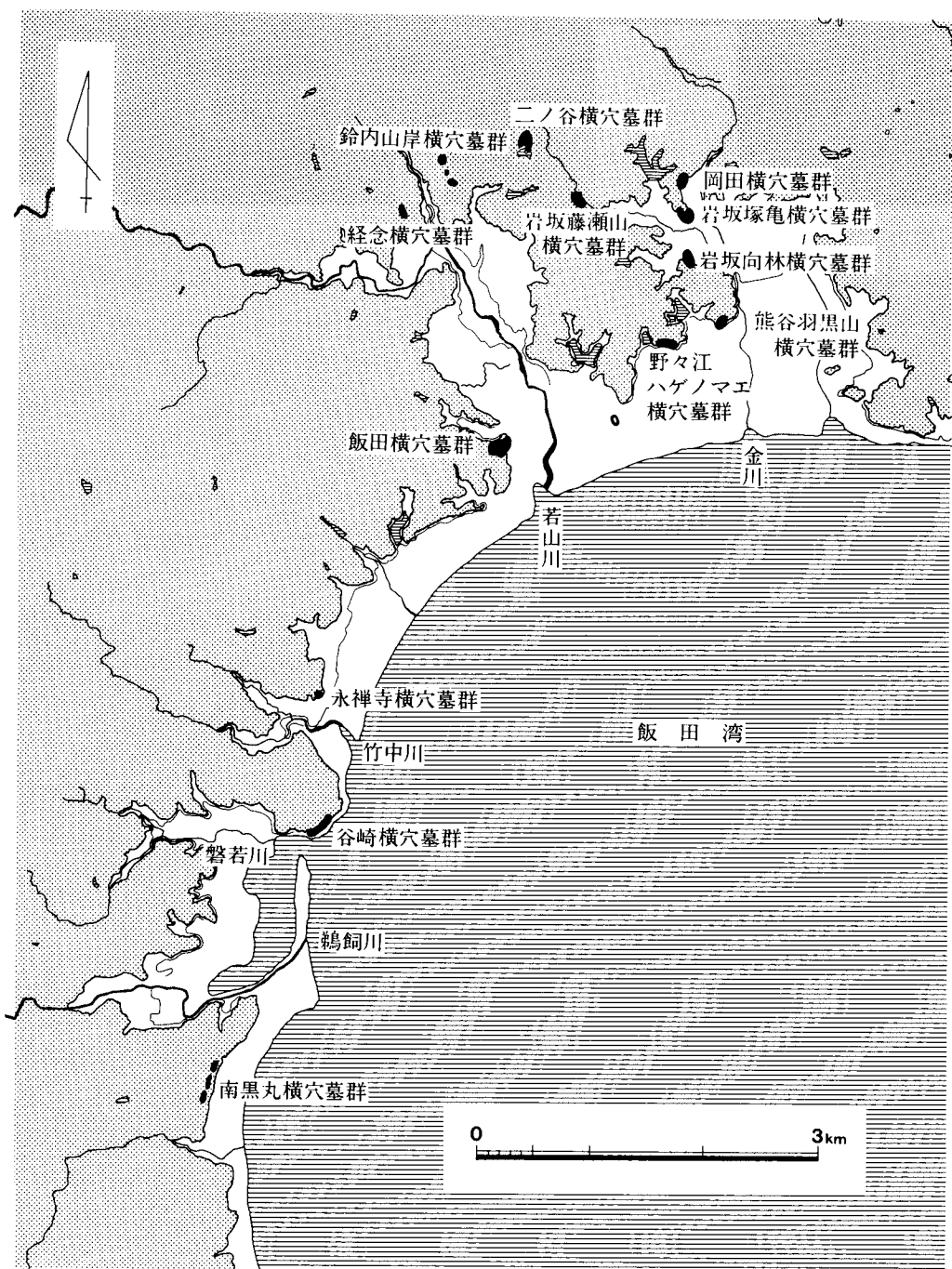


Fig 55 古墳時代横穴墓群の分布  
 (ドットのトーンは標高10m以上の山地)、と水系

も限らないからである。<sup>5)</sup>

横穴墓群は、平野あるいは海などに面する状態で分布するものもあれば（野々江ハゲノマエ横穴墓群・永禪寺横穴墓群・谷崎横穴墓群・南黒丸横穴墓群）、谷奥に位置するものもある（岡田横穴墓群・岩坂藤瀬山横穴墓群・岩坂塚亀横穴墓群・岩坂向林横穴墓群・経念横穴墓群・二ノ谷横穴墓群）。そして谷奥に位置する群は、全て金川・若山川流域に属しており、このような占地の違いに注目したい。

群集墳の墓域は、畿内政権によって与えられたという考え方がある〔広瀬1978など〕。あるいはまた、擬制的同族関係を結ぶことによって群集墳を営造する考え方などある〔白石1973など〕。横穴墓群を群集墳と同じ俎上にのせることはできないが、墓域を共有するという、両者に最も共通する特徴的要素があり、群集墳論の考え方もある意味で参考になる。そして横穴墓群は、7世紀を前後する頃に築造をはじめめるタイプの群集墳との関係に注意しなければならない。この群集墳は、推古朝の動きの中で考えられることが多く〔水野1970など〕、平尾山型などといわれている〔森1973、白石1966〕。群集墳造墓活動に関し、自律的側面を考える〔近藤1952〕よりも、他律的側面が強い。つまり、造墓地選定にあたっての先の二群の違いは、異なる原理が働いていたと考えられる。

谷奥にある横穴墓群の付近には、貯水池があることが多い。貯水池は、現在の水源としてあり、その地勢は今も昔も変わらないであろう。菅谷文則氏は、群集墳の立地を集落の基盤たる水源に求めているが〔菅谷1976〕、二ノ谷横穴墓群は谷の最深部にある貯水池を囲むように存在しており、現地に立つと菅谷氏の説を実感する思いになる。飯田・正院地域は、若山川と金川で形成された奥行きのある平野が広がり、下流域で遺物散布地がいくつか確認されている。具体的な集落形態や水田耕作の状態は分らないが、水源を掌握するという意味において、横穴墓の築造を評価できよう。そして、横穴墓群の80%にも及ぶ数が存在する若山川・金川が最も大きな経済基盤をもち、珠洲地域の中心的位置であって、多くの人間が住んでいた地域と理解できる。

さらに、大島南古墳群などの南に広がる鶴飼の平野は、上記流域の平野に劣らない広さをもつが、よく見ると現在の田面が海拔2 m前後の高さである<sup>6)</sup>。明治時代頃には現在の国道近くまで海岸であったり塩田になっていたといわれており、汀線の高さが海拔2 m前後であると考えられる。等高線から判断する限り、鶴飼の平野が窪地のようになっているために、そこに水（海か）が入り込んで低湿な状態の可能性を考えたい。さらに、鶴飼川が河口近くなって南黒丸の丘陵にぶつかることによって北に流路を変えているので、現在の鶴飼集落部分に土砂の堆積による砂洲状になっていたと考えたい。すなわち鶴飼平野は、潟湖のような状況であったか、あるいは極めて低湿な状況と思われる。

以上より、大島古墳群や大島南古墳群あるいは永禪寺古墳群は、入江を眼前に見渡す位置に築かれており、集落を眼下にした立地とはいえない。古墳からの眺望は極めてよく、海上交通との繋がりを想起する。このような入江あるいは潟湖は、日本海側の良港になっており、珠洲でもその機能を考えたい。実際の生産基盤である若山川・金川流域と、その門戸たる津的な鶴飼地域という役割が想定され、大島南古墳群等が珠洲地域の交通の要衝を押さえた位置に築かれている。

これら古墳群を鵜飼あるいは上戸地域の首長と考えるよりも、吉岡氏が考えたように珠洲地域全体の首長と考え、その奥津城を海上権を押さえるために大島周辺に築いたと考えたい。

齊明天皇4年に、越国守阿部臣比羅夫が肅慎や蝦夷に遠征している。国守としていたので、おそらく越国をベースにした軍編成であろうか。齊明天皇4年三月の遠征で能登臣馬身龍<sup>まむなつ</sup>の戦死記事載せていることから理解できる。このような蝦夷地あるいは肅慎に攻め込んでいる記事が齊明紀に多く見られ、どれほど史実であるかわからないが、ある程度事実<sup>まこと</sup>に即した記事と考えたい。そうすると、越国が蝦夷に対する軍事行動の根幹を担っている可能性が大きく、とくに能登国が重要な役割を担っていた。珠洲地域の地理的特性は、珠洲から佐渡を目指して日本海を横断すれば、淳足柵や磐舟柵に到達することである。

また、万葉集巻一六に「梯立の 熊来のやらに 新羅斧 落としいれわし 懸けて懸けて な泣かしそね 浮きいづるやと 見むわし」という能登でうたわれた雑歌がある。森浩一氏は、新羅斧を造船用の斧の可能性を提起している〔森1992〕。時代は少し新しくなるが、渤海国使節が本国に戻る時の造船が能登福浦でおこなわれていることからわかるように、能登に外洋を渡る大型船を建造できる技術的基盤をもっていた。

横穴墓群の中で線刻壁画をもつものがいくつか確認されており、岩坂向林1号横穴墓にはオールの出た帆船が描かれている〔左古1992〕。文献に出ていることから推測できるような造船や軍団、そして外洋航海と被葬者を結びつけるのは乱暴な考え方であろうか。もしこの考え方が容認されるならば、遠征に際しての兵たん基地のような性格、そしてそれを可能にする畿内政権の直接的な介入を想定したい。

また、畿内産土師器の東日本での出土傾向が林部均氏によってまとめられている〔林部1986〕。それによると、官衙遺跡を中心に出土し、飛鳥Ⅲ・平城Ⅰ・平城Ⅲに集中する傾向にある。そして、欠落する器種が多々見られる。これらの事象から「畿内産土師器の東日本への搬入には、畿内側のすなわち古代律令国家の意思が強く働いている」と述べ、古代国家の地域支配と密接に絡んでいると考えている。また、大島4号墳における双竜文環頭太刀副葬の意義を、舎人のような大王にあらわされる畿内政権に直結する軍構成員、のような性格を被葬者に与えることができよう〔穴沢・馬目1989〕。このような遺物から帰納される首長系譜の集団は、武人としてそして官人として古代国家の中に組込まれた姿であると考えたい。

永禪寺古墳群が作られた5世紀後半に、古墳を作る社会に参入した。この時期は、いわゆる初期群集墳が盛んに作られ、畿内政権が国造クラス首長や旧郡・旧郷クラスの首長より下位の集団あるいは一部有力家父長まで掌握したと考えられる〔寺沢1982〕。また、5世紀以降に増加する渡来人の掌握もまたその目的となっていたと考えられる〔伊藤1989〕。つまり、新たな古墳築造層の畿内政権による直接的な掌握を示すものであり、それまで畿内政権と疎遠であった地域をも開拓していく。このような時代背景のもとに永禪寺古墳群の被葬者は、「古墳築造」という行為すなわち古墳儀礼祭祀の共有による支配-被支配の関係に作り上げたのか、あるいは組込まれた

のである。

その首長墳の位置が、生産基盤たる諸集落を見降ろす所ではなく、海上を睨んだ位置にあることは、古墳被葬者が珠洲地域内の集団関係を押さえるよりも、交通の要衝を押さえる意図があったことがうかがえる。つまり、珠洲地域からの自発的行動によって古墳社会に参入したのではなく、畿内政権の主導によって古墳を築きえるようになったと考えられる。畿内政権が、珠洲（奥能登といえるかもしれない）と新たな関係を作り上げた目的を知る材料は少ないが、やはり東北への足掛りを作ることにあったと考えたい。

7世紀になって畿内政権と珠洲との関係に変化がおこったことが、多数の横穴墓群の造営という現象から推測できる。横穴墓群は生産基盤を押さえる占地をとり、おそらく集落としての地縁集団ごとに横穴墓群を形成したと思われる。これは、地域全体として見れば北陸でも大規模な横穴墓群だが、南加賀のような一つの群集形態ではなく、小規模な群が散在していることから理解できる。横穴墓は、畿内政権が珠洲の有力家父長層を傘下に組込んだ結果造墓活動をおこなったと考えられ、7世紀初頭に画期をもつ群集墳の動向とも関連するであろう。首長は、さらに横穴式石室という新たな墓制を採用し造墓も横穴墓と違う位置に作ることによって、有力家父長層との隔絶化をおこない、より武人的性格を強めるとともに、律令官人的側面も持ちはじめたと考えられる。

首長の性格変化は、それ自身の発展的形態と考えるか、それとも畿内政権の質的な変化による対応の違いによるものであろうか。6、7世紀の交りの頃は、推古朝に相当する。推古朝は、対外的には遣隋使を派遣して目を国外に向け、国内的には冠位制の制定に見られるような、あらたな秩序作りをおこなっている。水野正好氏は、この秩序の前提に「推古朝の薄葬令」を考えている〔水野1970〕。この秩序に珠洲地域の古墳群が対応するものと考えたと、後者の要因によって珠洲の首長が大きく飛躍したと考える。

さらに畿内政権が珠洲の有力家父長層を掌握するのは、首長を媒介にした可能性を考えたい。有力家父長層が蝦夷などへの遠征軍の構成員となり、首長がまとめる立場にあったに違いない。あるいは、軍の構成員ばかりでなく、軍の基盤を作る製塩活動や造船などのその他の活動に関与するものであったかもしれない。このような地域総体として、畿内政権と関係を保ち続け、古代国家に組込まれたのである。

しかし、当地における造墓活動は、大畠南古墳群のように8世紀間際にまで及び、奈良時代に入るまで、珠洲地域において古墳というモニュメントを必要とした。このモニュメントは、地域内集団関係の維持のために必要であったものであり、決して畿内政権と首長との関係で作られたものではないだろう。換言すれば、古墳築造の遺風があったと考えられる。このような地域的特性が、8世紀近くまで横穴式石室や横穴墓を築造させたと考えられ、古代社会にスムーズに移行しきれない奥能登社会を象徴するものであろう。

以上のように、雑駁で結論を急ぎすぎた総括となってしまった。しかも奥能登の古墳時代に係る問題点および終末期古墳としての問題点を十分に整理しきれなかった。この二つの点は、後日検討して論を深めたい。



## 註

- 1) 終末期古墳をめぐる問題点を明らかにしたのものとして、1980年度日本考古学協会大会で特集された「終末期古墳の諸問題」が参考になる(日本考古学協会編「シンポジウム終末期古墳の諸問題」1988年 雄山閣)。終末期古墳の年代論や構造論、被葬者論から「薄葬令」論など、終末期古墳の根幹に関わる部分の論争になっている。また、白石太一郎氏の年代論に基づく横穴式石室と横口式石槨の編年、被葬者論が注目されるが〔白石 1982〕、先のシンポジウムで司会を担当した白石氏の発言に論旨が垣間見えている。それ以後、終末期古墳の墳形や墓地選定制度論などある。終末期古墳の概念が、研究者によって時期的な区分であったり、あるいは薄葬令を裏付ける概念であったり、横穴式石室との関係が不明確である。白石太一郎氏や河上邦彦氏が、終末期古墳を前方後円墳の終末と関連させて、それが消滅する6世紀末以降を終末期とし、推古朝と関連させている〔河上 1992、白石1982・1989〕。推古朝の政治史上の画期と結びつけることは、古墳時代後期終末の古の動向をさぐる上に有効と考える。
- 2) 須恵器杯Gと杯Aを厳密に区別するのは困難である。筆者の勉強不足もあって、その概念規定がよく理解していないので、ここでは杯Gとして表現する。
- 3) 大島1号墳の石材は、開口部で3石ほど観察できるが、全て安山岩である。
- 4) 珠洲市史には紹介されていないが、和嶋俊二先生が収集された遺物群のなかに、無窓刀鐔や刀、剣、刀子の鉄製品が保管されている。資料に実見に際し、珠洲市立珠洲焼資料館長橋本秀一郎先生や珠洲市教育委員会主事加賀真樹氏にお世話になりました。感謝いたします。
- 5) 鶴島・南黒丸古墳群のある地域は、地形的に区別できるので、本考察から除外して考えても差し支えない。
- 6) 高さは、国土地理院発行の1/25,000の地図と、国土基本図1/5,000からひろった。

## 参考文献

- 穴沢咏光・馬目順一 1989「副葬品は語る(二) 武器・武具と馬具」『古代を考える 古墳』 吉川弘文館
- 伊藤雅文 1989「初期群集墳論再考」『橿原考古学研究所論集』第8集 吉川弘文館
- 門脇禎二 1980「珠洲と古代国家」『珠洲市史』第6巻 珠洲市
- 河上邦彦 1992「終末期古墳の認識と編年」『古墳時代の研究』第12巻 雄山閣
- 木立雅朗 1987「稲舟窯」『北陸の古代寺院』北陸古瓦研究会 桂書房
- 北野博司 1992「蝦夷穴古墳出土土器の編年的位置」『蝦夷穴古墳国際シンポジウム 古代能登と東アジア』蝦夷穴古墳国際シンポジウム実行委員会
- 駒井和愛 1955「古墳文化」『能登—自然・文化・社会—』九学会連合能登調査委員会 平凡社
- 近藤義郎編 1952「佐良山古墳群の研究」津山市
- 左古和枝 1992「壁画古墳論」『古墳時代の研究』第12巻 雄山閣
- 清水みき 1983「湯舟坂2号墳出土環頭太刀の文献的考察」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 白石太一郎 1966「畿内の後期大型群集墳に関する一試考 —河内高安千塚及び平尾山千塚を中心にして—」『古代学研究』第42・43合併号

- 白石太一郎 1973「大型古墳と群集墳」『考古学論攷』第2冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 白石太一郎 1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集
- 白石太一郎 1989「古墳の終末」『古代を考える 古墳』吉川弘文館
- 菅谷文則 1976「6世紀の墓地と村落の水源」『ヒストリア』72号 大阪歴史学会
- 田嶋明人 1971「法皇山横穴群の横穴構造と変質」『法皇山横穴古墳群』加賀市教育委員会
- 田嶋明人ほか 1976「横穴古墳」『珠洲市史』第1巻 珠洲市
- 田嶋明人 1980「横穴群の盛行と古墳社会の変質」『珠洲市史』第6巻 珠洲市
- 田中新史 1988「古墳出土の胡ろく・靱金具」『井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録』言叢社
- 寺沢知子 1982「初期群集墳の一樣相」『同志社大学考古学シリーズ I 考古学と古代史』
- 林部 均 1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号 日本考古学会
- 土肥富士夫 1985「院内勅使塚古墳－環境整備事業に係る第1次調査報告書－」七尾市教育委員会
- 富田和氣夫 1992「須曽蝦夷穴古墳－保存修理に係る第1・2次発掘調査の概要－」能登島町教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1992「飛鳥・藤原宮発掘調査概要」20
- 新納 泉 1991「武器」『古墳時代の研究』第8巻 雄山閣
- 西弘 海 1982「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』（西弘海 1986「土器様式の成立とその背景」真陽社に所収）
- 羽咋市教育委員会 1992「眉丈台の遺跡群」
- 橋本博文 1990「百練の利刀を賜う」『古代史復元』第7巻 講談社
- 浜野伸雄 1983「那谷金比羅山窯跡群の発見と金比羅山古墳の発見」『拓影』第13号 石川県立埋蔵文化財センター
- 坂 靖 1992「胡籙の系譜」『同志社大学考古学シリーズ V 考古学と生活文化』
- 菱田哲郎 1986「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻3号 京都大学文学部史学会
- 広瀬和雄 1978「群集墳論序説」『古代研究』15（勸元興寺文化財研究所）
- 水野正好 1970「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』第5巻 角川書店
- 森 浩一 1973「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地」『古代学研究』第57号（森浩一編『論集 終末期古墳』所収 S48 塙書房）
- 森 浩一 1992「日本の古代と蝦夷穴古墳」『蝦夷穴古墳国際シンポジウム 古代能登と東アジア』
- 吉岡康暢 1966「輪島市の考古学的調査調査第1報 稲舟古窯址」『石川考古学研究会会誌』第10号 石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1976「高塚古墳」『珠洲市史』第1巻 珠洲市
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版 古代の日本』第5巻 角川書店

入石宮内石室出土土器観察表

番号	出土位置	器種	口径	底径	器高	その他	割装(内)	割装(外)	胎土	色調(内)	色調(外)	色調(断面)	回転方向	群	備考
1P-21	須恵器 埴G蓋	10.7	3	新径1.4、同 高0.9	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒、黒色細粒、 骨片	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	反時計方	17	外面降灰、自然釉、 重ね焼痕、若土 の痕跡あり
2	須恵器 埴G蓋	11.1	2.7	新径1.5、同 高0.9	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒、黒色細粒、 骨片不明	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	反時計方	22	外面降灰、自然釉
3P-1	須恵器 埴G蓋	11.2	2.7	新径1.5、同 高0.8	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒、表面骨片含む、 黒色細粒	灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	反時計方	24	外面降灰、自然釉
4P-4.5	須恵器 埴G蓋	11.6	2.7	新径2.1、同 高1.0	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒、高線骨片含む	灰色	灰色	暗灰色	暗灰色	暗灰色	時計方	15	他と異なっており りした質感
5P-25	須恵器 埴G蓋	12.5	3.7	新径1.8、同 高1.6	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒、高線骨片含む	灰白色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	時計方	23	外面降灰、焼痕あり
6P-31	須恵器 埴G蓋	12.7	3.1	新径2.2、同 高1.1	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒、黒色粒	灰白色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	時計方	18	外面降灰、自然釉
7P-29	須恵器 埴G蓋	13.2	3	新径2.0、同 高1.1	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒、高線骨片含む	灰白色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	反時計方	19	外面降灰、自然釉
8P-33	須恵器 埴G蓋	13.4	3	新径2.2、同 高1.2	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒と高線骨片含む	灰白色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	反時計方	23	外面降灰、自然釉
9P-22	須恵器 埴G蓋	11.4	3	新径1.6、同 高0.9	ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	時計方?	20	外面降灰、自然釉
10	須恵器 埴G蓋	11	3		ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	細砂粒含む	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	—	73	外面降灰、自然釉
11	須恵器 埴G蓋	10.3	3.3		ヨコナデ	ヨコナデ/底はヘラ切	細砂粒含む	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	時計方?	3	
12	須恵器 埴G蓋	10.5	3.5		ヨコナデ	ヨコナデ/底はヘラ切	細砂粒含む	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	時計方	2	底面に若土の砂粒 あり
13P-33、34	須恵器 埴G蓋	10.2	3.4		ヨコナデ	ヨコナデ/底はヘラ切	黒色厚	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	不明	12	3個の燒合付者 あり
14P-27	須恵器 埴G蓋	11.8	3.8		ヨコナデ	ヨコナデ/底はヘラ切	黒色細粒	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	反時計方	5	
15P-28	須恵器 埴G蓋	12	3.7		ヨコナデ	ヨコナデ/底はヘラ切	細砂粒、高線骨片含む、 黒色厚	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	反時計方	13	
16P-2	須恵器 埴G蓋	10.7	3.5		ヨコナデ	ヨコナデ/底はヘラ切	黒色厚	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	時計方	16	薄かの自然釉
17P-16	須恵器 埴G蓋	12.5	3.5		ヨコナデ	ヨコナデ/底はヘラ切	黒色細粒	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	反時計方	4	体部外面に降灰、 焼痕あり
18P-17	須恵器 埴G蓋	11.4	3.5		ヨコナデ	ヨコナデ/底はヘラ切	黒色厚	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色	時計方	21	体部外面に降灰、 焼痕あり
19P-30	須恵器 埴G蓋	10.3	3.6		ヨコナデ	ヨコナデ/底はヘラ切	細砂粒、高線骨片含む	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	時計方	10	底面に平存の庄痕
20	須恵器 埴G蓋	12.7	3.5		ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒、高線骨片含む	灰色	灰色	灰色	灰色	灰色	?	69	内外面降灰・自然 釉、重ね焼痕あり
21P-35	須恵器 埴G蓋	18.5	3.1	新径3.6、同 高0.6	ヨコナデ	ヨコナデ、人井部横方	細砂粒、表面骨片含む、 1.0mm前後の石英・長石等 の砂粒含む	淡明灰色	淡明灰色	淡明灰色	淡明灰色	淡明灰色	時計方	25	焼痕はない、重ね 焼痕あり
22P-24、 23P-13	須恵器 埴G蓋	19.2	2.5	新径4.1、同 高0.7	ヨコナデ	ヨコナデ、人井部横方	細砂粒、高線骨片含む	淡明灰色	淡明灰色	淡明灰色	淡明灰色	淡明灰色	時計方	28	外面に降灰
		19	3.1	新径3.7、同 高0.6	ヨコナデ	ヨコナデ、人井部横方	細砂粒、高線骨片含む	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	明灰色	時計方	27	外面に降灰

人 体 内 存 1 1 3 2 現 存 日 記 上 1 1 器 能 研 究 学 会

番号・出位置	器種	口径・底径・高さ	その他	調整(外)	胎上	色調(内)	色調(外)	色調(断面)	回転方向・速度	備考
24 P-28-28	須臾器	口径3.2、同底0.8	須臾器	ヨコナデ、大井部不定ヨコナデ	1mmの砂粒少量・海綿質	淡灰色	明灰色	明灰色	時計方	141 内外に磨灰
25 P-32、P-26	須臾器 杯B	口径3.5、同底0.8	須臾器	ヨコナデ、大井部不定ヨコナデ	1mmの砂粒少量・海綿質	淡灰色	明灰色	明灰色	時計方	26 外面に磨灰
26 P-18	須臾器	口径4.8、同底10.3	須臾器	ヨコナデ、見込み「ハ」	長石・石英等の砂粒含む	淡灰黄色	明灰色	灰白色	時計方7	111 内面に褐色の溝い
27 P-8	須臾器	口径4.5、同底11.4	須臾器	体部ヨコナデ、見込み	長石・石英等の細砂粒含む	明灰色	灰色	明灰色	時計方	6 互換物の良否
28 P-7	須臾器	口径4.5、同底10.9	須臾器	体部ヨコナデ、見込み	1mm前後の長石・石英等含む、黒色細粒あり	淡灰色	明灰色	明灰色	時計方	33
29 P-15	須臾器	口径4.7、同底11.5	須臾器	体部ヨコナデ、見込み	2.3mmの小礫含む、黒色細粒あり	淡灰黄色	淡灰黄色	淡灰黄色	時計方	7
30 P-34	須臾器	口径4.4、同底11.9	須臾器	体部ヨコナデ、見込み	2mm以下の長石・石英等の砂粒含む、黒色細粒あり	明灰色	明灰色	明灰色	時計方	8
31 P-20	須臾器	口径5.7、同底17.2	須臾器	体部ヨコナデ、見込み	1mmの長石・石英等の細砂粒少量・海綿質	灰色	灰色	明灰色	時計方	31 磨灰を著しい、内面に磨灰
32 P-14	須臾器	口径8.5、同底11.6	須臾器	体部ヨコナデ、見込み	1.2mmの長石・石英等の細砂粒少量含む	灰色	灰色	明灰黄色	時計方	30
33 P-6、35区	須臾器	口径10.3、同底15.7	須臾器	体部ヨコナデ、見込み	1mm前後の砂粒・海綿質	赤灰色	赤灰色	赤灰色	時計方	32
34 P-10	須臾器	口径4.9、同底2.8	須臾器	体部ヨコナデ、見込み	2mm前後の長石・石英等の砂粒少量含む	暗赤灰色	暗赤灰色	赤灰色	反時計方	31 体部内面に加脂状のものがある
35 P-9	須臾器	口径23.3、同底10.4	須臾器	ヨコナデ	1~3mmの砂粒含む	灰~暗灰色	灰~暗灰色	—	時計方	1 磨灰
36 前庭庫精	須臾器	口径15	須臾器	ヨコナデ	海綿質片含む	明灰色	灰色	明灰色	不明	70 磨の可能性有り?
37 須臾器	須臾器	口径23.3、同底10.4	須臾器	ヨコナデ	1mm前後の砂粒含む	—	—	—	76	
38 須臾器	須臾器	口径15	須臾器	カキメ	海綿質片含む	淡灰黄色	淡灰黄色	淡灰黄色	72、39と同	72、39と同
39 須臾器	須臾器	口径15	須臾器	カキメ	海綿質片含む	淡灰黄色	淡灰黄色	淡灰黄色	71、38と同	71、38と同
40 須臾器	須臾器	口径15	須臾器	カキメ	海綿質片含む	明灰色	明灰色	淡灰黄色	74	74
41 須臾器	須臾器	口径4.5、同底1.3	須臾器	ヨコナデ	長石等の細砂粒含む	赤褐色	赤褐色	赤褐色	35	35 磨灰を著し、外面の磨灰は不明
42 須臾器	須臾器	口径6.3、同底1.1	須臾器	見込みラセン、体部2	長石等の細砂粒含む	赤褐色	赤褐色	赤褐色	34、41と同	34、41と同
43 P-13	須臾器	口径4.2	須臾器	見込みラセン、体部2	長石・石英・海綿質片含む	赤灰黄色	赤灰黄色	赤灰黄色	33	33

人小南之早野出土土器観察表

番号	出土位置	器種	口径	底径	器高	その他	調査(内)	調査(外)	加工	色調(内)	色調(外)	色調(断面)	回転方向	観計	備考
1	右室3	須臾器 其G	11.8	2.8	2.8	銅管1.8、同ヨコナテ高0.5	ヨコナテ	ヘラケズリ、ヨコナテ	細砂粒含む	明灰色	漆灰黄色	漆灰黄色	反時計方	53	外面磨灰、自然釉
2	19・24・25・50	須臾器 其G	11	2.7	2.7	銅管1.6、同ヨコナテ高0.5	ヨコナテ	ヘラケズリ、ヨコナテ	細砂粒含む、黒色粒	漆灰色	明灰色	明灰色	時計方	52	自然釉
3	表道一頭底	須臾器 其G	12.5	1.6	1.6	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	細砂粒	明灰色	明灰色	明灰色	-	56	外面磨灰
4		須臾器 其G	9.9	3	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	長石・石英、海綿骨片含む	灰色	灰色	漆赤灰色	-	63	
5	75、表11~4X	須臾器 其G	10.7	2.9	2.9	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	細砂粒、海綿骨片含む	灰白色	灰色	明灰色	7	48	
6	P-1	須臾器 其G	11.5	3.4	3.4	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	細砂粒、海綿骨片含む	灰色	漆灰色	明灰色	時計方	59	底面のナデは丁寧で、ヘラマリの痕跡見られず
7		須臾器 其G	11.4	3	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	長石・石英、海綿骨片含む	明灰色	明灰色	明灰色	-	62	
8	6・P-31・須臾表	須臾器 其B	18.6	3.8	3.8	銅管5.6、同ヨコナテ高0.7	ヨコナテ	ヘラケズリ、ヨコナテ	細砂粒含む	明灰色	明灰色	-	時計方	41	
9	4・12・15・21・須臾表上側、須臾表上側	須臾器 其B	20.4	3.3	3.3	銅管4.2、同ヨコナテ高0.7	ヨコナテ	ヘラケズリ、ヨコナテ	細砂粒(石英)含む	灰白色	灰白色	灰白色	時計方	38	
10	右室内7・3	須臾器 其B	13.7	3.2	3.2	銅管2.7、同ヨコナテ高0.3	ヨコナテ	ヘラケズリ、ヨコナテ	2**人の砂粒若干含む	灰色	灰色	明灰色	反時計方	42	
11	P-19、P-21の下、P-54、右室南側、右室3X	須臾器 其B	18.6	3.5	3.5	銅管2.7、同ヨコナテ高0.3	ヨコナテ	ヘラケズリ、ヨコナテ	長石・石英の細砂粒含む	漆灰黄色	漆灰黄色	漆灰黄色	時計方	50	
12	P-53、右室内7・3、表上	須臾器 其B	13.7	4.1	4.1	高台径8.3、同高0.7	ヨコナテ	ヨコナテ	長石粒含む	明灰色	灰色	-	時計方?	46	外面部分的磨灰
13	P-30・39・51、表上	須臾器 其B	16.4	4.6	4.6	高台径10.0、同高0.5	ヨコナテ	ヘラケズリ、ヨコナテ	長石・石英含む	明灰色	明灰色	明灰色	時計方	49	
14	P-14・26・32・34、須臾表上、須臾表上	須臾器 其B	16.8	4.5	4.5	高台径11.4、同高0.6	ヨコナテ	ヘラケズリ、ヨコナテ	細砂粒含む	明灰色	漆灰色	-	時計方	40	
15	P-52、右室1~4X、須臾表西表上、右室内7・3	須臾器 其B	14	4	4	銅管3.2、同高0.8	ヨコナテ	ヨコナテ	細砂粒含む	灰白色	漆灰色	-	時計方	51	器底の須臾頭著
16	P-52、右室1~4X、須臾表西表上、右室内7・3	須臾器 其B	14	4	4	銅管3.2、同高0.8	ヨコナテ	ヨコナテ	細砂粒、海綿骨片含む、黒色粒	漆灰黄色	明灰色	-	-	44	高台磨灰、接合の島の溝あり
17	P-12	須臾器 其B	15.7	3.6	3.6	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	長石・石英含む	明灰色	明灰色	明灰色	反時計方	64	
18	P-6・8・18・27、右室上面南側、右室2・3X、須臾表上	須臾器 其B	22.6	4.2	4.2	銅管3.2、同高0.8	ヨコナテ	ヨコナテ	長石・石英含む	漆赤灰色	漆赤灰色	漆赤灰色	時計方	37	
19	P-14、23・P-47・P-22・P-34・須臾表上	須臾器 其B	15.5	3.6	3.6	銅管3.2、同高0.8	ヨコナテ	ヨコナテ	細砂粒、海綿骨片含む	漆赤灰色	灰白色	赤灰色	-	78	66と同、右室磨灰。磨耗頭著

大 阪 南 芝 草 出 土 土 器 類 考 査 表

番号	出土位置	器種	口径	高さ	その他	調整(内)	調整(外)	胎土	色調(内)	色調(外)	色調(断面)	回転方向	器種	備考
20	前庭部表上、表上	須臾器 高体	15.6	3.1		ヨコナデ	ヨコナデ	長石・石英	灰色	灰色	明灰色	-	66	51之同一類群
21	P-27、前庭表上	須臾器	8.2	4.3		ヨコナデ	ヨコナデ	長石・石英粒、海綿骨片含む	明灰色	灰色	明灰色	-	55	内外面降灰
22		須臾器 平腹	6.7	3.1		ヨコナデ	ヨコナデ	長石粒、海綿骨片含む	淡灰色	淡灰色	淡灰色	-	65	外面降灰
23	P-44、46-57、66の 上、57、表上	須臾器 平腹	6.5	11.3	頸径4.6、体 部径14.5	ヨコナデ	ヨコナデ	灰は夕細砂粒、海綿骨片含む、 クマ、クマ2次スリ	明灰色	暗灰色	暗赤灰色	-	45	口縁部、体部下平 部降灰
24	P-23、5、7、10、11、 20-31の下、33-35、 37-41、48-48の下、 49、49、49、表上、 右蓋ア、	須臾器 長頸部	10	29.2	高径13.5、頸 径8.8、体部 径23.4	ヨコナデ	ヨコナデ	長石・石英含む	明灰色	明灰色	明灰色	-	36	外面口縁部
25		須臾器 平腹	5.6	5.4	体部径14.8	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	細砂粒、海綿骨片含む、 黒色粒	灰色	淡灰色	淡灰色	-	70	
26	右至3区、表上	須臾器 短頸部	5.6	3.6	体部径9.6	ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒含む	淡灰黄色	明灰色	暗赤灰色	-	54	外面降灰
27	前庭部表上、前庭 表上、一4区	須臾器 異型?	4.9		体部径12.2	ヨコナデ	ヨコナデ	石英・長石、海綿骨片含む 右、内面黒色粒	明灰色	灰色	淡灰色	時計方	58	
28		須臾器 鉢?	12	2.9			ヨコナデ	細砂粒含む	灰色	灰色	明灰色	-	57	内外面口縁部
29	P-38-51-61-64-65 -68-69-72-71-74、 75-86の下、右蓋 ア、表上、前庭 内側、	須臾器 横腹	14.3	29.2	頸径11.6、体 部径(長径)14.7 2.3(短径)25 2	ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒含む	暗灰色	淡灰色	淡赤灰色	-	43	
30	前庭南東、前庭部 表上	須臾器 平腹	13.8	22.1	体部径26.5	ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒、海綿骨片含む	灰色	暗灰色	明灰色	-	81	
31	P-9-28、右至3区 前庭表上	須臾器 鉢	13.8	8.9	体部径12.4	ナデ	ナデ	長石・石英、海綿骨片含む 2mmの長石・石英、 海綿骨片含む	黄褐色	黄褐色	黄褐色	-	47	
32	前庭表上	須臾器 平腹				ナデ	ナデ	長石・石英、海綿骨片含む	灰白色	灰白色	灰白色	-	67	生焼け



北より



南より



真上より





調査前全景



盗掘杭の状況

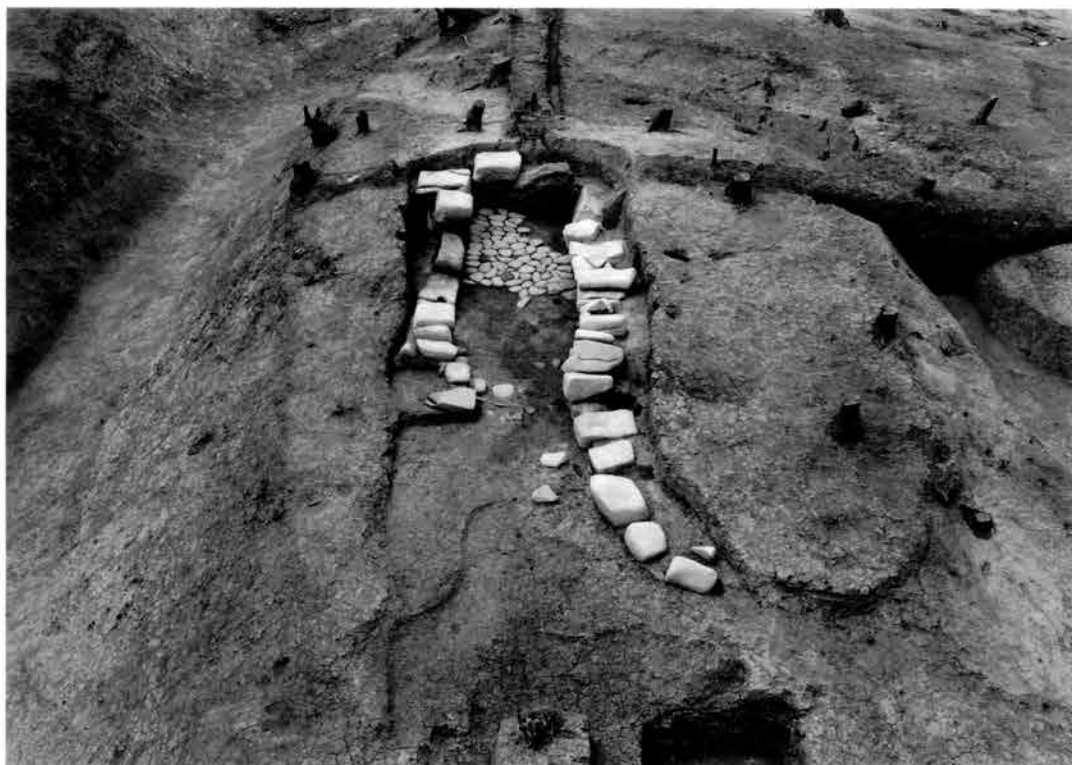
PL  
4  
1号墳



全 景



全 景



墳丘全景(開口部より)



墳丘全景(奥壁より)

PL  
6  
1号墳



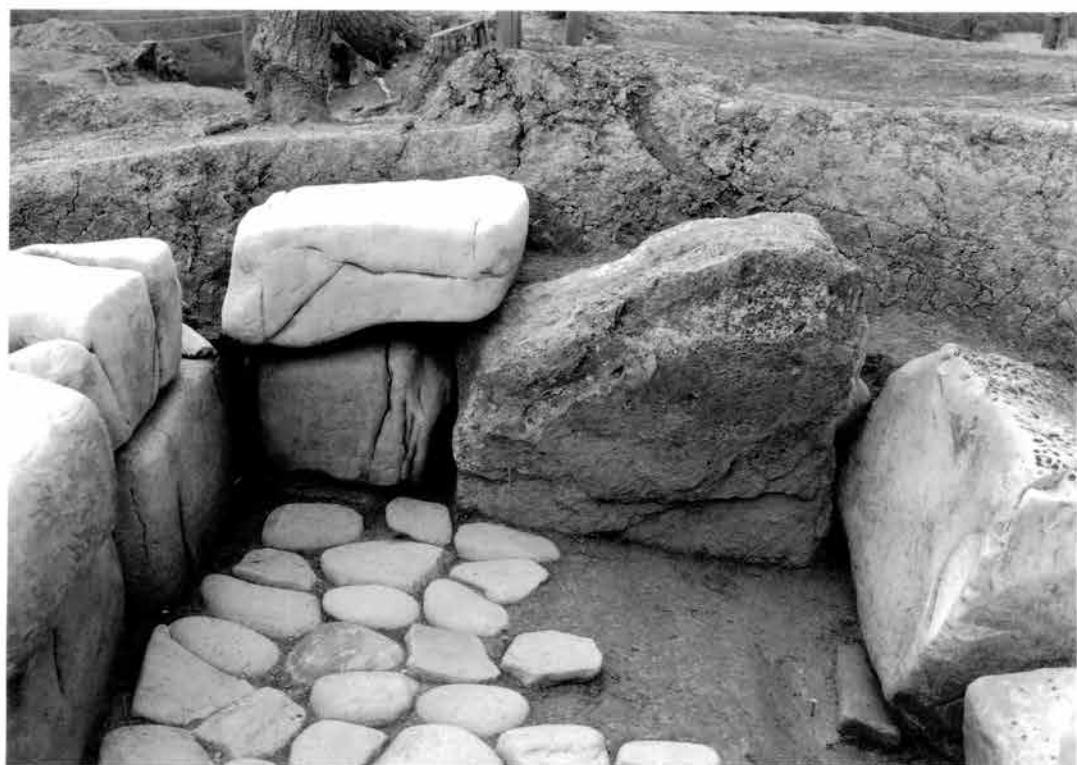
墳丘全景



石室全景(開口部より)



石室全景



奥壁

PL  
8  
1号墳



左側壁(奥より)



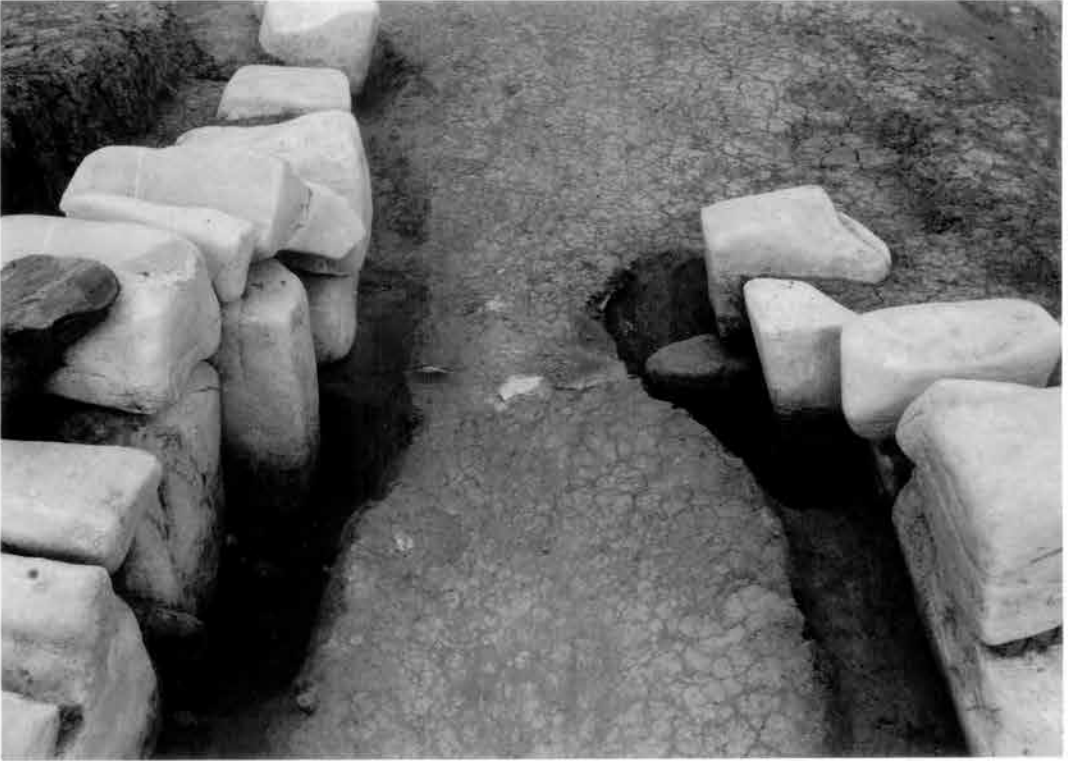
左側壁(開口部より)



玄門部



右側壁玄門



玄門部たちわり



奥壁たちわり





左側壁たちわり



右側壁たちわり



遺物出土状況(開口部から)



遺物出土状況(奥壁から)



遺物出土状況(土器群下)



遺物出土状況(土器群下)

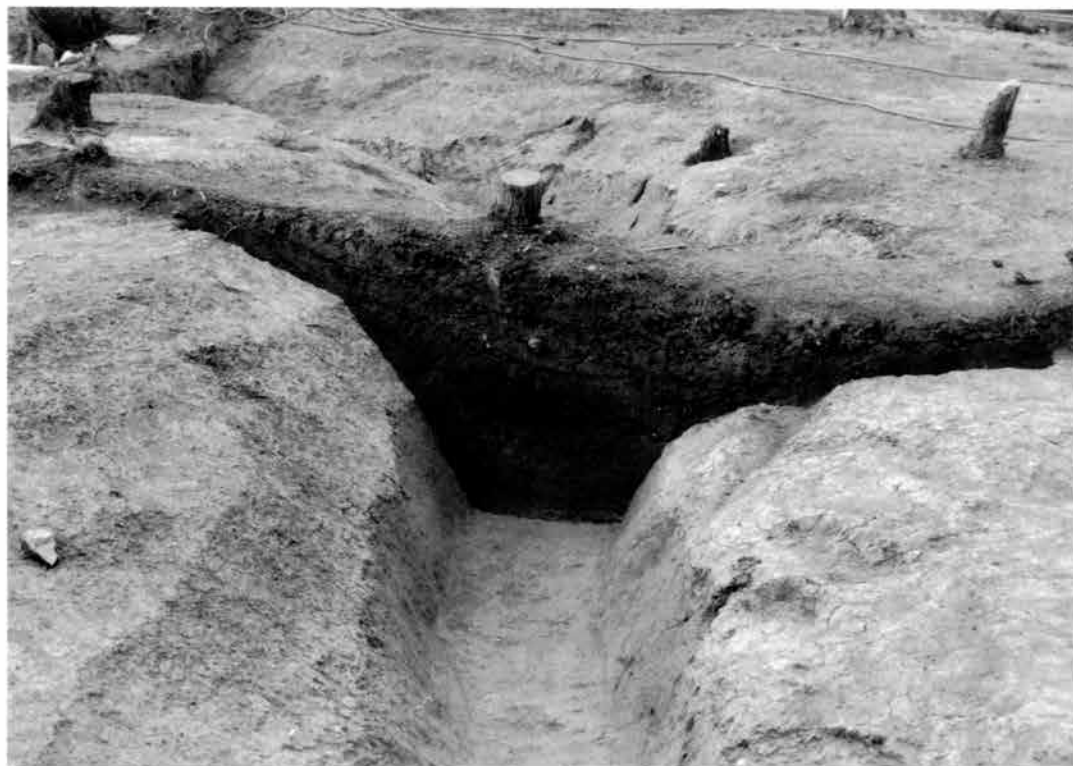
PL  
14  
1号墳



遺物出土状況(土器群上)



遺物出土状況(土器群上)



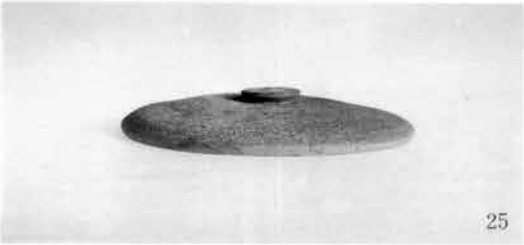
周溝堆積状況



石室内埋土状況

PL 16  
1号墳出土遺物(1)







32



34



33



33

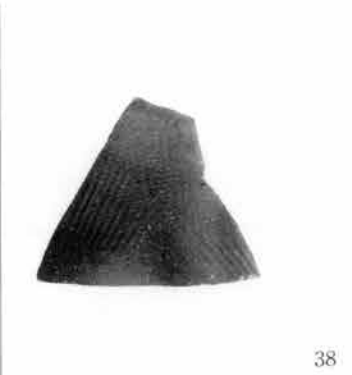


35



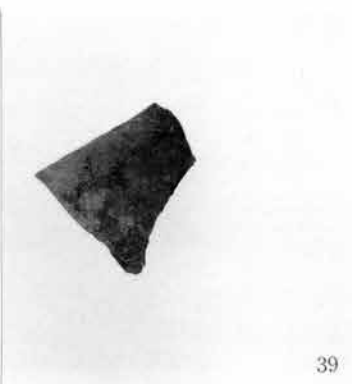
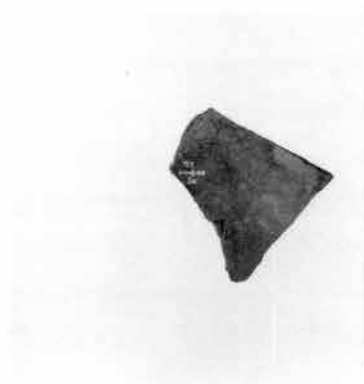
36





38

37



39

40



41



42



43



42暗文

PL  
20  
2号墳



調査前全景



調査前全景



全景



全景

PL  
22  
2号墳



墳丘全景



墳丘全景



墳丘全景



石室全景(開口部より)

PL  
24  
2号墳



奥壁



奥壁隅(右)



奥壁隅(左)



右側壁(奥より)



右側壁(開口部より)

PL  
26  
2号墳



左側壁



左側壁





遺物出土状況

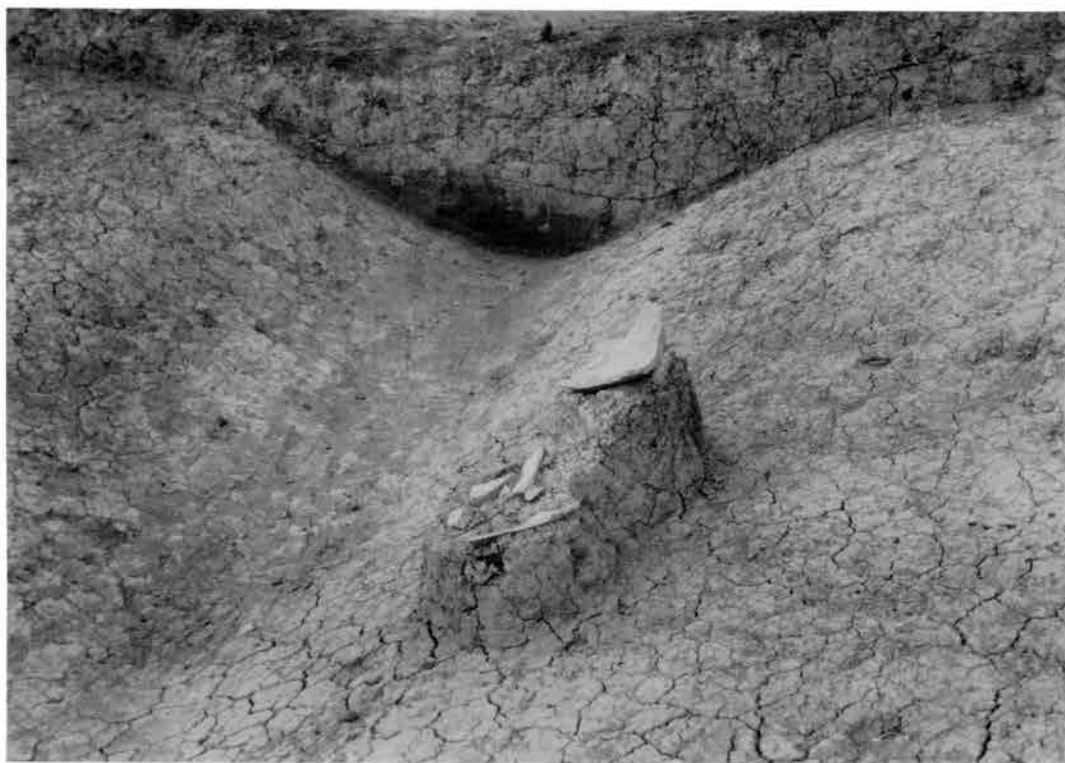


遺物出土状況

PL  
28  
2号墳



遺物出土状況



周溝遺物出土状況



石室内埋土状況



★道部土層



墳丘土層(石室西側)



墳丘土層(石室南側)



盛土除去



盛土除去

PL  
32

2号墳出土遺物  
(1)



1



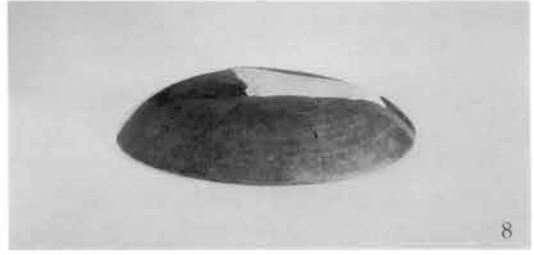
2



3



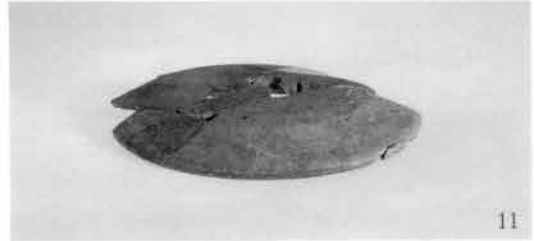
4



8



10



11



5



6



20



7



17



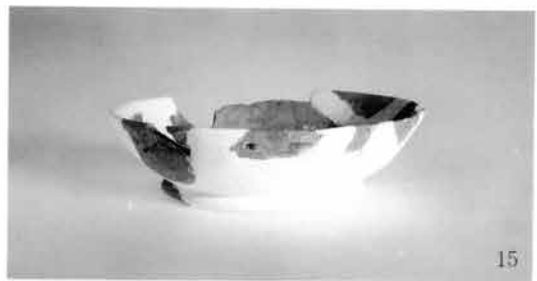
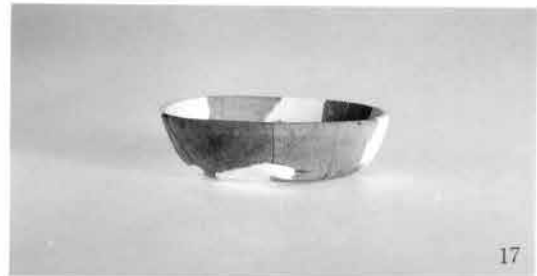
4



20



19杯部



19



18



9脚部



21



25



22



28



27



26



23



24



30



32



29



31



耳飾



---

---

## 大島南古墳群発掘調査報告

発行日 1993（平成5）年3月31日

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター  
石川県金沢市米泉町4丁目133番地  
〒921 電話（0762）43-7692番代

印刷 ヨシダ印刷株式会社  
〒921 金沢市御影町19番1号

---

---



